



CSRセミナー録

「CSR！次のステップへー持続可能な社会の創出のためにー」

2008年度
連続セミナー



2009年3月

立教大学ESD研究センター

CSRセミナー録

「CSR！次のステップへー持続可能な社会の創出のためにー」

2008年度
連続セミナー

セミナー講師

- | | |
|-------|--|
| 阿部 治 | 立教大学 ESD研究センター センター長
社会学部/大学院異文化コミュニケーション研究科 教授
(特活)ESD-J 代表理事 |
| 川嶋 直 | 立教大学 ESD研究センター CSRチーム主幹
大学院異文化コミュニケーション研究科 特任教授
(財)キープ協会 常務理事 |
| 岡本 享二 | 立教大学 ESD研究センター CSRチーム研究員
首都大学東京 大学院ビジネススクール 教授
プレーメン・コンサルティング(株) 代表取締役 |
| 福田 秀人 | 立教大学 ESD研究センター CSRチーム研究員
大学院21世紀社会デザイン研究科 教授
放送大学 大学院政策経営プログラム 客員教授 |
| 中西 紹一 | 立教大学 ESD研究センター CSRチーム研究員
大学院21世紀社会デザイン研究科 講師
(株)プラス・サーキュレーションジャパン 代表取締役 |
| 中野 民夫 | 立教大学 ESD研究センター CSRチーム研究員
大学院21世紀社会デザイン研究科 講師
(株)博報堂 コーポレートコミュニケーション局
ワークショップ企画プロデューサー |
| 新谷 大輔 | 立教大学 ESD研究センター CSRチーム研究員
大学院21世紀社会デザイン研究科 講師
(株)三井物産戦略研究所 研究員 |

記録

- | | |
|-------|-----------------------------|
| 小野原功輔 | 立教大学 大学院文学研究科教育学専攻 博士課程前期課程 |
|-------|-----------------------------|

C o n t e n t s

もくじ

はじめに

イベントレポート

第1回セミナー 司会:川嶋直	1
イントロダクション 持続可能性の7つの鍵 — CSRへのアプローチ —	
第2回セミナー 講師:岡本享二	11
CSRの本質とCSRによる競争優位 — 「企業責任」論を超えた(変革)への視点 —	
第3回セミナー 講師:福田秀人	24
CSRの推進は、重要かつ至難の課題	
第4回セミナー 講師:中西紹一	36
対話からはじめる街づくり — ESDの視点からCSRの在り方を再考する —	
第5回セミナー 講師:中野民夫	70
ESDと参加型の場づくり	
参加者の声① 成果・発見・理解	91
参加者の声② セミナー所感	94
参加者の声③ 今後の課題および反省点	98
参加者の声④ 実践の現場から	101

はじめに

立教大学ESD研究センター CSRチーム主幹 川嶋直

立教大学ESD研究センターが2007年3月に発足して間もなくCSRチームの研究者たちも研究会をはじめた。中心となって集まったのは、センター長の阿部治、CSRチーム主幹の川嶋直の2人の立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の教員をはじめ、岡本享二(プレーメン・コンサルティング(株) 代表取締役)、中西紹一((株)プラス・サーキュレーションジャパン 代表取締役)、中野民夫((株)博報堂 コーポレートコミュニケーション局)、福田秀人(立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科 教授)、それに2008年度から新谷大輔((株)三井物産戦略研究所 研究員)が加わった7人だ。

この7人で、2か月に1回ほどの研究会を継続し、スウェーデン、イギリス、ドイツなどのCSR事情の調査研究なども行いながら、CSRを持続可能な社会づくりのためにどのように位置づけるのかを主たるテーマとした、公開講座(連続セミナー)を今回実施することになった。

この連続セミナーを実施するにあたり、このセミナー自体がESD的になるようにいくつかの工夫を試みた。毎回2時間15分のセミナーを5回、大学の教室で実施するという時間的・空間的制約の中で、工夫の効果がどれほど出せたかは疑問点もあるか、以下に実施した工夫を書く。

● **参加者同士が、講師が、参加者のことを知る「旗揚げ世論調査」の実施(1回目)**
参加者全員に5色の色カードを配布して、8つの質問をして答えてもらった(2ページ参照)。参加者の属性やCSRへの関わり、今回のセミナーへの期待などを、講師が、参加者同士が知ることが出来た。

● **全講師の顔見せをし(1回目)、可能な限り全講師が毎回参加する(全回)**
初回に全講師が参加して、参加者に講師の多彩さとその違いについて知ってもらうために、パネルディスカッション方式でそれぞれの紹介&それぞれのCSR感についてキーワードを提示してもらって話してもらった。(6ページ参照)。

また、次年度以降のこうしたセミナーへの改善を全員で協議できる下地を作るためにも、講師は可能な限り全回参加をしてもらった。

- ESDについて、CSRについての概論の講義（1回目）

「ESDとは何か」「CSRとは何か」が今回のセミナーの入口でもあり、出口でもあった。参加者層を限定しなかったために、企業のCSR担当者、NPOスタッフ、学生など多様な層の参加者構成となったこともあり、第1回目のセミナーで、阿部よりESDの概論、岡本よりCSRの概論を講義した。

- 異なった視点からCSRの講義（2～5回目）

立教大学ESD研究センターCSRチームの研究者は、そのほとんどが大学以外の役割や所属を持つものであり、それぞれのバックグラウンドも非常に多様である。この多様さを生かして、多角的な視点からESD的なCSRの理解へのアプローチを試みた。

- 講義を聞いた後に、参加型の学びの場を作る（毎回）

約1時間の講義のあとは、様々なかたちで参加者同士が話し合う、あるいは参加者と講師が議論する時間を設けた。参加者が2人で3人で10数人でと人数を代えながらのディスカッションをする、あらかじめ記入シートに感想を書いた後で、あるいは記入せずに上記人数でディスカッションをするなど様々なシェアの方法を用いた。

- 終了時にリアクションペーパーを提出、次回にその質問に前回の講師が答える（毎回）

毎回終了時にはその日の体験を振り返る「リアクションペーパーの記入」を行った。主にその日の講義を行った講師がこのペーパーを読み、翌週のセミナー開始冒頭にリアクションペーパーにあった質問に答える仕組みにして、先週のおさらいをしてから始めるという感じにもなった。

以上のような、「できるだけ一方的な講義の終始しないセミナー」への工夫をしていった。今年度の成果を生かして、2009年度にもさらに充実したセミナーを開催すべく、準備を進めているところである。

10/3 (金)

連続セミナー『CSR！次のステップへー持続可能な社会の創出のためにー』第1回記録

題目：イントロダクション 持続可能性の7つの鍵ーCSRへのアプローチ

日時：2008年10月3日（金）18：30～20：45

場所：立教大学池袋キャンパス5号館5401教室

講師：阿部治/岡本享二/新谷大輔/中西紹一/中野民夫/福田秀人

司会：川嶋直

司会 皆さん、ようこそおいでいただきました。ただいまより、立教大学ESD研究センターが主催する、連続セミナー『CSR！次のステップへー持続可能な社会の創出のために』、全5回連続のセミナーを開始いたします。私は、立教大学ESD研究センターCSRチーム代表の川嶋と申します。この5回シリーズ全体の進行役をつとめさせていただきます。全5回、毎回6時半開始です。1～4回目は5401教室、5回目は太刀川記念館3階ホールで行います。それでは、このセミナーを始めるにあたり、立教大学ESD研究センターのセンター長の阿部治よりご挨拶をさせていただきます。

1. 開会の言葉（阿部治）

本日はお忙しいなか、お集まりいただきありがとうございます。ESDは初めてという方がいらっしゃるのではないのでしょうか。ESDという言葉よりCSRという言葉の方が、馴染みがあるのではないかと思います。ESDは「持続可能な開発のための教育」と言っておりますが、「持続可能性」「持続可能な社会」を作るために、あらゆる教育学習の場、学校内外、職場、家庭などで、どのような力をつけていくのか、そのための内容や方法、各ステークホルダーの役割などをESDで考えていくこととなります。2002年のヨハネスブルグサミットにおいて、日本のNGOと日本政府が共同で働きかけ、2005年から「ESDの10年」が始まりました。ESDにとどまらず「持続可能性」というものは緊急の課題であり、大学として「持続可能性」や「持続可能な社会」にどう関わっていくか、それが大きな大学の使命となっています。特に1980年代以降その重みが大きくなり、1990年代に大学の役割がますます大きくなってきたなかで、大学として『サステナビリティ』にどう関わっていくかということが問われています。大学の教育のなかに「サステナビリティ」に関連する講義を入れていく、あるいはプロジェクトを作っていく、こうした動きは1970年代からすでに始まっていました。サステナブルな社会を作っていくための技術開発や研究も1970年代から始まっていま

たが、遅々として進んできませんでした。そのような背景のなかで、「持続可能性」ではなく「持続不可能」な事態が年々進行し、2000年あたりからあらためて大学の果たす役割がいろいろところで議論されてきました。特に、2002年のヨハネスブルグサミットにおいて、「持続可能な開発」における高等教育の果たす役割がウブント宣言として提案され、国際的な取り組みの流れを作ることになったのです。さらに、ESDの10年が始まり、再度、大学が果たす役割、持続可能な社会にどう貢献していくか、そのことが問われています。

日本政府もいろいろな大学を「持続可能性」の拠点にしていこうという動きを始め、立教では先駆けてESDに特化した、ESDに取り組む日本初の研究センターを2007年の3月に作りしました。ちょうど今日、北海道教育大学釧路校にも地域におけるESD指導者の育成を目指したESD推進センターが作られました。海外においてもオーストラリアやイギリス、スウェーデンなどの大学においてもESDに関するセンターが設置されたと言います。私どものセンターは、これらの国内外のセンターと連携し活動を進めてゆくつもりです。また、センターのプロジェクトのひとつとしてCSRがあります。私どもの研究対象は、アジア太平洋を中心に、欧米研究機関と協働し、アジア太平洋の「持続可能性」のための教育をどう進めていくかを視野に入れていきます。これらに関わるステークホルダーは、たくさんあるのですが、そのひとつとして企業があります。持続可能な社会の構築、すなわちESDにとって企業は欠かすことのできない、必要不可欠なパートナーです。企業の中でのCSRはまさにESD、イコールであると思っています。「持続可能な社会」のために企業がどのような視点で社会貢献できるのか、あるいは事業活動としてどう対応していくのか、それらを企業において推進していく指導者をどう育成するか、来年度はそのようなプログラムを開発し施行していきたいと考えておりまして、今期はその予備的な活動として今回の5回の連続セミナーを計画いたしました。

今回、皆さんが参加してくださるなかで、双方向でやりとりをしながら、私どもの考えているようなESDの指導者養成、

企業における指導者養成、その中身を充実させていきたいと思っております。この講座を通じて、また講座外においてもいろいろとお願いすることがあるかと思いますが、皆さんと一緒に「持続可能な社会」のためにできることを探っていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

司会 ありがとうございます。今日は5回連続シリーズ中の第1回なので、ESD研究センターのCSRチームのメンバー全員がそろっています。次回以降はそれぞれひとりずつ、主たる講義をしていただきますが、今回は全員参加ということで、全体像を見ていきたいと思っております。あとでゆっくり自己紹介をしていただきますが、まずは皆さんに顔だけでも見えていただいて、こういう人がいるんだなど知っていただきたいと思っております。それでは、先生方はそれぞれのお名前の書いてある紙の横に立ってください。



(参加者側から向かって左側から)

- 2回目の主任講師のプレーメン・コンサルティングの岡本享二さんです。
- 21世紀社会デザイン研究科の福田秀人さんは第3回目の担当です。
- 博報堂コーポレートコミュニケーション局の中野民夫さんです。中野さんは最終回のレクチャーをしていただきますが、毎回の講義の後半をこちらと皆さんとの双方向になるように、また皆さん同士が議論していけるような場作りもお願いする予定です。中野さんはワークショッププロデューサーという別の肩書きもお持ちですので、そういった面もお願いする予定です。
- プラス・サーキュレーション・ジャパンの中西紹一さんです。4回目の講師をお願いいたします。
- 三井物産戦略研究所の新谷大輔さんです。今回はご登壇の予定になっておりませんが、最終回を除いて、参加していただく予定です。
- 立教大学の阿部治さんです。

2. 旗揚げアンケート、および、初回進行スケジュールについて

司会 会場にどんな方々が来ているかということをご皆さんも私どももお互い知るために、これから通称旗揚げアンケートというものをやらせていただきます。私がこれから質問しますので、該当するものの手元の番号札をあげてください。

Q 1. 立教大学池袋キャンパスに来るのは初めてですか？

- | | |
|-------------------|-----|
| 1) はい | 11名 |
| 2) 2回目 | 4名 |
| 3) 3回目以上 | 15名 |
| 4) ここで学んで(働いて)います | 10名 |

Q 2. 立教大学ESD研究センターのイベントへの参加は初めてですか？

- | | |
|----------|-----|
| 1) はい | 35名 |
| 2) 2回目 | 7名 |
| 3) 3回目以上 | 2名 |

Q 3. あなた御自身のことを教えてください(複数回答あり)

- | | |
|--------------|-----|
| 1) 会社員(経営者も) | 23名 |
| 2) 学生(院生も) | 13名 |
| 3) NPO・NGO | 4名 |
| 4) 教員他教育関係者 | 2名 |
| 5) その他 | 7名 |

Q 4. 今回講師7名のうち何人知っていましたか？

- | | |
|------------|-----|
| 1) 一人も知らない | 5名 |
| 2) 1~2人 | 25名 |
| 3) 3~4人 | 8名 |
| 4) 5~6人 | 2名 |
| 5) それ以上 | 1名 |

Q 5. CSRへの関わり度調査



- 1) 専業です（ほぼ専業も含む） 4名
- 2) 仕事の一部 18名
- 3) 学ぶ対象 23名
- 4) その他 1名

Q 6. CSRへの関わり年数

- 1) 関わりがない 6名
- 2) 1年未満 14名
- 3) 2～3年 12名
- 4) 4～5年 6名
- 5) 6年以上 4名

Q 7. 今回何に惹かれて参加しましたか？（複数回答可）

- 1) 立教大学 3名
- 2) ESD 24名
- 3) CSR 34名
- 4) 講師の名前 13名
- 5) その他 1名

※ 3つ挙げた人が5人、2つ挙げた人が9人。

Q 8. 今回何を期待して来ましたか？（複数回答可）

- 1) CSRへの学び 31名
- 2) ESDへの学び 20名
- 3) 講師の話 23名
- 4) ネットワーク 13名
- 5) その他 2名

※ 4つ挙げた人が5人、3つ挙げた人が6人、2つ挙げた人が8人。

司会 講師の方々、旗のカウントありがとうございました。普通、講義形式だと一方的なお話になるのですが、後半最後の方に参加者の皆さん同士で少しディスカッションをさせていただけるような時間を作ろうと思っています。今日の流れはこのあとミニレクチャーを2つ行います。ひとつは阿部さんからESD入門、続いて岡本さんからCSR入門の話をそれぞれ15分していただきます。10分の休憩を挟んだあとに、講師全員に聞くようなパネルディスカッションを40分あまり行います。最後に皆さん同士で少人数のディスカッションをしていただきます。そして、毎回終了前の10分ほど皆さんにリアクションペーパーを記入していただき、私どもは皆さんのフィードバックをいただいて、次回以降のセミナーに活かしていきたいと考えております。

3. ESD入門（話し手：阿部治）

テーマ：「持続可能な開発のための教育とは？～“人づくり”の視点で、企業、地域、地球の未来を考える～」

ESDとは何か、ESDとCSRの兼ね合いについてお話しします。

私はESDを提案する側であったということで、国連のESDの10年を開始するにあたり、日本のESDネットワークであるESD-J（持続可能な開発のための教育の10年推進会議）を2003年に立ち上げました。環境関係だけではなく、いろいろなNGOや団体、大学、企業などが100団体以上加盟しています。昨年、経団連主催でESDのお話をしたときのパワーポイントを使ってお話しします。



1) ESDの流れ

ESDの流れを概観します。ESDはそもそも環境教育から発展してきたものです。おさらいですが、1972年に世界各国114カ国の代表がストックホルムに集まり、国連人間環境会議が開かれ、環境教育が世界に勧告されたのが、環境教育の国際的な取り組みの始まりです。同時にローマクラブの「成長の限界」が出された年でもあり、エネルギー、食料、廃棄物、人口などの問題を解決しない限り、人類の持続的成長はあり得ないと予想したものでありました。1980年代になると、非常に複雑であり、様々な課題が密接に関係している地球環境問題の存在が指摘されるようになり、地球的な課題教育、つまり環境教育や開発教育や人権教育、平和教育などの様々な地球的な課題のための教育が統合されていく流れが出てきました。1982年、国連環境計画（UNEP）管理理事会特別会合であるナイロビ会議において、日本政府代表が国連のなかにWCED（環境と開発に関する世界委員会）設置を提案しました。この委員長にノルウェーの首相であったブルントラントさんが選ばれ、それゆえブルントラント委員会といわれるのですが、1987年にWCEDから「我ら共有の未来」という報告書が出され、そのなかで“Sustainable Development”という

言葉が出てくることになりました。この委員会は、日本政府が提案した国連委員会であり、資金も日本政府が出していました。その5回のワークショップの最後の会合は日本で開かれました。今、世界で取り組まれている「持続可能な開発」の生みの親は日本だといっても過言ではないのです。そのわりに日本のプレゼンスがないというのは残念です。そしてSD (Sustainable Development) を具体化するために、1992年に地球サミットが開かれ、「アジェンダ21」が作られます。このサミットにおいて、気候変動枠組み条約や生物多様性条約など、非常に重要な条約がまとめられています。「アジェンダ21」の第36条が教育に関する部分ですが、従来の環境教育プラス開発を意識した教育が非常に重要だと指摘されます。つまり、広い意味での環境教育がここで出されていきます。

1997年にはギリシャ・テサロニキでの会議で"Education for Sustainability"が国際的に宣言され、持続可能な世界あるいは社会に向けた教育が世界に向けて提唱され、これが世界で最初のESDの訴えになりました。その後、CSD (持続可能な開発委員会) が国連に設置され、1992年の「アジェンダ21」を具体化していくために、例年5月に国連でCSD会議が開かれ、環境教育やEFS (Education for Sustainability) に関する討議もなされています。2000年には国連ミレニアム会議が開かれ、ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals : MDGs) が決められ、同時にダカール行動計画で識字 (リテラシー) 教育の計画が作られました。このMDGsとダカール行動計画が、現在国連がもっとも大事にすすめている仕事であり、ESDの背景になっています。2002年のヨハネスブルグサミットにおいて、日本のNGOと政府が共同で「ESDの10年」を提案し、その年の国連総会で決議されました。そして、2003年にESD-J (「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議) を設立し、2005年から「ESDの10年」が始まりました。ユネスコが「ESDの10年」の国連の担当部署として任命され実施計画を作り、2006年に日本政府も実施計画を作り、そして2007年、私どもが立教大学ESD研究センターを作りました。2009年3月には、中間年報告会がドイツのボンで開かれます。

2) ESDの視点

それでは、「持続可能な社会」とは何か？

例えば食の問題がありますが、様々な兼ね合いのなかで起きており、このつながり合った様々な課題に同時に取り組んでいくということが求められます。ESDの考え方はまさに同じことがいえ、あるひとつの問題の背景には様々な要素が網の目状に絡み合っていることを認識し、そのつながりを見出し、従来ばらばらで行っていた取り組みをESDという視点で統合的に見ていくことが必要です。SDという視点でみていくと、環境、経済、社会のバランスが必要といえます。私た

ちの基盤である自然環境、私たちが生きていくために必要な経済活動や公正な社会、このバランスの上に私たちの生活が成り立っています。自然環境の保全、経済開発、社会的公正、平和、人権、民主主義といったことが大事だということです。

さらに起きている大きな問題は、グローバル化が進み、世界の出来事が身近になっているにもかかわらず、世界で起きていること、日本で起きていることや我々の生活、そのつながりが見えなくなっていることです。「持続可能な社会」を作るためには、これらのつながりを見えるようにしていかなければなりません。そして、社会を構成する人の価値観や行動が変わらなければ、社会は変わりません。「持続可能性」に対する価値観、問題解決型の思考力、社会の問題を変えようとする意志が非常に大切になります。経済と社会と環境のバランスをとっていく土台として、ESDという教育があります。

それでは"ESD"とは何か？"Education for Sustainable Development"の訳ですが、2006年に日本政府が作った「ESDの10年」の国内実施計画があります。その計画のなかで、「「持続可能な社会」の実現を目指し、私たち一人一人が世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、よりよい社会づくりに参画するための力を育む教育」であると定義されています。私自身はこれらをまとめて、「人々を「持続可能な社会」の構築に主体的に参画させるためのエンパワーメント」と位置づけています。

では、どんな教育なのか？それはあらゆる場所で行われます。学校だけでなく、企業も含まれます。分野としては、「持続可能な社会」につながる課題というのは、お互いのつながり、くらしとのつながりを意識しながら総合的に扱うことになります。

ESDには、それに関わる様々な教育課題があり、環境教育、平和教育、人権教育、開発教育、ジェンダー教育、多文化共生教育、福祉教育などのアプローチで問題を解決するために活動しています。自然環境の持続性、つまり生態系の保全を強調する環境教育だけです。同様に、人権教育、平和教育、開発教育、それぞれ固有の目標を持っています。しかし、共通するものがあります。学びの方法、価値観、育む力です。参加体験型的手法、継続的な学び、これらは共通の学びの方法です。人間の存在はかけがえのないものである、自然は人間の生存にとって欠かすことのできないもの、これらが共通の価値観です。あるいは、ESDを通して学ぶ力というものに、批判する力、つなぐ力、コミュニケーション能力などがあり、これらは共通するものです。

3) 企業とESDの接点とは？

企業とESDの接点は何なのか？

「環境」から「サステナビリティ」へ、という課題があります。環境は従来からISO14000で強調されてきました。し

しかし環境は「持続可能な社会」のベースですが、自然環境の持続性だけでは「持続可能な社会」を作ることはできません。そこには、人間集団という社会があり、経済活動があり、環境問題への対応から持続可能な社会づくりへの貢献が必要です。環境報告書、サステナビリティレポート、ISO14000や26000、環境教育やESD、それらを通じて社員一人ひとりのCSRマインドを育てていくこととなります。日本だけでなく世界中でいろいろな活動が取り組まれています。あらゆることにCSRマインドを立てていき、企業の姿を「持続可能な社会」のニーズにフィットさせていくことが必要です。例として3つお話をします。①社内的な取り組みとしては、社内の人材育成にESDを取り込んでいく、②対外的には社会貢献として地域のESDに貢献していく、③社内と地域の間において社員が主体的に地域活動に関わっていく、このようなことが挙げられます。ESD-JはESD研修をある企業集団に対して行っています。立教大学ESD研究センターとして、こういったものを概観、俯瞰しながら、行うべきものを作っていくと考えています。地域においては社員のボランティア参加支援や出前授業などが行われています。地域のESDを支えていくために、資金的な支援や技術的な支援、人材育成など多方面な活動を行っています。

ESDの10年が始まり4年、残り6年、今後どう作っていくのか？私どもはESDを「未来をつくる教育」と捉えていますので、このような視点でESDを捉えていければと思っています。

司会 ありがとうございます。それでは、引き続き岡本さんをお願いします。岡本さんには来週の講座をお願いしますが、来週への振りということで、CSR入門としてお話をさせていただきます。

4. CSR入門（話し手：岡本享二）

1) 自己紹介

皆さん、こんばんは。現在、首都大学大学院と東北大学大学院で教えており、立教大学ESD研究センターではセンターフェローとしてCSRチームで活動しています。IBMに33年間勤め、14年間アメリカ本社のコーポレートファイナンス部門にいました。日本IBMに戻ってから環境CSRに取り組むようになりました。プレーメン・コンサルティングでは、生態系・生物多様性に特化したコンサルティングを行っています。

企業においてCSRという動きが始まったのは、日本の例だと1996～97年になりますが、ジョン・エルキントン氏が提唱した、財務一辺倒ではなく、社会に対する公平性・公正性・公明性、環境への対応を含めて企業の活動を捉えようという「トリプル・ボトムライン」という考え方があげられます。

私自身は4年前に「トリプル・ボトムライン」だけでは不十分だということで、「人間」と「生態系」を加えて、「ペンタゴンネット」という言葉を作りました。今年の2月にジョン・エルキントン氏のところへ行ったところ、氏自身もすでにトリプル・ボトムラインとは言ってないとのことでした。いろいろな要素が出てきたため、もはや必ずしも3つではCSRを表せないであろうと思います。

CSRというのは「持続可能性」、「サステナビリティ」を高めるといいますが、突然出てきた学問ではなく、いろいろな流れの中から出てきています。企業が利益を上げたときに行うメセナ活動、企業倫理、環境経営などから発展しています。環境経営に関しては、最初は環境を経営に採り入れることが企業にとって重荷であると思われていましたが、今や全く反対になっています。環境に配慮した製品しか売れない、環境に配慮した製品を作れば使用する部材やマテリアルのコストを抑えることができる、またエネルギー消費も少なく済むというように、今では環境経営は完全に利潤を生んでいます。しかしCSR経営は、これから順々とお話をしていきますが、まだまだ十分ではありません。だからこそ難しい一面があります。また、「市場の変化による変革」という流れ、江戸時代からの家訓「三方よし」という考えなどからもその流れを見ることができます。CSRのなかで生物多様性や生態系が忘れられがちですが、これは非常に重要であります。このことが経営にも非常に有益であるということは、来週の講義の中で詳しく述べていきます。

先進国の消費のあり方も問題です。あまりにもたくさんものを使い過ぎています。ある先住民族の生活は、我々の生活で使っているエネルギーの1000分の1で成り立っていると言われていています。私個人の考えでは、私たち日本人が現在の生活で使っている物質の10分の1で足りるのではないかと思います。私は現在68キロで、背が175cmあるのですが、以前82キロありました。2年前に33年間勤めたIBMを辞めたとき、入社時の64キロからなぜ82キロになったのか考え、元に戻そうと思いました。現在68キロです。非常に快適です。お酒もやめ、タバコも一切吸っていません。2月からは、動植物の育て方がひどいので、魚は食べますが、ベジタリアンに近い生活になりました。安い卵もあれば、高い卵もある、一体何を食べて卵ができていのかわからなくなり、卵も最近食べたくなくなりました。そういうことを追求していくと、体重も減り、持ち物も減らすようになりました。先進国の消費のあり方は面白いパートなので、のちほど詳しくお話をしていきたいと思っています。

2) 現在のCSRへの疑問

今のCSRの宣伝は広告の類いに成り下がり過ぎています。3～4年前アメリカから来たLOHAS (Lifestyles Of Health

And Sustainability) という考え方は、つつまじやかな生き方をしようというすばらしい生活様式でありながら、日本ではある商社とコンサルティング会社が商標登録し、大きな非難を受けました。結局日本でLOHASがどう展開したかという、LOHASなワイン、LOHASなレストラン、LOHASな旅行と、LOHASの本来の理念とは全く逆に、カッコいいライフスタイルということで売り込んできました。CSRにそういう面が見えるのではないかということで、CSRの原点、CSRの本質を追究していこうということが私のテーマになります。

結局、何をすればいいかという、CSRを俯瞰的に捉えること、CSRにもマネジメントシステムが必要だということ、生態系からいろいろなことを学ぶということを提案していきたいと思います。

CSRを俯瞰的に見るために三角チャート（p21参照）を作りました。現在日本で言われているCSRは三角形の一番下の部分ですが、この部分は法律や条例という正解がきちんと存在している問題であり、欧米ではすでにCSRの中には含まれていません。確かにリスクマネジメントという面では、企業がリスクマネジメントに対応しないことによってコストが発生するので、CSRに含めていますが、基本的に法律や条例でガードされている部分はCSRに含めていません。

真ん中の部分はNice to haveという部分ですが、規制や法律ではないけれど、社員に対していい人事施策を作れば、いい人材が集まるように、最初はお金がかかりそうに見えますが、企業がお金を出せば必ず見返りがあり、会社のブランドイメージの向上につながります。

私のCSRは、三角形の一番上の部分、貧困撲滅、生物多様性の保護、先進国の消費のあり方、この3つを追求することにあります。この部分は来週詳しくお話します。

14年間のIBMのコーポレートファイナンスに在籍した経験が、のちの環境・CSRへと目を開かせてくれました。

CSRという学問は、4年制の大学を出てすぐ学べるような学問ではなく、むしろ皆さんのように、10年、20年、場合によっては30年、生活や会社での実務経験を体験した方こそ見えてくる学問です。東北大学でも3年間教えてきましたが、大学から進学してきた学生のレポートと、社会人を経験してきた人たちのレポートは全く違います。大学からそのまま上がってきた学生のレポートはだいたい同じです。しかし経験者の方のレポートからは私も学べるのです。私は委員会や大学に関わっていますが、知識があるから呼ばれているのではなく、私に好奇心があるからいろいろなものを追求したい、そして皆さんに情報を発信することによって、皆さんから10倍の情報をもらっています。

今回の連続シリーズにいろいろな先生がいらっしゃいます。今、この会場に47名の方がいらっしゃいます。今回この5週

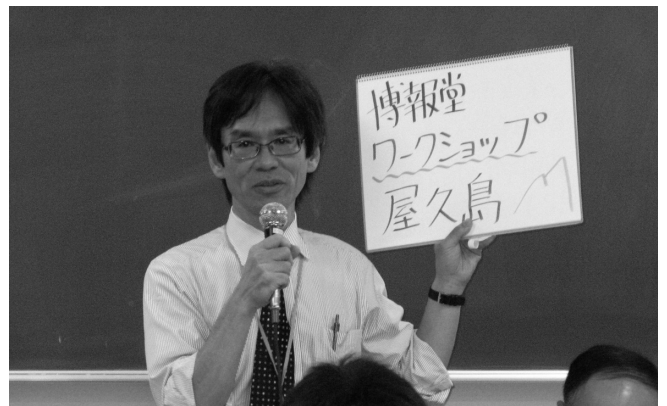
間で一番勉強するのは自分だと思っています。それくらいいろいろなことに好奇心を持っていて、皆さんのひとつひとつの質問に興味を持っています。この講師陣に負けないように、是非皆さんに吸収していただきたいと思います。

司会 ありがとうございました。

5. フリップボード・ディスカッション

第1問：「自己紹介」3つのキーワードを使って

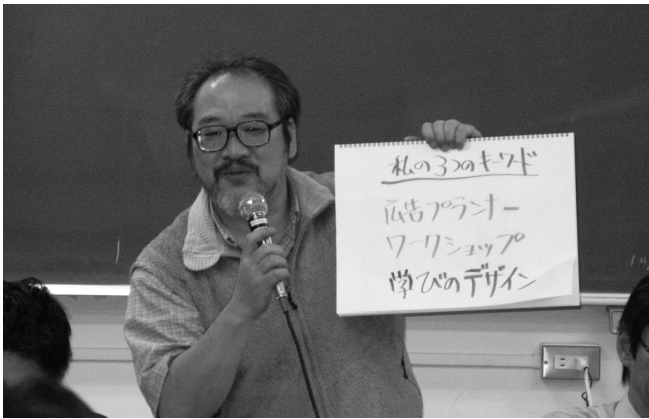
中野：「博報堂（26年勤続）」、「ワークショップ（ワークショップ企画プロデューサー、ファシリテーションの本）」、「屋久島（理想的なワークショップの拠点、森に学ぶライフサイクル）」



岡本：「生物多様性入門（全ての生物が生きていける地球を）」、「昆虫生活（昆虫に学ぶライフスタイル、昆虫はものを持たない、つつまじやかな生活をしよう）」、「遠足のあとで作文を書く（講義やセミナーを聞いたあと1000文字くらいにまとめよう）」

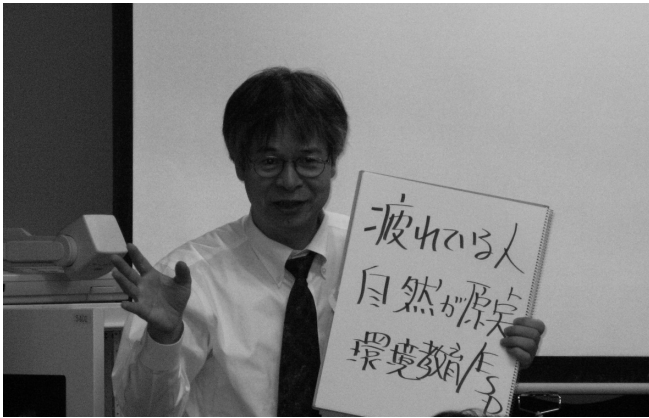


中西：「広告プランナー（ナンバーズの名付け親）」、「ワークショップ」、「学びのデザイン（ESDの可能性、CSRのプログラム、街作りについて）」



新谷：「アジアのCSR（2008年10月24日書籍発行）」、「カンボジア（大学院でNGO研究）」、「さぬきうどん（故郷愛）」

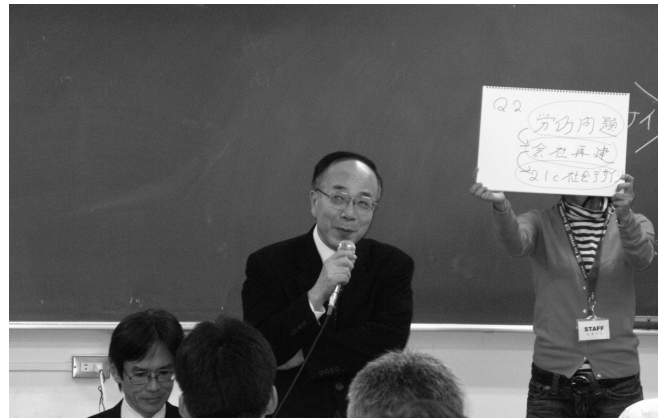
阿部：「疲れている人（持続可能ではないけれど…）」、「自然が原点（新潟の自然の中で育つ）」、「環境教育／ESD」



福田：「企業」、「医療」、「ミリタリー＋地域問題」、ようするに創造と救済と破壊、それに自立といった問題と取り組んできました。

第2問：「CSRに至る道筋」を教えてください

福田：大学院では労働問題、労働経済を専攻し、その後の、ビジネスの世界では、会社再建がらみの仕事メインに行っていた。この2つをかけあわせ、理論でも、現実でも、悲惨な問題との格闘になってしまい、そういう中で社会に対する責任感のない会社はだめだと痛感した。21世紀社会デザイン研究科に勤め、CSRに出会ったが、ビジネスの世界の悲惨な状態を知ったおかげで、CSR推進の大事さと難しさを経験した者として、取り組むべきだと思った。



岡本：IBMに入り営業4年、研究開発部門5年。この間は言われるままに動く人間だった。コーポレートファイナンスにいた14年間に企業の財務戦略、価格設定方式、国際税金戦略を学んだ。IBM以外は知らなかったが、コーポレートファイナンスで勤務したときにグローバルな見方ができ、環境CSRに勤め始めると外部の活動（大学やNGO/NPOや自発的に作ったCSRの研究会）を始めた。これからの時代は枠にとられない生き方が重要だと思う。

中野：学生時代はインドの精神世界の旅人だった。ネクタイは一生締めないつもりだったが、肝炎で入院し考えを変え、企業に入った。大阪の営業時代、苦労したが、ミイラ取りがミイラになりかけたころ初心を思い出して休職をし、カリフォルニアで組織開発などについて学び、湾岸戦争などを機に環境と平和を深く考えるようになった。会社に戻り、社会的視点が必要な部署で企業の社会貢献に関わる。2005年の愛知地球博のNGOが集う地球市民村というパビリオンにどっぷりと4年関わる。ヨハネスブルグサミットのこともあって、「持続可能性」の学びをテーマにNGOや企業と取り組む。

中西：広告の業界に入る前は文化人類学をやり、漁師町でフィールドワーク、青年団に入り、漁師の喧嘩の仲裁ばかりやっていた。その後、就職。環境技術を伝えなければならぬ広告づくりの場面に何度も出会い、細かく調べて行くうちにおもしろくて環境問題に関心を持った。トヨタのプリウスの宣伝で「ガソリンと電気のいいとこ取り、だからハイブリッド」というキャッチコピーがあったが、あれは正確に言うと間違い。発電と充電とガソリンのハイブリッドが本当は正解。技術を通すとコミュニケーションがよく見えてくる。それから環境がおもしろくなり、CSRのプログラムをどう作るか、実際に自分で環境教育を勉強したり体験したりしてきた。将来は自分もCSRをやりたいと思っている。幕末の長州藩に白石正一郎という豪商がいて、長州藩にお

金を払いすぎて自分は無一文になった話があるが、そういう人に憧れていて、稼ぎたいと思いつながら稼げません。

新谷：カンボジアで気付いたことは、貧困の現場、地雷の現場、教育の現場、それぞれの現場が社会問題に結びついていることだった。これらが社会の発展を阻害していると感じた。その頃は企業活動に対しては疑問を感じていた。というのは、ODAで橋や道路などのインフラ建設を行うばかりで、これがカンボジアにとって本当に役に立っているのか疑問だった。当時、それを皮肉って、彼らのプロジェクトを「パンパカパーン援助（テープカットのセレモニーばかり）」と呼び、援助のやり方に疑問を感じていた。それがCSRの出発点。企業に就職したことで、カンボジアで感じた疑問に対し、自分ができることはなにか、企業が社会に対してこうした問題にどう関わられるのか、を考えることで、CSRというところにたどり着いた。



阿部：子どものころ、自然の中で育ったことで自然保護に対する思いが高まり、大学は日本で最初にできた環境学科で学んだ。当時は、企業害悪論を唱えていた。1979年から大学院で環境教育を学び、1988年には埼玉大学でパイオニアとして環境教育を教え始めた。企業の中で環境とどう関わるのか、日本環境フォーラムで企業や関係者と交流するようになり、企業の環境教育に対してアドバイスをするようになった。環境と開発をどう一致させるのか、持続可能な開発をどうするのか、そこをベースにした広い環境教育を提唱し、その延長線上にESDがあり、CSRもその一環にある。

第3問：ESDとCSRの関係は？（ESD×CSR＝？？）

福田：1900年の世界の人口は16億人。現在は60数億人に増加しているので環境はおかしくなって当然である。日本の人口は1900年に3800万人で、今は1億2千万人。そういう大きなプレッシャーのもと、DOC（Discipline of Capitalism、資本主義の原則）に環境教育をどう

反映させるかがCSRの重要な課題である。市場経済の外部経済と外部不経済という切り口でESDを考えることが大事である。

中西：教育の方面に関心があり、可能性を感じている。学習環境デザインという考え方がある。アメリカなどでよく言われている考え方が、場、道具、プログラム、共同体の4つが学びには必要だと言われている。私はこれが新しい教育の方向性だと思っている。コミュニティや共同体を支える役割として行政というものがあるが、誰も住んでいない街を全く新しく開発するとき、行政は新しい動きをぜんぜんしてくれない。市民と企業が組まないとプロジェクトが前に進まない。そういうところで学びを通じて新しい街づくりを提供することが企業の使命ではないかと思っている。

新谷：一言で示すと「実践力」。現在CSRの部署で働き、CSRを立教でも教えているのですが、CSRは学問として学ぶことより、企業の中でいかに実践するかがものすごく大事だと思う。それは応用力と言い換えることもできると思う。ESDは生きていくための実践力を身につける、そのための教育。途上国でもどうやって社会を持続可能にしていくのか、そのための教育をどうやっていくのかを考えることである。2つのアプローチを混ぜていくと、いろいろな意味で生きて行くための実践力が得られるのではないかと、企業や組織においても社会に対しどのような責任を果たしていくことができるのか、その考えや行動力を得られるのではないかと、思っている。

中野：ESDの中にCSRがあると思う。ESDはさまざまなつながりの中で生きていくことを一人ひとりが深いところで知っていく地球市民教育。企業も、「無限の地球」という幻想から覚めて、そういう中で生きていく必要性について考えていく必要がある。ふたつを掛け合わせると、商品やサービス、企業活動そのものが負担をかけるものではなく、啓発の場、学びの場になっていくと思う。

阿部：ESDとCSRとSDがあり、SDがベースにある。SDにおいては、世代内、世代間、種における公正が必要であり、そのSDをどう具体化していくか、そのための学びの教育がESDだと思う。SDを伝えていくための手法がESD、そのESDを企業の中で行い担っていくのがCSRである。

岡本：正直わからない。私自身のCSRの捉え方が非常に大きくて、Moving targetと言っていて、どんどん枠が広がっている。CSR自体が宗教や哲学に近いと思う。煎じ詰めていくと、生物の行動様式のようなものではないか。この5週間が終わったときに私自身、少しは分

かってくるだろうと期待している。

第4問：CSRの中で一番大事なことは何？

岡本：いつも鏡餅の絵を用い、哲学、知識、行動、この3つ全てを三位一体、全て同じ大きさにしたいと思っている。哲学というのはよく考えよう、考えた上で仕組みを作ろう、仕組みができれば実行と行動ができる。日本は知識の部分が多い。知識だけあっても何もできない。よく考えて仕組みを作れば行動になる。行動を継続していけば、99%が行動の部分になる。フレームワークを持つことが大切。CSRというのは勉強ではなく、一人ひとりの行動だと思う。だからよく考えて、自分自身に仕組みを作って、行動してもらいたいと思う。



福田：憲法12条の「みんなの権利と自由を公共の福祉のために使え」と独禁法1条の「競争せよ」が重要。公正な競争をしない企業は犯罪だというのが資本主義の理念。これを知ることが、一番大事。

中野：「持続可能な社会」を作るんだという高い本気の理念。理念を支える成員皆の自覚と実践が必要。企業でやるのは大変だが、一人ひとりの意識や志をもつことが必要。

中西：対話。アメリカの社会学者ロバート・ベラーの『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ—』（みすず書房、1991）という本の最後の方「公共哲学としての社会科学」という一節に、「公衆を対話へと導くからこそ公共的なのだ」と書かれている。対話のないところには公共性は存在しないと言っている。ESDにとって、まさに共同体の中でいかにフラットな対話ができるかが鍵ではないか。

新谷：一言、肌感覚。つまるところ、一人ひとりが肌感覚をもって社会と接しているかが一番大事。社会の問題をどう感じるか、それをどう噛み砕いて発信していくか、どう行動していくか。誰もが肌感覚がすぐれているわけではないが、常に社会に目を向けて感じていく、そ

のセンスが大事ではないかと思う。

阿部：2つの「そうぞうりょく」が必要。ひとつはImaginationの「想像力」、もうひとつはCreationの「創造力」。片方の「そうぞうりょく」だけでは企業も社会も持続しない。どうすれば持続する関係を「創造」できるか「想像」することが必要。そのためには体験に基づいた感性が非常に重要。体験があってイメージーションが出てくる。クリエイションには科学に基づいた知識や技術が必要。さらにそれを実行する力や勇気等が必要。

司会 今日全体像がつかめたらなと思い、ふつうの講義形式とはかなり違う形で進めました。最後に、4人の方に次回以降の予告をしていただこうと思います。

岡本 僕の話はおもしろいです。目からうろこが落ちます。泣きます。

福田 ご案内の論文（「CSR推進の意義と課題」p26参照）を読んでもらえれば良いと思います。今日のCSR論は、ほとんどが素人の暴論で、トレードオフ、つまり「こっちを立てればこっちが立たず」を考慮していません。それから、ファンドの手先というか、株主利益最優先になっているのではないかと思うものもある。2000年くらいから株主の利益を真っ先にあげるようになった。こういった問題をはっきりとさせた上で、受容可能で実行可能な、社会と企業の共倒れを回避するために何をなすべきかを考えていきたい。何はともあれ、ご案内の論文を読んでください。

中西 あるところの開発に携わっているのですが、何もなくて街をつくるというときに、こういった動きが起きているかという事例の話を中心にしてと思っています。実際にそこの企業の人たちが、私から見ればESDと思われるようなことを実践していて、本人たちは業務だと思って取り組んでいるという事例がたくさんあります。企業の人やNPOの人のところに頭を下げに言って「すみません、ここの事務所に入ってください」などというような、10年前には考えられないようなことが起きています。持続可能な街づくりには、対話して連携して取り組まないと成立しない状況が実際に起きている、そういう事例をご紹介したいと思っています。

中野 今回初めての試みで、講師側も全員出て、お互い学び合おうと思っています。主催する方も気合が入っているので、いろいろなことが起きると思っています。最後にはどのようなまとめができるだろう…と思っています。私の講義テーマは、「サステナビリティと般若心経」です。つながりが見え

なくなり、切れているのが環境やサステナビリティの大きな問題だと思います。東洋の「空」という思想は、ものごとはそれぞれが孤立して存在していない、ものごとはすべてが関係性の網の中にあるという思想です。これは当たり前なのですが、豊かさを考えるときにこれは見直されてもいいのではないかと考えています。講義の後半はつながりや関係性を意識し、一方的でない参加型の場づくり目指していきます。

6. 少人数のディスカッション

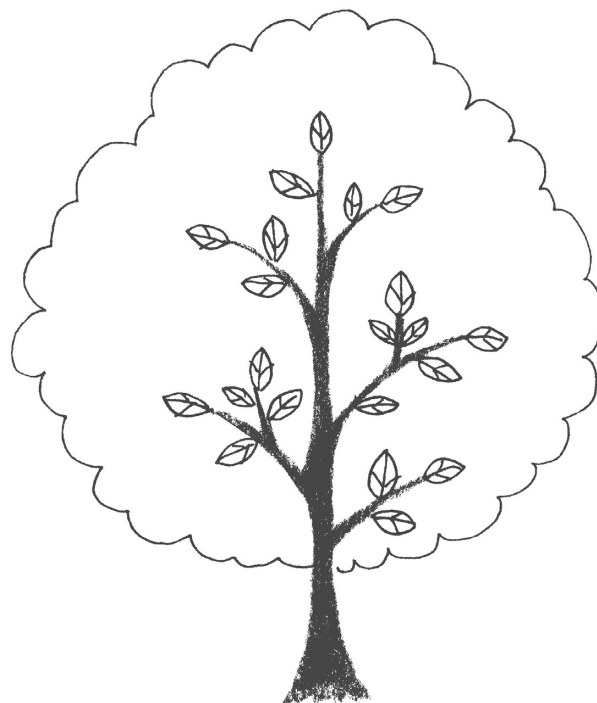
(※今日の感想：3人1組で話し合う)

司会 のこり15分くらいですが、終了前に少人数のディスカッションをしていただきたいと思います。3人程のグループを作って、今日の感想やお互いの捉え方を話し合っ、整理していただきたいと思います。お互い向き合っ、座ってください。講師陣も入ってください。2分ごとに合図を出しますので、各グループ交代でお話をしてください。



7. 終わりの言葉

司会 となりの人の感想の話を聞いて自分の頭の中でぼやっとしていたことが「そうか、こういうことだったのか」と言葉化されたり、ということに気づくこと、自分の思っ、たことを言葉化することで頭の中が整理される、こういう時間もESD的かなと思っ、ています。来週の連絡をして、皆さんにアンケート記入していただき、本日は終わりにしたいと思っ、います。



10/10 (金)

連続セミナー『CSR！次のステップへー持続可能な社会の創出のためにー』第2回記録

題目：CSRの本質とCSRによる競争優位ー「企業責任」論を超えた（変革）への視点ー

日時：2008年10月10日（金）18：30～20：45

場所：立教大学池袋キャンパス5号館5401教室

講師：岡本享二

司会：川嶋直

1. 前回からのブリッジ

司会 皆さん、こんにちは。これから第2回目を始めます。今日は岡本享二さんにお話をさせていただきます。毎回、講師の話を聞いたあと、講義の内容について皆さん同士で話し合う時間を作り、ディスカッションをしていただきたいと思います。

毎回の講義のあとにリアクションペーパーを皆さんに書いていただいて、その中で出た質問や疑問に、次の回の講義の冒頭でお答えする時間を作るつもりです。今日は、前回のリアクションペーパーの仕様が悪かったのか、感想が多く、あまり質問や疑問がなかったのか、このまま講義に入らせていただきたいと思います。今日は皆さんに質問や疑問をリアクションペーパーに書いてもらって、このセミナーを咀嚼するためにどんな方法があるのかを考え、次回以降に活かしていきたいと思います。

講義の前に中野さんからお話があります。

中野 皆さん、こんにちは。今日は岡本さんの話を聞きながら、「うん、そうそう」とか「なるほど、そういうことだったのか」など、納得したり印象深く聞いたりした部分、それから逆に「うーん、ここところがよく分からないな」とか「ここのところをもうちょっと聞きたいな」というような、もう少し突っ込んだ部分に対する要望や質問をそれぞれの心の中で留めておいたり、メモを取ってもらって、このあとの少人数のグループのディスカッションの時間に出し合ってもらいたいと思います。そしてそれらを岡本さんに返して、回答してもらおうという形を取りますので、皆さんよろしく願います。

司会 それでは皆さん、講義を聞きながら自分のノートなどにメモをしながら講義を聞いていただけますようお願いいたします。

それでは講義を始めたいと思いますが、簡単に岡本さんの

ご紹介をいたします。皆さんのお手元にアマゾンのコピーがありますが、アマゾンでCSRを検索すると、岡本さんの本が1位と2位で出てきます。また、日本監査役協会という会員数が8000人くらいいる組織があるのですが、そこから講演の依頼があって、聴講希望者が2000人を超えているという話もあり、私もそれを聞いてびっくりいたしました。

「CSRはもう流行る言葉じゃない」としたり顔で言う人もいらっしゃいますが、まだまだこれからもCSRが必要なんだなと思います。

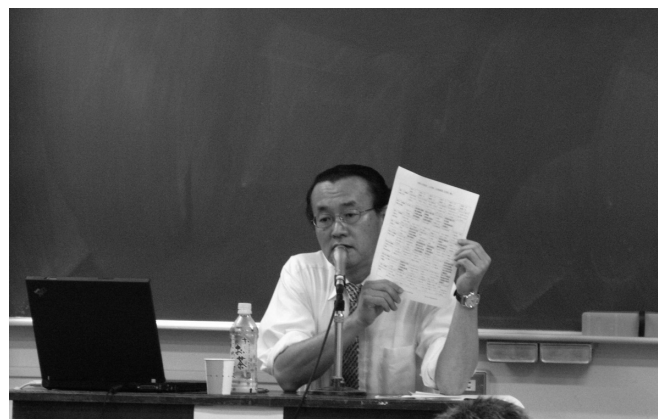
それでは岡本さんお願いします。

2. メインレクチャー（話し手：岡本享二）

皆さん、こんばんは。岡本です。

この2週間、どうやって皆さんに私の考えているCSRをうまく伝えるか、だいぶ悩みました。

ある大学でCSRの講義を持っているのですが、90分間の授業を全15回、全部で20～23時間になります。その中では、「環境問題」「社会問題」「企業統治」「企業倫理」「危機管理」「生態系問題」「消費社会」…、実に多様な視点からCSRへのアプローチを試みています。これだけの内容を今回は1時間でお話をするので悩んだのです。このような広いエリアを1時間でカバーできるようトライしてみます。



象の話が有名ですが、尻尾を触った人は蛇みたいだと、鼻を触った人は消防車のホースみたいだと、またある人は壁みたいだったと答えます。このようにどこから見るか、どこを切り口にするかによって、それぞれ捉え方が変わります。

●CSRを俯瞰する

前回の入門で皆さんにお見せした三角形のCSR俯瞰図（p21参照）の下の方、つまりコンプライアンス等の法律に関わる部分ではなく、三角形の上の方である「生態系の保護」「貧困の撲滅」「先進国の消費のあり方」、これらがこれからのCSRのポイントになります。

国際的なCSRの現状を知れば知るほど、日本のCSRがあまりにも広告宣伝的だと言えます。前回、LOHASの例を紹介し、LOHASが登録商標されそうになったり、モノを売るためのツールにされてしまったケースがあったとお話ししましたが、CSRもまた同じような轍を踏むのではないかという気配を感じています。

CSRを学ぶためには、

- ①自主的に勉強して新しいものを探求しようという好奇心
- ②単なるモノを売るための宣伝の道具にしてしまわない真理を見抜く目
- ③CSRを「Moving target」ととらえて、常に新情報を取り入れる心構え

が、大切だと思います。

そういうときにCSRを俯瞰的に見て、「グローバル化は本当にいいのか?」、「経済でいう全てを貨幣価値に換算し評価し行動のよりどころにすることが本当に正しいのか?」、そのようなことを振り返る必要があるように思うのです。

●欧米と日本のCSRの違い（スライド2：p19参照）

欧米と日本のCSRの違いを図に表しました。

1920年代に教会を中心にして、武器・ギャンブル・アルコール・たばこを製造する会社に投資をしないという禁止運動が繰り広げられました。このことはCSRを勉強された方ならご存知だと思います。

ここで皆さんに質問をします。賛成の場合はYes、反対の場合はNoで手を挙げてください。またどちらか判断しかねるときは両方に挙げてください。

（質問）武器製造の会社に投資すべきでないということに対して賛成か、反対か？

（質問）宝くじ程度はいいが、競馬や競艇等のギャンブルを運営する会社に投資すべきでないということに対して賛成か、反対か？

（質問）アルコールを作る会社に投資すべきでないということに対して賛成か、反対か？

（質問）タバコを作る会社に投資すべきでないということに対して賛成か、反対か？

今の反応はどこで行ってもほしい同じです。武器に関してはほしい1割の方が賛成、タバコに関しては賛成と反対が大体半々に分かれます。この話はあとで振り返りますが、今は忘れてください。

1920年代からあるこのような対応は、今でもSRIの世界ではあります。世界の趨勢としては、タバコ会社は存在が危ぶまれるということになっています。それにもかかわらず、外国のタバコ会社を日本の会社が買収しています。国内で消費量が落ちていきますので、タバコが輸出されています。その輸出されたタバコを買うのは法律や保険制度が未発達な発展途上国に多いようです。

この図を見て分かる通り、時代や国によってCSRは変化し異なってきています。ヨーロッパでは失業問題や労働問題、アメリカでは企業の不正問題等が挙げられてきましたが、21世紀の半ばを前にして地球環境保全や生物多様性、生態系へと関心事が移ってきており、CSRの中心になろうとしています。

ヨーロッパは陸続きのため昔から戦争が多かったので、自分たちで“手段”を考えます。1年ほど前にドイツのESD関連施設を訪問した際、幼稚園の教育についてヒアリングする機会がありましたが、日本とは教育手法が全く違っていました。例えば、日本では運動会の徒競走で手をつないで一緒にゴールをさせたりしますが、ドイツでは野原に子どもを連れて行き、そこにある石や土を使って自分を守る陣地を作らせるような教育をしています。

アメリカに関してはケネディの「消費者の4つの権利」（選択する、知らされる、安全である、意見を反映させる）が出されたあたりから、社会性や環境問題が注目されるようになりました。そして、ウォーターゲート事件等の政治的・社会的な不祥事の発生、1990年代の401KPlanの施行等でSRIが注目され、CSRの関心が高まってまいりました。エンロンやワールドコムなどの不祥事を受け、SOX法というルール等もできました。

このようなコンプライアンスやガバナンスに関わることは、CSRの重要な項目ではありますが、これからのCSRは、生態系や生物多様性を守る、本当の意味での絶対量としての環境が必要です。現在の環境保全は、「1万種類ある化学物質を1000種類くらいの使用にすれば何とかかなりそうだ」、「CO2を6%減らせば何とかかなりそうだ」という、企業がができる範囲での生態系までは深く考えていない、どちらかという企業本意の環境保全になっています。そういった意味で生物多様性と生態系を、環境とは別の言葉で表しています。

また、SRIもCSRの重要な要素です。投資をする際に社会的に責任のある投資をしようというものです。さきほども話

しましたが、兵器を作るような会社等には投資しないということです。SRIには兵器を作る会社には投資しないというルールがあって、アメリカやヨーロッパにおいてはこのルールが守られています。

●環境＝破壊

この前の2月～3月にイギリスの企業やNPO・NGOを訪問したとき、“Development, what’s next?”（「開発の次には何が来る？」）というディスカッションをしました。そこでは「開発は破壊だ」と言い切っていました。

私は月島の38階建ての高層マンションの29階に6年前から住んでいますが、開発が進み、東京湾や隅田川の見える面積が減りました。周りに高層ビルがどんどんできたからです。そういった高層ビルが50年後、100年後にどうするのでしょうか。

ロンドンには1棟たりとも高層ビルがありませんでした。数百年くらい前に建てられた、石造りの、せいぜい高くても8～9階建ての建物が立っている綺麗な街並です。ロンドンは街の風景が変わりませんが、日本はどんどん街の風景が変わります。

30数年前、私の就職活動時代に「〇〇開発」というような建設会社に興味を抱きましたが、最近は見方が変わり、あれは開発ではなく破壊の一面もあるのだと思うようになりました。

イナゴの大群が、ある地域の農作物を食べ尽くしたあと、他の場所へ移動し次々に食い荒らして行くのと何か似ているように思います。

●環境・経済のバランスチャート

20世紀は経済が中心で、1960～70年代には経済成長のためには公害も仕方なし、環境より経済の方が重要だという時代がありました。しかし今では、環境と経済のバランスを取ろうという時代になっています。おそらく21世紀の半ばを待たずして環境の中にしか経済が成り立たない時代になると思います。ここでいう環境は、生態系や生物多様性など絶対量で押さえなければならない環境です。

●世界の人口増加

世界の人口増加のチャート（スライド3）を見ますと、1900年以降急激に増加しています。1900年以前の400万年間の人口の総和と1901年以降の人口の総和を比べると、後者の方が大きいとされています。このようなグラフのラインをバスタブカーブというのですが、CO2の排出量もその他、あらゆるものがこのカーブで説明できます。環境問題は人口問題であるとも言えます。

●平均気温の経年変化

このグラフ（スライド4）から、地球温暖化が進んでいることが分かります。ここ100年ほどで平均気温は1℃ほど上昇し、次の100年間で5.6℃ほど上昇すると言われていています。

●経済学の限界と生態学

今までの経済学の限界が来ていると言えます。経済は自然や生態系のことをまったく考えていませんでした。今までは机上の計算での経済学でしたが、これからの時代は生態系も考えた生態経済学が必要で、世界には3000人くらいの生態経済学者がいると伺っています。

●CSRの構成を考えると……

持続可能な発展を考える上で、経済的・社会的・環境的の各側面から見ていくことが大事です。

この三角形は（スライド5）、今のCSRを俯瞰した図になります。三角形の下の土台の方は、企業が取り組む時間もお金もあり企業の利益に直結するものと考えられるが、上の方はなかなか企業の利益にすぐに直結しないものと考えられています。「貧困の撲滅」「生態系・生物多様性の保護」「先進国の消費のあり方」、このようなことへの取り組みが徹底しないのが現状です。

しかし、この3つを解くことがCSRの鍵になり、企業にとっても今後のマーケティングのコアであり、競争で優位に立つためのキーになります。このあたりのことを、特に皆さんに伝えたいと思います。

●環境経営とCSR

1996、97年ごろから徐々に広まった環境経営はかなり浸透し、企業に収益を上げていると思いますが、CSR経営は企業にとって、まだ十分ではないだろうと思います。三角形（スライド5）の下の部分は法律に関わる部分なので、必要最低限守らなければならないものであり、お金をかければそれなりに利潤を生んでいくと思います。真ん中の“Nice to have”の部分は、法律的に決められてはいないが、精神的に、もしくは資金的に余裕がある企業が他社に先駆けて取り組み、他社に差をつけて優位に立てるといったところです。しかし、上の3つはやはりまだ難しいというところが多いのが現状です。

●CSRの考えは時代とともに変化

トリプルボトムラインの図（スライド6）をお見せします。みなさんの半数くらいの方はこのトリプルボトムラインのことをご存知だと思います。

今年2月、このトリプルボトムラインを提唱したジョン・エルキントン氏のイギリスにあるオフィスを訪ねました。そ

の際にエルキントン氏は不在でしたが、彼の右腕のジュディさんという女性が、今やCSRは環境・経済・社会の3つの要素だけでくれるものではなく、すでにトリプルボトムラインとは言っていないと、朗らかに笑いながら説明をされました。

4年前に『CSR入門』（日経文庫、2004）を発売したときに、「人間」と「生態系」の要素を加えた「ペンタゴンネット」を私は提唱しました。今の日本で言われている環境は、企業がちょっと努力すればできるという程度の見せかけの環境でしかなく、本当の意味での環境を考えるには、絶対量としてコントロールする生態系の要素が必要だと考えているのです。

●製造業とCSRの考察

今までCSRというと法律学や経営学の延長で語られていましたが、これからは哲学、生物学、生態学、薬学、宗教等、いろいろな要素も含めて語られていくと思われます。そして、大変興味深いバイオミクリーという新しい領域も入ってくると思います。

製造業や物流業界、電力業界、ガス会社等においていろいろなバイオミクリーが使われています。その中で個別最適ではなく、全体最適という考え方が使われています。コンピューターのネットワークを使って全体的にコントロールを行い、資材の運搬や物流の効率化を図ることなどが挙げられます。

話は変わりますが、私は1年ほど前から温度と湿度を体感で分かるように訓練して来ました。各部屋に温湿計を置き、部屋に入る度にそのときの温度と湿度を予想しながら温湿計を確認して、そういったことが分かるようになりました。なぜそれを始めたかということ、全ての昆虫がそうではありませんが、多くの昆虫が1秒間に20回ほどの間隔で温度や湿度を感じて飛んだりはねたりしているということを知り、興味を持って始めました。

今、CSRの中で無駄を排しましょうということがあります。前回、私たちの生活は現在の10分の1の物質で事が足りるのではないかとお話ししました。たくさん無駄があります。それは、全てを貨幣価値で計算し競争するからです。例えば、コンビニの例を申しますと、いろいろなコンビニがそれぞれ別々に配送を行っています。これを統合すれば、10分の1で済みます。ヨーロッパではカーシェアリングが進んでいます。

●マネージメントシステム

次にマネージメントシステムのお話をします。

あらゆるマネージメントシステムを作るときは、必ず4段階で作らなければなりません。これはルールとかではなく、憲法のようなもので決まっていると頭に叩き込んでください。いろいろなケースを確認しましたが、全てこの4段階になっ

ています。

分かりやすくするために、タバコの例でお話しします。

ある時、永田町のおでん屋に行きました。比較のお年をめた男性3人、女性1人の4人組のグループがお店に入ってきて、そのあとに、30歳前後の男性1人、女性2人のグループが入ってきました。若いグループの男性がタバコを吸い出し、お年寄りの男性が「タバコをやめてくれないか、煙たてしょうがない」と文句を言いました。すると若い男性がいきり立ち、「なんでだよ。この店は禁煙じゃないぞ」と言い返し、喧嘩になりそうになりました。お年寄りグループの女性がその若い男性に「このお店は禁煙じゃないけど、あなたが吸っているタバコの煙がダイレクトにこちらに来るから控えてほしい、この人は風邪を引いていて苦しいのよ」と言ったところ、その場は収まりました。

話はそれだけなのですが、なぜこのような事が起こったかということ、日本にマネージメントシステムの考えがないからです。

日本のあちこちでこのレベルのいざこざが起きています。このレベルをTier-4と言っています。このレベルのいざこざをなくすには、Tier-3、お店の主が禁煙にすればいいのです。あるとき、私は店主にどうして禁煙にしないのか聞いたところ、禁煙にしたら周りの禁煙をしていないお店にお客さんが逃げてしまうのでできない、という答が返ってきました。では、次にどうすればいいのかということ、Tier-2、都道府県や地域レベルで禁煙の条例を定めればいいのです。そして最終的にTier-1、国が公共の場での喫煙を禁止すればいいのです。実際にブータン、イギリス、アイルランド、アメリカの多くの州で実施されています。

このように、上できちっと決めれば解決する問題を解決しないのが日本です。ここのところをよく覚えておいてください。

この4段階で一番大事なのはTier-1です。一昨年1月に、日本のある製菓会社が不祥事を起こしたあと、なぜ他の製菓会社と提携したかということ、その他の製菓会社がAIBというシステムを採用していたからです。AIBというのは、“American Institute of Baking”の略で、1940年代にパン屋さんが自主的に作ったルールです。これが見事に4段階のマネージメントシステムでコントロールされています。トップの責務、役員、工場長の責務、現場の責務、それぞれがきちりと定められています。

このような4段階のマネージメントシステムがあれば、各段階で取り組むべきことが決まります。アクションが決まります。日本ではこのようなシステムがほとんど見当たりません。

●バイオミクリー

生物38億年のノウハウを使えば、いろいろなものに解答が得られます。ミツバチやクマバチは1滴の蜂蜜で100~200キロ飛んだり、ホバリングをしたりすることができます。ジェット機やヘリコプターではそういうことは決してできません。石油の垂れ流しをしているのです。

昔から製造業は動植物の世界から学んできました。レオナルド・ダ・ビンチやライト兄弟もそうしていました。最近でも自然から学んだ製品が発明されています。

●21世紀に花開くCSR

「貧困の撲滅」「先進国の消費のあり方の見直し」「生物多様性に代表される生態系の維持」、これら3つはバラバラではなく、ひとつにまとまっています。例えば、先進国でものをたくさん使うことが、貧困や環境破壊に繋がっているということがあります。

立教大学のトイレで手を洗おうとしたところ、石鹸が泡で出てきました。液体だとその40倍必要です。今まで多くの石鹸が液体で出てきたのはなぜか、それは石鹸を作る会社ももっと石鹸を売りたいからです。それが現代の企業のやり方です。40倍もの石鹸を作るために、発展途上国の森を食いつぶし、そして次の場所に移るのです。

今の日本の環境CSRはお金になるからやっているエリアがあまりにも多過ぎます。もっともっと本質に戻る必要があります。そうするためには、バイオミクリーに代表される動植物から学ぶことだと思います。

●先進国の消費のあり方

「もっと使わせろ」「捨てさせろ」…、これは1960~70年代に某広告会社の壁に貼ってあったスローガンです。さすがに今ではこれらを表立って書き出すわけにはいきませんが、今でもこの広告会社のみならず多くの会社において、年末に売り上げが目標に達していないときなどに、このような標語が掲げ上げられているのではないかと思います。

このあたりにCSRの問題があります。見せかけではなく、本気でやらなくてはなりません。

企業人は、社会人であり、消費者であり、生活者です。企業がやるのを待つのは個人としてずるいのではないかと、まず一人ひとりが自分でやってみてはどうなのか、と参加者の方一人ひとりに聞きたいのです。

タバコに関して、タバコを吸うことは本当に良いことなのかと問いたいです。密室であなたひとりが吸うのならばいいかもしれませんが、タバコの副流煙は主流煙の20倍の害があるということが分かっていますし、タバコの害は調べれば調べるほどものすごい害があることが分かっています。

はじめに皆さんに質問をしました。武器に関しては4人だ

けOKでしたが、大体どこでも1割程度の方が容認派です。それは戦争に賛成ということではなく、治安や防衛のことなどもあるからでしょう。

タバコに関しては今回は寛容なほうでした。世界中でタバコ会社は排除される方向です。いろいろなタバコ会社が売りに出されますが、それを買収しているのは日本の会社です。

CSRの本質は、目先で取り組むか、それとも先を見据えた長期的な視野で取り組むか、そこをどうやって判断するかによって、今後の企業の盛衰が決まっていく気がしてなりません。

アルコールに反対の方は2人いらっしゃいました。私自身はつい最近禁酒に踏み切りました。

10年前にタバコのファンシーな宣伝が一切禁止になったのはご存知でしょうか。欧米では、CMによって、若い人がタバコはカッコいいと憧れて吸い出すとして、タバコの宣伝が禁止されているのは当たり前です。

消費者金融のCMも規制されました。年間30%の高利を平気でむさぼる会社を宣伝する国は日本だけでした。規制するのにわが国では7年かかりました。

日本は法律の制定に大変長い時間がかかります。東大のある先生が、法律を作るのにアメリカは1年以内、ヨーロッパは2~3年、日本は7年かかると言っていました。日本はそういう国です。

決断が遅いと思ってもらっていいと思います。しかし、環境の悪化は待ってくれません。国を選びません。積極的にやらなければならないときに、国がやらない、都がやらない、会社がやらない、大学がやらない、などと言うのはやめましょう。現状が分かっているのだから、まず自分ができることから始めましょう。

お酒の宣伝があれほど自由に大量にまかり通っているのは、私の知る限り日本だけです。もう少し規制の対象になっても不思議はないのです。歴史的に見れば、お酒は祭事のときに振る舞われるものでした。しかし、経済社会になり儲かるとなると、そこにお金が集中します。競争が激化すると、きれいなCMを作ってお酒を大量に売ろうとします。もちろんこういった宣伝広告費はお酒の単価を上げてしまいます。会社の部や課で飲みに行くときに、飲みたくない人もついていかなくはなりません。ある調査で40人のグループの同窓会でアンケートを行ったところ、約半数の人が宴会や飲み会の席でのどんちゃん騒ぎが嫌いだという答でした。半数近くの人は嫌々ながらつきあっているのです。もっと詳しく調べて、お酒に代わる、みんながリラックスしてコミュニケーションできるような場はどうやって作り出すか、この辺に新しいビジネスのヒントがありそうです。

サプリメントも5種類も10種類も飲んでいると体に良いとは思えません。新しいビジネスでは、サプリメントを作るの

をやめろというものではありません。これからは個人々に合ったサプリメントは何かを分析し、タイムリーに提供するサービス会社を作ります。そうすれば、現在の10分の1のサプリメントで事が足りるでしょう。

軍艦はすぐには止まれません、手漕ぎのボートならすぐ方向を変えられます。軍艦は国です。皆さんが手漕ぎのボートに乗っていると思ってください。個人の生活は変えられません。サプリメントもお酒もタバコも各自で判断しましょう。こういった嗜好の問題は他人に言われて止められるものではありません。自分自身で気がついたらやめればよいのです。あなたのボートですから、自分自身で体感してください。一人ひとりが温度や湿度を1秒間に20回感じるような昆虫のようになろうと思わなければ、上から言われても変わりません。自分が気付かなければなりません。それでは自分が気付くにはどうすればいいか。それは考える事です。知識だけで動いてはいけません。考える事によって知識を吸収し、行動になり、行動が大きくなっていくのです。

日本の教育は言われたことだけをやるだけです。何の目的でやるのか、考えるという事が無いのです。

CSRも同じです。皆さんが5回連続で勉強されるのは熱心だと思えます。しかし、右から左へ知識だけが流れるのでは意味がないのです。考えを持ってください。その中で知識を活かしてください。そして必ず行動してください。行動すればそれが積み積もります。

まずは、我々一人ひとりが行動を起こし、自らが変わっていくことで企業を変え、国を変える必要があるのです。これで私の講義を終わります。

3. ディスカッションおよびQ&A

司会 後半は中野さんに進行をしていただきます。

中野 中野です。アンケート用紙の記入欄を3段にして、講師の話を聞いて「なるほど、そうそう」と思ったことを一番上に、「うーん、ちょっと・・・もうちょっと聞きたい」ということを真ん中に、それぞれキーワードでいいので、3分ほどで記入してください。記入していただいたあとに、2人組を作りディスカッションをしていただき、「なるほど、そうそう」というところ、「うーん、ちょっと・・・もうちょっと聞きたい」というところを出してもらい黒板に書き出して、岡本さんにまとめて答えてもらう、そういう方式を取りたいと思います。そしてそれを受けて最後に、一番下の部分に感想や質問を書いていただきます。

～参加者記入～

中野 2人組を作ってもらいますが、同じ会社や知っている方同士は避けて、知らない方とペアを作ってください。10分間、時間を取ります。

～ディスカッション～

中野 皆さんのディスカッションで出た内容を出していただきます。黒板に書き出します。

～黒板書出し～

なるほど！

- 1920年代の運動からの話（前はローマクラブの話）
- 行政のバイオミクリー化が不可欠
- 生物多様性を含んだ環境は納得
- Tier-1～4の話
- 日本のCSRは広告宣伝に走り本質を忘れている
- 個人が変わる→ニーズ→会社も変わる
- 企業の利益のために途上国の資源が使われている
- 環境は国を選ばず、待ってこない



疑問？質問？

- 日本はTier-1～4ができてない、ヨーロッパはできている、本当か？
- 岡本さんのストイック生活の裏話とご家族の反応は？
- 人口増加のグラフ、そのうちS字曲線になるのでは？
- イントレプレナーについて
- CSRを次のステップに上げるにはどうすればいいか？
- Tier-1で国がすべて規制していくのはどうか？
- 個人が動くだけで変わっていくのか？
- 生態経済学と環境経済学の違いは？
- 酒、タバコ等税収入など多面的視点が必要なのは？
- 中小企業のCSRについて
- どうして日本の法律改正に時間がかかるのか？逆にそんな

に変わっていいのか？

- ・ぬか味噌くさいCSRとは？

～岡本氏回答～

●マネジメントシステムについて

「日本にはマネジメントシステムがないというのは本当か」という質問、また、「Tier-1ですべて規制していくこと」に対する疑問に対して、例を用いて説明していきましょう。

(企業の例)

- ・トップ (Tier-1) …方針を決めるのみ。A4の紙一枚に11項目の方針が書いてあるだけ。
- ・役員クラス (Tier-2) …方針に従って拘束力のあるインストラクションを作成。
- ・各部門 (Tier-3) …Tier-2からのインストラクションを受けて指示。
- ・社員 (Tier-4) …行動する。
- ・トップがすべて分かるわけではなく、下からのディスカッションを重ねて、方針に加えられたものがある。



(ルーズベルトの例)

- ・第2次大戦のとき、自動車の生産を止め、戦車や軍艦を作るという徹底した方針を出した。
- ・欧米は徹底したところがある。日本にはないとはっきり言える。

(フカヒレ事件の話)

- ・高校の練習船で取れたフカヒレを教師達が売って、自分たちの酒代や生徒達のジュース代にした。
- ・このことが問題となり、県の教育委員会、文部省へと上げられた。
- ・はじめからしっかりしたルールやTier-1～4のマネジメントシステムがあれば、このような問題は起こらなかった。

Tier-1～4のマネジメントシステムができていれば、う

まくコントロールできたはずですが。しかし、日本にはそのシステムがなかった。うまく物事を動かすためにはどうすればいいか考えて行動しましょう。

●生態系と環境・CSRの関係について (スライド9)

- ・個人レベルの発想だと、自分の上役、部門、会社の存続しか考えない。つまりは、社会のことも生態系のことも考えていない。
- ・生態系に良いことをすれば、社会にとって良い。社会にとって良ければ、企業にとって良い。企業にとって良ければ、部門にも個人にも良い。
- ・あらゆる不祥事をチャートに当てはめると、個人から行ったものには問題が起きることがあるが、生態系から行ったものはすべて解決する (間違いがない)。
- ・一人ひとりあらゆるものをこのチャートに当てはめて考えてほしい。そうすれば、このことが正しいということが分かる。

●個人の生活と行動について

- ・誰かから強制されたわけでは無いので、皆さんからみてストイックな生活に見えても辛くない。
- ・関西育ちで性格がイライラしやすいのだが、車をやめて自転車生活にしたおかげで、渋滞でイライラすることがなくなった。
- ・ロンドン市民は、自転車は車より早いという発想で乗っている。自転車をバスや電車に乗せられるようになっているので、郊外からでも自転車で通勤できる。
- ・かつてお酒もよく飲んでいたが、今はやめた。何でも徹底して取り組むことで、やめると決めたときにスパッと止めることができる。
- ・家族には異邦人と思われている。
- ・お酒をやめてくださいとは言わない。人は人から言われて何かをやめるものではない。自分が納得した上で、賛成なら行動してほしい。
- ・一説ではタバコの税金の3.5倍程の医療費がかかっていると言われている。喫煙者は周りの人に20倍の害を与える。このような事実をしっかり捉えて考えてほしい (たばこをやめると税金が入らなくなるという見解に対して)。
- ・Don't think! Feel! (考えるな! 肌で感じろ!) …、私の場合は自転車に乗り、肌で温度と湿度を感じることに。
- ・考えないで行動ができるように訓練する。

岡本 以上、ありがとうございました。

中野 かなりやり尽くした、岡本さんならではの、潔いお話だったと思います。

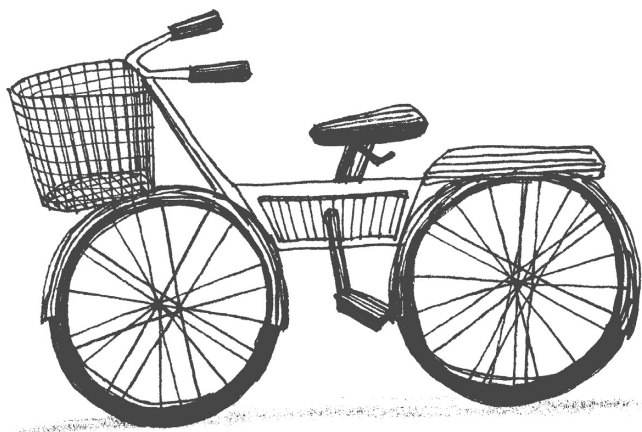
最後の時間を使って、感想や質問を書いていただければと思います。

最後に、来週担当の福田さんに予告や岡本さんのお話を聞いておっしゃりたいことがあればお願いします。

福田 岡本先生のマネージメントのお話は、ガバナンスのお話に近いと思いますが、全面同意です。経済への効用に関しては全面反対です。これだけの人口を支えるためには市場経済の代わりになるものはない、ただし限界もあります。規制とマーケットの両立を考える必要があります。次回の講義までに私の論文「CSR推進の意義と課題：守りのCSRを徹底し、ステークホルダーに毅然と対応する」(p26参照)を必ず読んでおいてください。これを読んでおいてもらうということを前提にお話をしないと時間的に足りなくなりますので、よろしくをお願いします。



司会 ありがとうございました。リアクションペーパーのご記入をしてお帰りください。





立教大学ESD CSRチーム

『CSR！次のステップへ -持続可能な社会の創出のために-』

2008年10月10日

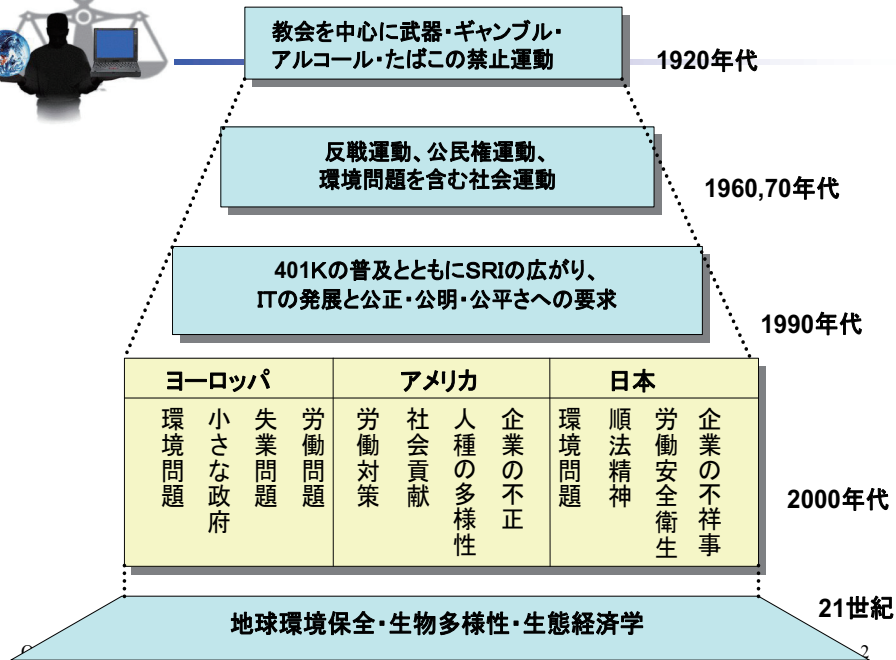
立教大学ESDセンター・CSRチーム センターフェロー
 首都大学東京・大学院 ビジネススクール 教授
 東北大学・大学院 環境科学研究科 非常勤講師
 プレーメン・コンサルティング(株) 代表

岡本 享二(おかもときょうじ)

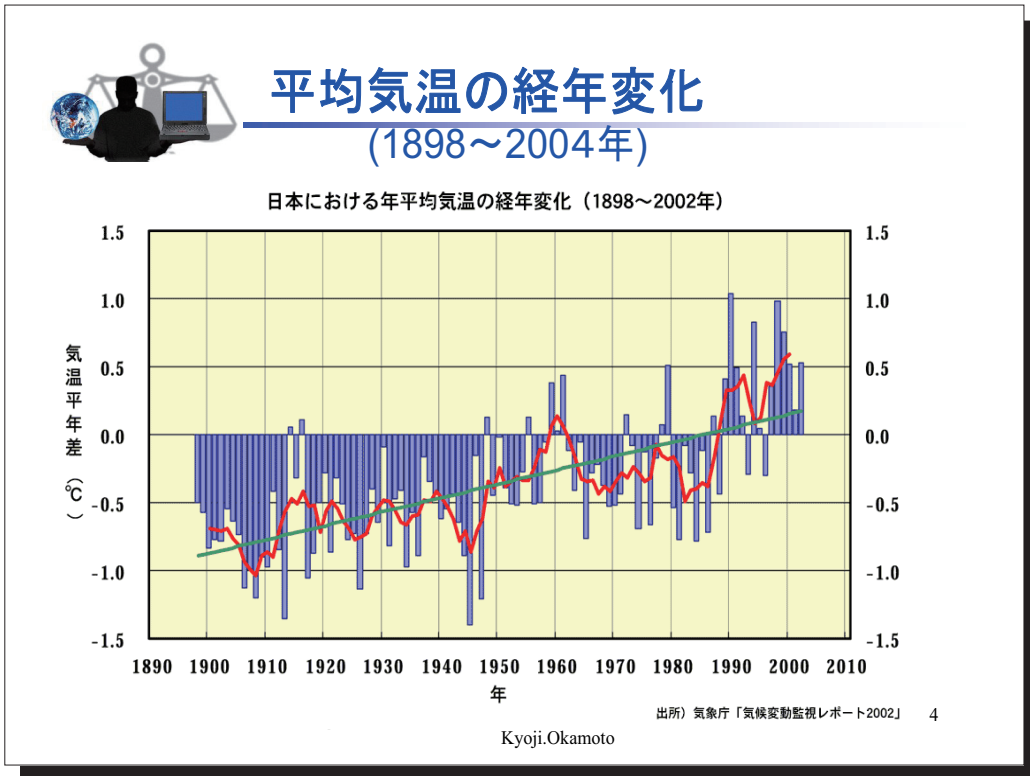
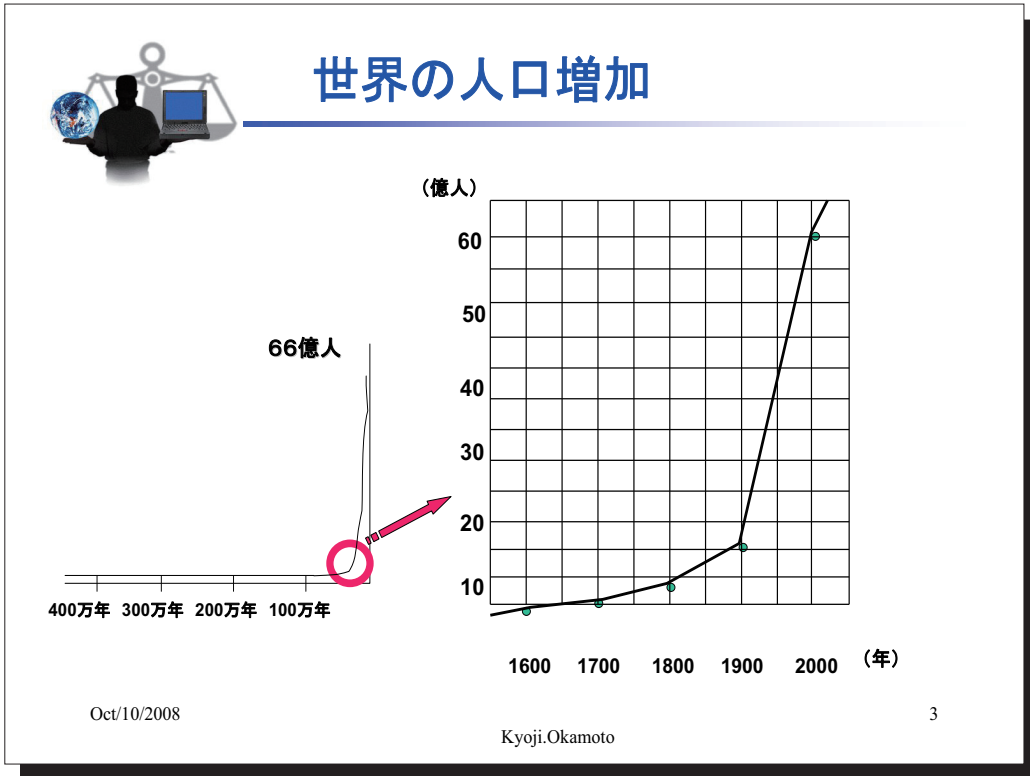
Oct/10/2008

Kyoji.Okamoto

1

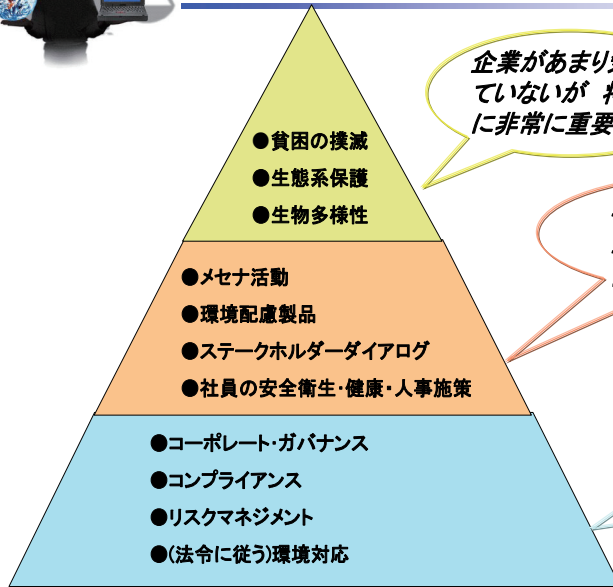


Kyoji.Okamoto





CSRの構成を考えると、、、



企業があまり気づいていないが 将来的に非常に重要なこと

企業が活動すると 企業にも社会・環境にも役立つこと

企業が守らなければならないこと

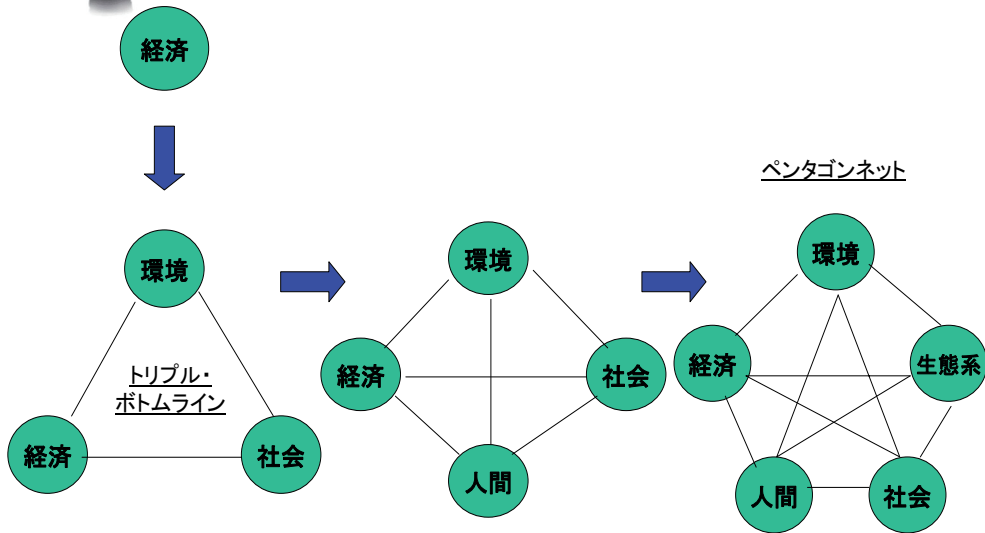
Oct/10/2008

Kyoji.Okamoto

5




CSRの考えは時代とともに変化



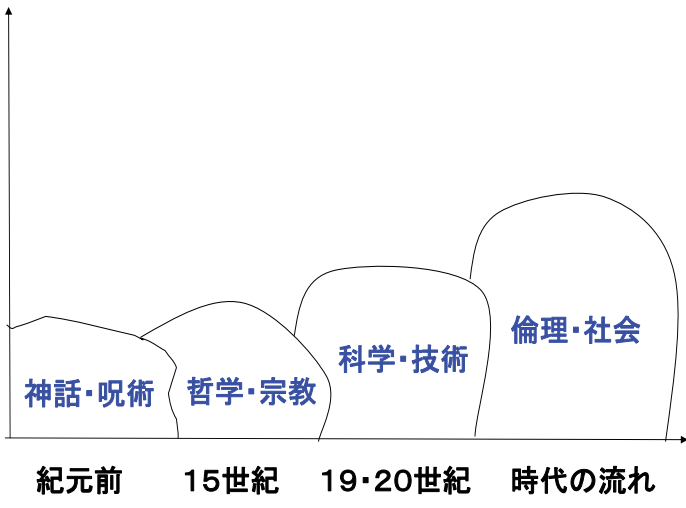
Oct/10/2008

Kyoji.Okamoto

6




文明を動かす知の指導原理



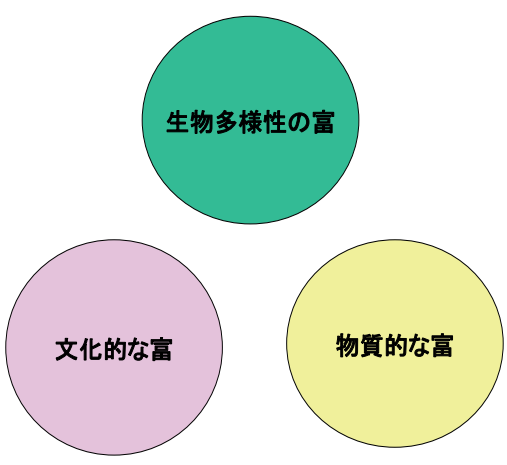
The diagram shows a horizontal timeline with four stages represented by overlapping shapes. From left to right: 1. A small shape labeled '神話・呪術' (Mythology/Magic) above '紀元前' (Before the Common Era). 2. A larger shape labeled '哲学・宗教' (Philosophy/Religion) above '15世紀' (15th Century). 3. A larger shape labeled '科学・技術' (Science/Technology) above '19・20世紀' (19th-20th Century). 4. The largest shape labeled '倫理・社会' (Ethics/Society) above '時代の流れ' (Flow of the Era). A vertical arrow on the left points upwards, indicating increasing influence or dominance.

Oct/10/2008 7
Kyoji.Okamoto



Edward O. Wilson (生物学者)

「国(人間)は三種類の富を持っている」

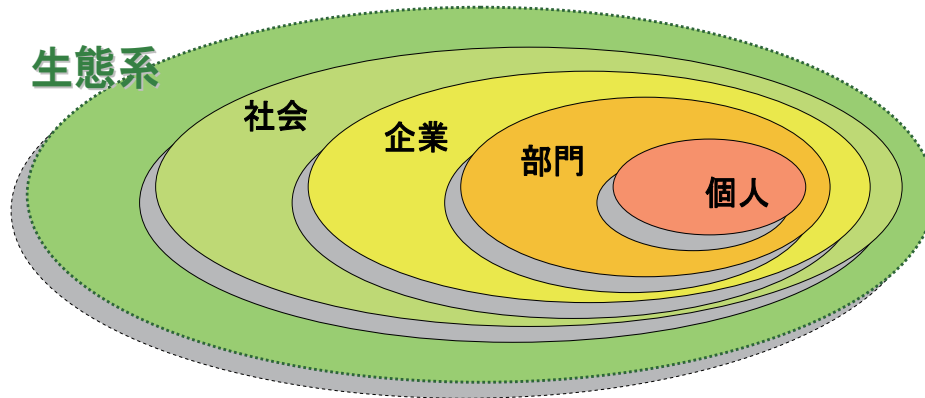


The diagram consists of three overlapping circles arranged in a triangle. The top circle is green and labeled '生物多様性の富' (Biodiversity Wealth). The bottom-left circle is purple and labeled '文化的な富' (Cultural Wealth). The bottom-right circle is yellow and labeled '物質的な富' (Material Wealth).

Oct/10/2008 8
Kyoji.Okamoto



「生態系」という視点



Oct/10/2008

Kyoji.Okamoto

9



立教大学ESD CSRチーム 『CSR！次のステップへ』

ご清聴ありがとうございました

The End

Kyoji@bremenconsulting.com

Oct/10/2008

Kyoji.Okamoto

10

10/17 (金)

連続セミナー『CSR！次のステップへー持続可能な社会の創出のためにー』第3回記録

題目：CSRの推進は、重要かつ至難の課題

日時：2008年10月17日（金）18：30～20：45

場所：立教大学池袋キャンパス5号館5401教室

講師：福田秀人

司会：川嶋直

1. 前回からのブリッジ

司会 皆さん、こんにちは。本日はCSR連続セミナー第3回目です。

各回のセミナーの最初は、前回のリアクションペーパーで皆さんからいただいた質問に、担当したスピーカーが答えるような形式で、前回の講義の補足および振り返りをするための時間にいたします。次に今回のメインレクチャーを約1時間、その後休憩をはさんで、後半はディスカッションの時間を設けます。

それでは、前回のスピーカーの岡本さん、お願いします。

岡本 皆さん、こんばんは。前回はありがとうございました。

普段は一方的になることが多いのですが、前回の振り返りアンケートで皆さんから貴重な意見をいただき、非常に役立ちました。その中で、私の方で再度強調したり補ったりしておいた方がいいだろうということが5、6カ所ありましたので、お話をさせていただきたいと思います。

1) 「個人個人は手漕ぎボート、国は軍艦」について

この点については、多くの方から賛同をいただきました。しかしながら、賛同のなかにも、「手漕ぎボートだからすぐ行動できるだろう」という人、「そうはいつでも周りの人も行動しないと行動できないだろう」という人、それぞれ半分ずつくらいでした。おそらく、後者の意見、「周りを見てみんながやりだしたらやる」というのが、日本の特徴だと思います。

イギリスでは、多くの方が車通勤より自転車通勤の方が早いことを理解して選択している例に見られるように、個人個人が判断して自ら行動しています。昔の日本には同じことが見られましたが、ここのところは欠けてきているように思います。

私自身33年間IBMにいたときは、「The hot house in the hot house（温室の中の温室）」にいたような人間です。当

時、国や大企業を相手にし、「動くところもあるけど動かないところもあるな」と感じていました。しかし、「やはり個人に立ち戻らないと本質は動かせない」と思っています。CSRにおいて、国や企業の動きを待っていたら何も進まないと思います。個人が変われば企業も変わらざるを得ません。企業が変われば国も変わります。本当は逆だと思いますし、マネジメントシステムがしっかりしているべきですが、個人々々が行動していくことが重要です。私自身ははじめから手漕ぎのボートの発想があったわけではありませんが、手漕ぎのボートのように行動しないと何も変わらないと考えるのが、私が最近感じているところです。私が独立してCSRに関わっているのは、まさにここがポイントです。

2) 「タバコは文化、お酒は悪い」等について

私自身全く反対ではありません。

タバコは江戸時代、明治、大正、少なくとも昭和の初めくらいまでは、ある種の薬くらいだと思われていた時代があります。しかし、1964年にWHOがタバコの害について発表しました。この発表までの十数年間は、タバコ会社からお金を受け取っていたロビイストや先生方が多くいたため、なかなか正しい情報が広がりませんでした。

「武器を作る会社には投資しない」ことに関しては90%の人が賛成しました。しかし、反対された10%の方の意見も重要で、武器がなければどうなるのだろうという点を考えた場合、武器製造の会社もやむなしという意見がありました。

タバコに関しては、賛成と反対が半々でした。日本はタバコに関してまだまだ甘いなと感じます。タバコの害毒はもっと知らされるべきですし、国はそのことに関してあまり発表していないので、問題があると思います。

宣伝広告という点を見ると、武器製造会社は宣伝をやっていない、タバコに関しては10年前に規制され禁止、消費者金融に関しても数年前に派手な宣伝は条例で禁止されました。しかし、お酒の宣伝に関しては全く規制の対象になっていません。これほどお酒は文化であり、お酒はコミュニケーショ

ンのもとであり、ファンシーで美しい垂れ流しの宣伝をやっている国は、私の知る限りにおいて日本以外はありません。

私自身、欧米のSRIでアルコールの会社に投資をしないということをおかしいと思っていました。しかし、自分自身が100%禁酒して初めて、飲み過ぎが病気の原因になっていること、会社の部や課の飲み会でほとんどの人が嫌々ながら参加していることなどが分かりました。自分自身が飲んでいた頃は分かりませんでした。自分でお酒をやめてみて初めて分かりました。

消費者金融やタバコなども、もう一度見つめ直してみると、社会の流れのなかで問題があるものはだんだんと制限されていくのだとお分かりいただけると思います。

私自身、皆さんの行動を強制するつもりはありません。タバコに関してもお酒に関しても、「やめてください」と言うつもりはありません。皆さん一人ひとりが肌で感じたときがスタートであり、人に言われて始めることではありません。

3) 中小企業とCSRの推進について

この質問に関しては、環境対応に中小企業がどう対応すればよいかという質問を受けたときと同様、ずいぶん悩みました。しかし、今、回答は明確です。「中小企業は何もしなくてよい」、「中小企業は必要なビジネスに邁進すればよい」、That's allです。今や中小企業が大企業と取引する際に、トレーサビリティや環境の規制などの大企業のルールに対応せざるを得ません。しかし、対応していけばコスト面等も削減され、自然と環境対応に向かっていきます。

CSRも同様です。CSRの三角形（p21参照）の全項目、特に三角形の頂点の部分は大企業で対応して投資しても、まだまだ利潤を生まないところです。ですから中小企業は何もしなくてもいいです。徐々に社会が成熟し規制等ができてくれば、やらざるを得なくなる、そのときまでは中小企業は何もしなくていい、それが私の意見です。これは、タバコやお酒を上から規制するのではなく、本人が気付いたときがスタートだということと同じ発想だと思います。

4) 飛行機について

お一人「いじわるな質問ですが…」と断りを入れた上で、「飛行機に乗ることはどう思いますか？自動車をやめて自転車に乗っているそうですが、飛行機に乗りますよね？」という質問がありました。確かに飛行機には乗ります。しかし、今はものすごく回数が減っています。IBMにいたころは年10回くらい乗っていましたが、今は年1回くらいです。飛行機の燃費も良くなっています。

そういう意地悪な質問をするのではなく、人に責任を転嫁するのではなく、自らがどうしたら減らせるかということを考えてほしいと思います。自らの行動に期待したいと思いま

す。

5) 「規制や禁止を実行したら失業者が増えるのではないか」という質問について

この質問に関してもどこに行っても出てきます。100年くらい前に、アメリカで大企業は10~20社くらいでいいたろうと言われていました。それは、電話交換士の養成がままならなかったからです。しかし、今では電話交換士なんて必要ありません。そのように新しいビジネスが湧いて出てくると思います。今ではセラピストや、あるいは農業に回帰するというような、新しい動きが次々出てくると思います。

以上が、皆さんのアンケートにお答えしておいた方がいいたろうと思ったところです。他にさらに質問がある場合は、休憩時間や講義のあとに聞いてください。

司会 ありがとうございます。次にメインスピーカーの講義に移ります。福田先生、お願いします。

2. メインレクチャー（話し手：福田秀人）

皆さん、こんばんは。本日担当させていただく福田です。

皆さんにあらかじめ読んでいただくようお願いしておりました論文（「CSR推進の意義と課題：守りのCSRを徹底し、ステークホルダーに毅然と対応する」立教大学大学院社会デザイン研究科紀要「21世紀社会デザイン研究」第6号、2008年）を読まれたことを前提にお話をさせていただきます。



●何でもCSR論の脅威

あれもCSR、これもCSR、いろいろなものがCSRと言われています。そして、「攻めのCSR」というようなことも言われています。しかし、「攻めのCSR」は簡単です。自分で考えて自分でやることをやればいだけだからです。むしろ「こうしなさい」と言われることをやること、つまり、守るべきことを守る、法や規範で決められていることに従う

「守りのCSR」の方がはるかに難しいのです。

「守りのCSRだけではだめだ」、「攻めのCSRだ」というのは、難しい課題からの逃避だと思います。それは、違反を繰り返すスピード狂に「交通ルールを守るだけではだめだよ」と言っているのと同じです。「攻めのCSR」は論理のすり替えであり、「責任」というものは「やらなければいけないこと」と理解すべきと考えています。たとえば、環境に関しては、環境に対して「やってはいけないこと」と「やるべきこと」をはっきりとさせ、それらをどこまでやっているかを示すべきであり、それを放置して、何か環境に良いことをしただけでCSRというのは、あまりにも安易です。

●CSRの理念と定義を定める

日本はCSR後進国との決めつけがありますが、日本ほど、昔から企業の社会的責任が論じられ、重視されている国はないのではないか、と思います。石田梅岩の思想や、「売り手よし、買い手よし、世間よし」の近江商人の規範に見られるように、そういった考えは古くからありました。

また、憲法12条にCSRに通じる理念が掲げられています。「国民は自由および権利を常に公共の福祉のために用いるべし」と明記されています。ちなみに、「公共の福祉」に関しては、「公共の福祉とは何か」、「公共の福祉を理由に個人の権利を制限するのは問題だ」、等の論争が起きました。

また、憲法の前文には素晴らしいことが書いてあります。そこには、「将来世代に対する責任」が述べられており、これは持続可能性についての言及であります。私は、この憲法にもとづいて、「公共の福祉」に「持続可能性」を加え、CSRの理念と定義を、次のように規定すればよいと考えています。

CSRの理念：企業は、持てる自由と権利を乱用してはならず、それを、経済の健全な発展、公共の福祉、社会の持続可能性の維持・向上のために用いる責任を負う。

CSRの定義：企業が、経済の健全な発展、公共の福祉、社会の持続可能性の維持・向上のために果たすべき一連の課題を認識し、それを達成するための施策を、総合的・整合的に立案・実行すること。

ただし、経済・社会・環境のバランスをとることが重要だとする「トリプルボトムライン」という考えもおかしいと思います。「経済」は「社会」の一要素であり、社会のなかに経済があって、その経済活動を動かしているのが企業であり、企業は社会の一員です。それが社会の内側からいろいろな問題を起こし、それが環境にも影響を及ぼしている、というのが私の考えです。経済を社会と独立した要素として並べるのは、どういった根拠によるもので、そこでの社会はいかに定

義されているのでしょうか。

●民法と独占禁止法をみる

CSRとして守るべきと言われていることは、法律で、広範多岐にわたって規定されています。企業に、公正な競争や取引についての厳しい責任を課している独占禁止法、その他、労働基準法、環境基本法、そして民法などです。民法では、CSRとの関係では、1条と90条が、重要です。

民法1条（基本原則）：私権は、公共の福祉に適合しなければならない。

民法90条（公序良俗）：公の秩序又は善良の風俗に反する事項を目的とする法律行為は、無効とする。

公序良俗に反する行為：人倫に反する行為（愛人契約、殺人契約など）／正義に反する行為／不公平な契約／自由を極度に制約する行為／動機が違法な行為／バクチ行為／強行規定やその精神に反する行為。（強行法規については4-1で説明する¹⁾

民法90条の威力を示す例として、民法90条を用いて、労働基準法では違法とされていない男女雇用差別を、違法とした判例があります。労働基準法は、3条で、国籍、信条又は社会的身分を理由に雇用差別をしてはならないと規定していますが、性別には触れていません。書いてないことはやってもよいというのが法律です。このような労働基準法のもと、裁判所は、1970、80年代に、男女の定年の違いなどを違法とした判決を多く下しました。民法90条を用い、「男女の雇用差別は公序良俗に反する」としたのです。このように、民法90条の適用範囲はとてども広く、強力です。

独占禁止法では、顧客や取引先の無知や弱みにつけ込むことをタブーとしています。2006年の改正独占禁止法によって罰則規定も大幅に強化されました。ところが、その翌年に公正取引委員会が全上場企業に「改正独禁法について社員教育を実施したかどうか」を調査したところ、「実施した」と答えた企業は3割しかありませんでした。このような、最低限知っておくべき法律すら、きちんと教えない現実があるのに、「法律だけを守ってはいだめだ」というのはおかしな話です。

1) 詳細は「CSR推進の意義と課題：守りのCSRを徹底し、ステークホルダーに毅然と対応する」立教大学大学院社会デザイン研究科紀要「21世紀社会デザイン研究」第6号、2008年 http://www.rikkyo.ne.jp/web/z3000268/journalsd/no6/no6_thesis03.pdfを参照。

●労働CSR論に対する疑問

人を雇う場合に守らなければならない重要な法律が労働基準法です。その1条をみましょう。

労働基準法1条（労働条件の原則）：労働条件は、労働者が人たるに値する生活を営むための必要を充たすべきものでなければならない。この法律で定める労働条件の基準は最低のものであるから、労働関係の当事者は、この基準を理由として労働条件を低下させてはならないことはもとより、その向上を図るように努めなければならない。

労働CSR論として説かれる理念が、とっくに規定されているのです。ここで、労働CSR論に対する疑問に触れたいと思います。

もともと労働CSR論が出てきた背景として、欧米の多国籍企業が、海外で取引する企業をつうじて、意図的に低賃金労働や児童労働を推し進めたことから出てきた論議だと認識しております。また、そういった問題のある海外の企業を、どこまでチェックできるのかという問題があります。直接取引のある仕入れ先が100社あれば、その先は1000社を超えます。スーパーなら、数万社になるでしょう。そのトレーサビリティをどうやって確保するのでしょうか。また、捜査権を持っていない企業が一体どこまでチェックできるのでしょうか。

もうひとつの問題点として、過酷な労働条件による児童労働や低賃金労働の一部を報道することによって、全てがそうであるかのように論じられることがあります。これは情報操作であり、どこで過酷な児童労働や強制労働、低賃金労働が行われているか特定して論じることが大切です。

また、労働CSR論では、労働組合について、肝心の争議権に触れていません。争議権はストライキ等で戦う権利を認め、さらに刑事免責と民事免責という特権が与えられている権利です。もしも刑事免責と民事免責という特権が与えられない場合、ストライキという行為は全て不法占拠や威力業務妨害という違法になってしまいますので、日本や欧米先進国のように、法律で免責事項が規定されない限り、争議権というものは確立されません。

もうひとつ「攻めのCSR」としてワークライフバランスの論議もありますが、ワークライフバランスを主張するならば、せめて、ILO条約の第153条「有給休暇規定に関する条約」ぐらいは実行しなければならないでしょう。その中身は、「すべての労働者には年間3週間の有給休暇を与えなければならず、そのうち2週間は連続した休暇を与えるべし」というものです。先進国はこの30数年前にできた条約を次々と批准したにもかかわらず、日本はまだ批准していないのです。ヨーロッパ諸国では有給休暇の取得が義務化されています。オーストラリアでは義務化ではないですが、有給休暇を退職

まで積み上げていくことができ、定年前の1年間で有給休暇を消化するという例等もあります。一方、日本ではILO条約で決められている有給休暇を取得できないばかりか、2年間で有給休暇の権利が消滅してしまいます。また、サバティカル制度もありません。このような問題を無視して、「攻めのCSR」としてワークライフバランスを語るのは、おかしなことだと思います。

法を知り、教育する

今まで述べてきたとおり、「守りのCSR」の推進、特に、法の理念を理解することが非常に重要です。最低限、CSR3法といってもよい、独占禁止法、労働基準法、環境基本法の理念と、主な規定と主要判例を知っておく必要があります。2001年の司法制度改革推進本部が設置されてから、日本の法律はドイツ法の世界から英米法の世界へと急速に近づいており、裁判官は、理念にもとづく判決をどんどん下すようになっています。

また、先に述べましたが、改正独占禁止法の教育を実施した企業が3割にも満たないことは、法令遵守に対する企業の安易な姿勢を示すものです。企業不信は「守りのCSR」の不徹底の追求から生じます。「守りのCSR」を徹底せずに、「攻めのCSR」を実行しても企業不信は解消しません。また、「守りのCSR」を徹底するには、トップダウンで強力に推進する必要があります。啓蒙活動では徹底しませんし、企業内での聖域をなくさなくてはなりません。

社会貢献活動については評価いたしますが、CSRと位置づけるのはどうでしょうか。社会貢献活動は「責任の遂行」よりはるかに崇高な活動ではないでしょうか。それは、「責任」として実行するものではないと思います。

●エンドステートを明確にする（スライド2,3,4：p32～参照）

あらゆる議論において、はっきりさせなければならないことは、「我々は今、どこにいるのか（Where we are now?）」ということと、「我々は、かくありたい（We want to be）」ということです。この両端をはっきりさせ、その上で、「いかに到達するか（How to get there?）」と、「特に重要な課題（Key Task）」をはっきりさせるべきです。

「我々は、かくありたい（We want to be）」という姿に向かう間に、ギクシャクしたり、いろいろな想定外の状況が生じたりしますが、その時々に応じて、変化し対応し実行していこうというのが、スウェーデンのNGO代表のカール・ロベール氏が提唱したバックキャストの考え方です。将来予測を作り、それに合わせて計画を作り実行していくというフォアキャストと区別しています。「我々は、かくありたい（We want to be）」という状態、すなわちエンドステートをはっきりさせ、一つひとつの様々な状況をクリ

アしていくというプロセスを辿ることになります。

ただし、これは新しい方法ではなく、アメリカ陸軍作戦策定マニュアルで規定されていますし、企業でも、どこでも試みてきたことです。このようなことを画期的な考えのようにアピールするCSR論者の状況認識のありようには疑問を感じます。ちなみに「誰が敵か？何が障害か？」とありますが、私はCSRにおいては「大口株主」と、「守りのCSR」をきちんと論じず、「攻めのCSR」をアピールするCSR論者が、最強の敵であり、障害だと思っています。いずれにしても、CSRを推進するためには、「意思（目的）」と「障害（問題）」をはっきりさせなければなりません。

そして、CSRを推進する戦略や方法は、他の試み同様に、次の3つをみだすものでなければなりません。

- ・適合性（シュアタビリティ）…いいことなのか？適しているのか？
- ・実行可能性（フィジビリティ）…達成できるのか？
- ・受容可能性（アクセプタビリティ）…資金的、法的、政治的に受け入れられるのか？

●トレードオフを直視する（スライド6）



これを検討する場合、次のように、いろいろなトレードオフに直面しますが、これにいかに対応すべきかをCSR論者は、課題毎に明確にすべきであり、それを欠いた、すべてのステークホルダーにGOODであれといったようなCSR論は、できないことをやれという無責任なものだと考えています。

- ・大口株主にとってGood（あるいはBad）ならば、環境にとってGoodかBadか？
- ・消費者にとってGood（あるいはBad）ならば、環境にとってGoodかBadか？
- ・大口株主にとってGood（あるいはBad）ならば、雇用にとってGoodかBadか？
- ・環境にとってGood（あるいはBad）ならば、雇用にとってGoodかBadか？

トレードオフを直視し、何を、誰を、どこまで犠牲にする

のかを明確にすることが重要なのです。トレードオフというのは対立することです。何かを犠牲にしなければ、うまく行きません。Win-Winを実現し、みんな仲良くうまく行くということはありません。

では、何を、犠牲にするのか。当然これからは環境が重視されます。環境のためには経済活動を抑えなければなりません。経済活動が低下すれば、雇用は落ち込みます。何を、どこまで犠牲にするのかという線引きをしっかりとしなければなりません。

●ワシントン・コンセンサス

ワシントン・コンセンサスとは、アングロサクソン流の市場原理主義です。経済学の主流ではなかったのですが、1990年代後半に突然前面に出てきました。私の学んだ経済学の世界では、失業の軽減、収入格差の縮小、こういうものに貢献しないものはマイナスという発想のものでした。市場のメカニズムを放任してただけではうまく行かないから、法による規制、経済政策が必要というものが基本でした。しかし、これが突然取り去られてしまいました。

ワシントン・コンセンサスは、私の論文に引用した、次の表のようなアングロサクソンの価値観を反映したものであり、株主、特に、投資ファンドにとって都合のいい株主至上主義です。

	企業は株主のために存在する	全利害関係者のために存在する
アメリカ（82社）	76%	24%
イギリス（78社）	71%	29%
フランス（50社）	22%	78%
ドイツ（110社）	17%	83%
日本（68社）	3%	97%

出典：吉森賢『EC 企業の研究』日本経済新聞社、1993年

さらに、「企業の業績が悪化した場合、経営者が株式配当を減らすか、雇用を減らすかのいずれかを選択するか」と質問したところ、「従業員の一部を解雇しても配当を維持する」と回答した経営者の比率は、アメリカ89%、イギリス89%、フランス60%、ドイツ59%、日本3%でした。英米のCSR論のバックグラウンドは、イギリスの社会学者ロナルド・ドーア氏が「特異な価値観」と表したものであり、日本と全く異なることを、はっきりと認識しなければなりません。

日本におけるCSR論のなかでステークホルダーとして真っ先に株主をあげるのは、ワシントン・コンセンサスの反映でしょう。それまでのCSR論では、ステークホルダーとして株主をこのように強調するものはなく、寄付行為などが株主利益を棄損するものではないかという議論があった程度と思います。

21世紀に入ってからのCSR論における一番の問題は、株主をステークホルダーに入れたことです。会社は誰のものかと思ったら、当然株主のもので。会社の支配者である株主をステークホルダーにいれたことがCSR論をおかしくしています。ワシントンコンセンサス派の策謀とまで断定する証拠は持っていませんが、株主利益や株価上昇をCSRとからめて強調する論説やコンサルには、アングロサクソン流の特異な価値観の押しつけを感じます。

●まとめ（スライド7）

流行に乗るのではなく、本当にCSRを論じ、推進するならば、きちんと法を学び、また、いろんなステークホルダー間のトレードオフを直視しなければならないと思います。

理想論を規範論にしたり、難しいことや危険なことを簡単に考えるのは、無責任な素人の暴論です。

また、CSRの推進は、企業のためになるというアピールがありますが、そうではなく、社会のために、環境のためにやるのがCSR論です。企業のためにやるのは経営コンサルタントの仕事です。「責任なのだからやれ」をCSR論の基本に据えるべきだと思います。

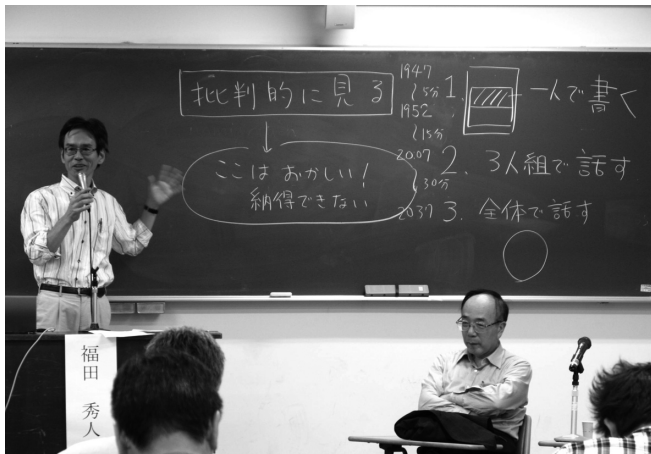
ご清聴ありがとうございました。

3. ディスカッションおよびQ&A

司会 後半は中野さんをお願いします。

中野 中野です。本日の福田さんも先週の岡本さんもはっきりした物言いで、大変興味深く聞かせていただきました。

さて、福田さんが大切にされているのは、「批判的に見る」ことだそうです。ご自身が話されたことに対して、皆さんに批判的に見てほしいということです。したがって、今日はみなさんに福田先生の話をも批判的に見ていただいて、「ここはおかしい！納得できない」という意見のみを出していただきたいと思っています。



本日は最初の5分ほどで一人ひとりがそれぞれの意見を紙に書いていただき、次に3人組のグループで15分ほど話し合ってもらいます。そしてそのあと、輪を作って全体で30分ほど話し合いたいと思います。それではよろしくお願いします。

～各自記入～

中野 みなさん、どうでしょうか？書けたでしょうか？なかなか批判的に書くというのは難しいと思いました。疑問や質問のレベルでしかなかかなか書けないものですね。

それでは5分経ちましたので、3人組を作ってくださいませ。前回と同じように、同じ会社の同僚の方や知っている方同士は避けて、お互い知らない方同士で3人組を作ってください。

～3人組ディスカッション～

中野 お話は尽きないと思いますが、一つの輪になって全体ディスカッションに入ります。皆さん、移動をお願いします。

～全体ディスカッションおよびQ&A～

中野 さて、福田さんの話を批判的に見るということだったのですが、私たちのグループは結構納得させられてしまっていて、悔しがっていました。批判的に見ることを大切にしている福田さんの話に批判的に返せばいいのですが、こういう話をもっと聞きたい、もしくはしたい、自分はこんなことを感じているけれどどうだろう、などということを発表していただきたいと思います。皆さんで話し合うというトライをしてみたいと思います。

中野 実験でこの場でアンケートを取ってみませんか？「企

質問者	質問内容	福田回答
川嶋	論文中で取り上げているアンケート『企業は株主／全利害関係者のために存在するか？』というアンケート調査は1993年のもので古いのではないかと？今ではずいぶんと変わっているのではないかと？	このアンケート調査を取り上げた理由 ・CSR論において株主をステークホルダーとしてみるという考えが突然出てきたのが1990年代末なので、同じ90年代の調査でも有効と考えたから。 ・古い調査ではあるが、非常に価値のある調査であるから。また、今回同じ調査をしても、あまり変わらないのではないかと推測するから。

業は株主のものか？全利害関係者のものか？」というテーマでアンケートを取りたいと思います。あえて、どちらか一方を選んでください。



<緊急アンケート>

「企業は株主／全利害関係者のために存在するか？」

企業は株主のために存在する	4人	約13%
企業は全利害関係者のために存在する	27人	約87%

中野 それほど極端ではないですね。それでは質問に戻しましょう。

質問者	質問内容	福田回答
男性参加者	アメリカ型の資本主義に追随するのではなく、日本的な資本主義を作っていくべきだと考えるか？	日本だけでなく世界的に、企業は社会のためにあるという体制をしくべきだと思う。またそうした方が、企業は活性化すると思う。
女性参加者	世界の流れのなかで、グローバルな価値観や日本のあり様というものは全体的に変わっていかなければ、その変化は持続しないのではないか？	企業を活性化するには、従業員のロイヤルティ・コミットメントを高めなくてはならない。従業員は多くの企業情報を握っているが、その仕事を完璧に監視することは不可能なので、従業員によるモラルハザード（自分の業績や利益のために、会社や顧客に対して不正をはたらく等）が発生する可能性が高い。モラルハザードによって企業の利益が一瞬にして吹き飛ぶことも十分ありうるので、従業員のロイヤルティを高め、従業員との良好な関係を築き、モラルハザードの発生を防ぐことによって企業の利益が上がる。 企業と従業員との関係だけでなく、企業も人もより多くの利害関係者や社会と協力関係を築くことで共存共栄でき、それが長期的に利益を産み出す経済合理

		的な行動だということは経済学のひとつの見解になっている。競争に打ち勝ち、利益をどう出すかではなく、共存共栄によってどうマイナスを防ぐかという発想である。
女性参加者	従業員の会社へのロイヤルティは精神性の問題ではないか？	精神性の問題ではない。ロイヤルティを高めるようなインセンティブをどう持つか、低めるようなインセンティブを持つかが問題。
女性参加者	もともと日本の社会には「三方よし」に代表されるような儒教の精神や文化や、特にCSRと言わなくてもそれぞれがやるべきことをやってより質の高いものを追求する志向性があったが、日本社会のなかに欧米の文化が入り欧米化が進んだことによって、今あらためてCSRとして日本で問い直されているのではないか？	「三方よし」は儒教の精神ではないが、言わんとされていることには基本的に同意。しかし「三方よし」論も、世間と企業が良い関係を築かなければいい社会にはならないという理由と同時に、いい社会を築かなければ企業もつぶれてしまうという合理的根拠もあつたはず。もちろん日本の文化性もあって受け入れられた。 日本のCSRと欧米のCSRの違いは、会社の成り立ちの違いにも因る。そもそもの株式会社の由来は、インド収奪を目的とした東インド会社であった。日本の近代的ビジネススタイルは江戸時代から見られるが、収奪を目的とした会社ではなかった。このように歴史的な成り立ちの違いが、日本のCSRと欧米のCSRの違いに影響を与えていると考える。 スティグリッツ（経済学者）が1990年代に出てきた株主至上主義や時価発行主義に対して批判を加えた上で、アメリカでは国際競争力を持つ産業は「メディカル（医療）産業」「ソフトウェア（知的所有権）産業」「金融産業」の3つしか残っていないと指摘。一方、日本の企業や日本製品の多くは世界中で受け入れられてきた。日本の企業や日本製品の多くが海外の人々に受け入れられてきたのは、各国の社会に貢献するもの、つまりCSRの要素を持った事業展開だったからではないだろうか。したがって、CSRをよく守る企業が発展するというならば、日本企業はCSRをよく守ってきたと言えるのではないだろうか。
女性参加者	1993年のデータはアメリカ・西欧・日本のものだが、文化性を考えると、北欧諸国やアジア諸国の場合にはどの	もしも北欧諸国やアジア諸国の調査結果があれば、非常に貴重なものになる。質問の内容も答え易いものなので、是非調べてほしい。CSR研究のなかで、非

	ような結果が出るだろうか？	常に有効になるであろう。
新谷	日本の企業は日本の法律だけ守ればいいのか？海外で展開する場合は、その現地の法律が優先か？日本の法律が優先か？	基本はまず日本の法律に従うこと。海外での事業活動を展開する場合には、現地の法律が優先。しかし、日本の法律は普遍的な要素をかなり含んでいて、他の国と大きく対立することはそれほどないであろう。
男性参加者	それぞれの国や地域によって社会の状況は違うが、「社会」をどこまでの範囲で捉えているのか？企業を恨んでいるかもしれない発展途上国を含めた範囲か？あるいは日本や欧米諸国の範囲か？また「企業は社会のために役に立たなければつぶれてしまえ」ということと、「企業は社会のなかにある」ということは矛盾しないか？	企業は社会の構成要素である。なぜ構成要素として認められるかということ、社会に貢献するからである。社会に対する貢献のあり様のひとつとして、貢献をすると同時に負の影響を与えないことがある。現実には負の影響を与えている。そこで、企業外の立場から企業に対して目を光らせ、訴求したり、アピールしたりしていくのがCSR論であろう。企業が自ら気づくことであればいいが、気づかないことを指摘することが必要であろう。
男性参加者	日本の法律より厳しくない国で日本の法律を守って事業活動を行った場合、その国の法律基準で事業活動を行う企業との競争に負けてしまっは元も子もないのではないか？日本の法律を守ってまで戦うというのは企業の判断か？	現地の法律に従えばよい。ただし、日本の企業は法律以上のことをしていると思う。基本は「責任」という概念において、法律を守ることが必要であろう。そして、「企業の理念」で動くべき。法律を守ることが最低限必要であり、それ以上先のことは「責任」ではなく、別のことである。また、法律ではないが、批判されていること、社会から要求されているものに対して正しく対応していくことは必要である。
男性参加者	株主以外の利害関係者を重視するということは、実際具体的にどうすることか？非論理的ではないのか？お金を出した株主が発言権を持つということが、一番シンプルで理論的ではないのか？	会社は株主に従わなければならないのが原則。利害関係者全員の意見を聞くことは不可能である。いろいろな意見や社会的評価をとりまとめ、企業に対してCSRを指導していく役目を負い、CSRをリードしていくべきなのが、CSR論者なり業界団体である。しかし、CSR論者が「なんでもCSR」になっており、そういったことを問題とみている。
女性参加者	業界団体や外郭団体が主導し評価し合うことによって、横並びの問題があるのではないのか？いろいろな業種があり、各企業が別々にCSRに取り組み、それぞれの個性を活かした、いろいろなCSRがあってもいいのではないのか？	企業同士が評価し合ったり話し合ったりすることには、CSR論のなかで大変重大な問題が生じる。例えば、鉄鋼業界においてCO2排出量を決めて生産調整した場合、競争上のカルテル行為になり、CSRを名目にした重大な違法行為になる。しかし、それを消費者や社会がどう評価するかという問題がある。

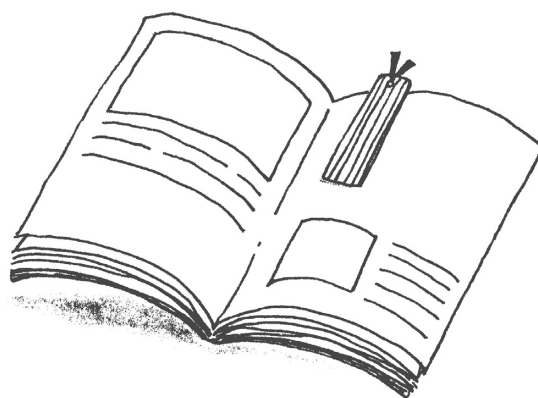
	また、CSRに関しては行政から市民団体までいろいろな基準があり、コアがない。各企業がバラバラにCSRに取り組むことになる。まずは業界の共通性を持っている業界団体で基準を作ることがたたき台になり、重要である。例えば、製薬業界などは製薬業界のコンプライアンスを決めている。
--	--

中野 議論が熱を帯びてきたところですが、残念ながら時間になりました。皆さんに書いていただいたリアクションペーパーは、すべてスキャナで取って、全講師陣に即日メールで送られ、拝見させていただいています。話足りなかったところは、リアクションペーパーに書いてください。今日の感想や次回のスピーカーに対する質問等も書いてください。

次週は中西さんですので、次週の予告をお願いします。

中西 皆さん、こんばんは。次回の準備は特にありません。街づくりの事例を紹介して、「こういう取り組みもESDと呼べるのではないか」ということを話したいと思います。皆さん、楽しくやりましょう。

司会 皆さんありがとうございました。リアクションペーパーに来週の懇親会の出欠のご記入もよろしくをお願いします。それでは、お気をつけてお帰りください。



08年10月17日
立教大学ESD研究センター

CSR！次のステップへ
持続可能な社会の創出のために

CSRの推進は、重要かつ至難の課題

立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
福田 秀人

1

我々は、今、どこにいるか Where We Are Now?



いかに到達するか How To Get There?
特に、主な課題は Key Tasks・・・?

我々は、かくありたい We Want To Be

ところで、我々とは誰か？

誰が味方で、誰が敵で、何が障害か？

2

まずは、戦いと戦略とはなにかを正しく知ることが大事

戦い: 自らの意思を実現する障害を克服する活動。

戦略: 実現したい意思を目的として明確にし、
その実現を妨げる障害となる問題を克服するための
課題と対策をまとめたもの。

意思(目的) + 障害(問題) → 戦い → 戦略(戦いの策略)

戦略 = 戦力の強化策 + 戦力の運用策



連合 = 共存共栄の理念 + リスクの分担 + 機密情報の共有

強者連合の追求、弱者連合の回避が、決定的に重要!

3

戦略の評価要素と手順

① 適合性(シュータビリティ)

範囲と構想が、任務に適合し、仮定は妥当か。



② 実行可能性(フィジビリティ)

使用可能な資源を使用して任務を達成できるか。



③ 受容可能性(アクセプタビリティ)

予想される人的・物的・時間的コストが成果に見合ったものか。
また、資金的、法的、政治的に受容可能か。

4

リーダーに必要な資質

知識、判断力、経験、教育、知能、大胆さ、感受性



- ①現実的な行動方針を見つけ、非現実的な行動を捨てることができる。
- ②計算されたリスクと、破滅につながるギャンブルを識別できる。
- ③任務を追及する不屈の決意と、
実りのない行動を追求する頑迷さを識別できる。
- ④困難と挫折を識別できる。

経験不足→非現実的で、運まかせで、頑迷で、無茶な行動をとる

リーダーは、どこにいる？ どうして選ぶ(or 連れてくる)？

5

トレードオフを直視し、何を、誰を、どこまで犠牲にするのかを明確にする。
(ただし、誠実な経営者には、胃に穴が空き、不眠症になる決断が必要)



株主をステークホルダーに含めたCSR推進論は、
アングロサクソン親派の株屋と、コバンザメ商法の評価ビジネス屋がプロデュース？

6

アマチュアイズムの脅威

プロとアマチュアの決定的な違い＝難しさや危険を知っているか否か。

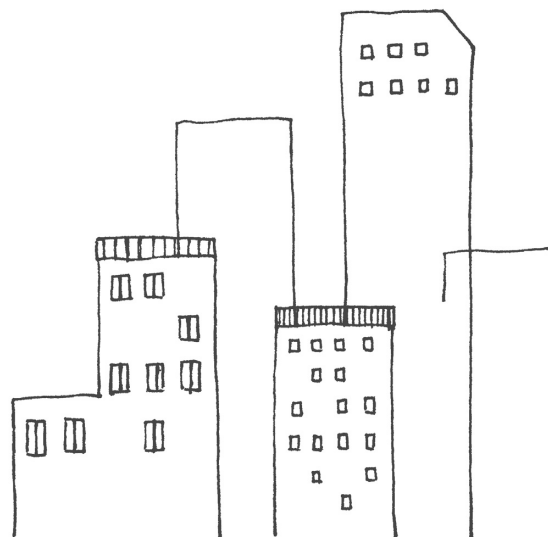


- ①理想論を規範論にする。
- ②当事者の能力や努力を知らず、無能・無責任・怠惰・・・と批判。
- ③難しいこと、危険なことを簡単に考え、「やれ」と言う＝「素人の暴論」。
- ④あらゆる事故、問題の原因を「意識」、「体質」、「制度」の3つに求める。
- ⑤現在の制度のデメリットのみをあげつらう。
- ⑥新たな制度をメリットのみをアピールして提唱する。
- ⑦新たな制度のデメリット、副作用を考えない(知らない?)。
- ⑧新たな制度が諸問題を一気に解決すると考え、改革や革命を連呼。
- ⑨できない理由を、改革する創造力や意欲の不足に求める。
- ⑩多くの課題にはトレードオフがあることを考慮せず、総花的に課題を列挙。

無責任or愚かな論者・リーダーの特徴

- ①権限による強制に伴う責任の発生を忌避し、自己啓発・集団合議を説く。
- ②目的達成のための手段を検討せず、特定的手段にこだわり、手段の目的化の愚を犯す。
- ③計画と評価にこだわり、PDCAサイクルで人々(or部下)を動かそうとする。

7



10/24 (金)

連続セミナー『CSR！次のステップへー持続可能な社会の創出のためにー』第4回記録

題目：対話からはじめる街づくりーESDの視点からCSRの在り方を再考するー

日時：2008年10月24日（金）18：30～20：45

場所：立教大学池袋キャンパス5号館5401教室

講師：中西紹一

司会：川嶋直

1. 前回からのブリッジ

司会 こんばんは。第4回目を始めます。いつものように皆さんに書いてもらったリアクションペーパーのなかにあった疑問点や質問等に、前回スピーカーの福田先生に補いの話をしてもらうところから始めます。そして、今日のスピーカーの中西さんにお話をさせていただきます。それでは最初に福田さんをお願いします。

福田 皆さん、こんばんは。それではリアクションペーパーの質問に答えさせていただきます。

質問・疑問・反論	福田回答
守りを貫くと進歩はないのでは？	「守りもできずに進歩を言うな」という発想です。それから、守りが不十分の進歩・成長は極めて危険です。私の専門は危機管理ですが、進歩・成長というのは新しいものへの挑戦です。守るべきもの、守らなくていいものははっきりしなくてはなりません。それをやらないでイケイケとどんどん前へ進むと、ずさんなものとなり失敗します。初期段階にうまく成長してしまうと、あとで痛い目を見ます。自分自身の経験則でもあり、私自身も反省しております。
常にバブルを生まなければ景気を回復することができない資本主義の欠点を改善できないか？	改善できます。グリーンスパンが新市場主義だとか資本の論理だとか、従来の経済学にないようなことをねじ曲げて言っていることが問題であり、「諸悪の根源はアメリカにあり」と言えます。しっかりとマークしなければなりません。いずれにしても、アメリカがしっかりとくれないと話にはならないと思います。
トリプルボトムラインの経済は社会に含まれるのではという指摘だったが、政治も社会に含まれるのでは？	社会の定義次第ですが、私もそう思っています。小さなコミュニティを社会という場合とは、全く考えが違ってくると思います。

課題設定と結論がうまく結びつけられていない。	かなりジャンプしているところもあると思います。相対的に優位性の問題でありませんが、ロジックが減茶苦茶なCSR論よりはマシだと思っています。お断りを入れますが、私はCSR反対ではありません。CSRは極めて重要だと思っていますし、CSRが出たときに非常に期待しました。しかしその内容が「なんだこれは」という内容だったので、頭に来たということです。
岡本先生が主体的に日常を見つめ直すことを提示したことと異なるのでは？	私は、これまであまり論じられていなかった企業を見つめ直すツール・考え方を提示したつもりです。これをどう解釈するかは、皆さんのそれぞれの判断の問題です。あまりにも抜け落ちていと思われる視点を提示させていただいたのが基本的なスタンスです。
「責任だからしっかりやれ」ではモチベーションがあがらないのでは？	「責任だからしっかりやれ」でモチベーションが上がらず下がるような従業員がいるならば、クビにしまえというのが私の発想です。「責任だからしっかりやれ」という観点なくして、自己啓発や呼びかけだけでうまく行くなれば、どこの企業も困っていません。責任とモチベーションは関係ありません。
企業人にはルーティーンもノルマもあるなかで、プラスαではとてもできないのでは？	どうでしょうか？このあたりは認識の違いです。どこまでできるということではなく、よりよいものを目指すということでは、できると思っています。また、そういう企業をかなり知っているつもりです。しかし、大変しんどいことです。
やはり啓蒙は大事なのは？	啓蒙は非常に大事ですが、ある程度自発的にやるためには、「なぜやるのか」、理由をしっかりと説明する必要があります。また、啓蒙で動く人は10人中5人くらい、地域や組織によっては1人か2人ではないでしょうか。そういうことも覚えておく必要があります。
日本はどのような欧米と違うCSRを展開すべきか？	日本の企業はかなりCSRを展開していると思います。アングロサクソン発信のCSR論には、浅薄なものを感じます。彼らは、「これまではダメだ、日本はダメだ」から入りますが、「これまで積み上

質問・疑問・反論	福田回答
	げてきたものは何か)、成果をあげてきたものをしっかり見据えることも大事だと思います。
ISO本部がCSRをなかなか標準化できないのは国によって考え方が異なるからではないか?	違います。発展途上国でもこの程度のことにはしなさいという、先進国では当たり前の内容を織り込もうとしているからです。また、軍隊を対象から外しているからです。例えば、軍事費60兆円を使い、膨大なる消費と環境破壊をしているアメリカ軍のことは考えねばならないはずですよ。
「損しても責任だからやりなさい」というのは難しいのでは?	難しいです。難しいことをやるのが経営であり、いろいろな運動であると思っています。難しさをはっきりさせ、それにチャレンジすることが不可欠だと思います。
戦略論を持ってきたのは大変勇気のあるチャレンジだ	海上自衛隊幹部学校の教官を12年やっていますので、まったくチャレンジではありません。ただし、「軍事は破壊、企業や経済は創造」で正反対でありますので、うかつに軍事論を持ち込むことには気を付けています。
株主は大事にしなければならぬのでは?	もちろん大事にしなければなりません。大口株主は経営者の解任権も持っており、大変な影響力を持っています。大切なのは、企業より力を持っていないステークホルダーとの関係です。力関係に注目し、力のないところを対象を考えるべきだというのが、CSRの基本的なスタンスだと思っています。力関係があるということ的前提にCSR論は成り立っており、裏を返せば、力を変な方向に行使しないように企業を見張るということを基本に据えるべきです。

司会 それでは、今日はこれから中西さんの話を1時間ほどお願いしたいと思います。

2. メインレクチャー（話し手：中西紹一）

皆さん、こんばんは。中西です。よろしくお願いします。



これまでの岡本さん、福田さんの2回の講義は理論的な話でしたが、今回の私の講義では、私が関わっているプロジェクトを事例として取り上げ、「対話からはじめる街づくり」というタイトルで考えていきたいと思っています。

本論に入る前に、お配りした「地球温暖化対策推進大綱の流れと環境エポック2009-2014」をご覧ください。これはある研究会から整理を依頼された「環境エポック」をまとめた図です（p69参照）。これを見て、皆さんに質問したいと思います。京都議定書のCO2排出量・90年度比6%削減に関して、達成できると思う人は手を上げてください……それでは、達成できないと思う人は手を上げてください……ありがとうございます。ほとんど全員ができないと思っていますね。全くその通りだと思います。

このように2014年までの全体の計画が出ていますが、私は広告のプランナーという仕事をやっていますので、このような情報を整理したり編集したりします。皆さんはこれを見て感じることはありませんか？聞かせていただきたいと思っています。

男性参加者) いろいろ対策してはいるけれど、成果に繋がるかどうかはわからないと思います。

男性参加者) 数字通りの計画が達成できるか見えてこないです。

女性参加者) いろいろな具体的な行動指針が書かれていますが、どのくらいの効果があるのかわからないと思います。

ありがとうございました。この情報を持ってきたのは、皆さんに私の仕事の中身を説明するために持ってきました。

私が関わっている広告という仕事は、先のこと、未来のことを予測しなければなりません。私はこれを見たとき真っ先に思ったことが3つあります。

一つ目は、皆さんが思われたと同じように、京都議定書のCO2排出量・90年度比6%削減は達成できないだろうということです。

二つ目は、このような地球温暖化対策の動きがたくさん出てくると、具体的なCO2削減可能な環境技術に関心が集まるだろうということです。しかし、新しい環境技術が出てきて技術革新があったとしても、ドラスティックなCO2削減は可能でしょうか？みなさんはどう思われますか？お聞きしたいと思います。皆さん、手を挙げてお答えください。

- ・可能だと思う人…なし
- ・分からない人…約半分
- ・多分不可能だろうと思う人…約半分

可能だと思う人はいませんね。では、技術革新はあるだろうが、技術ではドラスティックなCO2削減は無理だろうという場合、社会はどこに関心を向けるべきでしょうか？そこで、三つ目に思ったこととして、CO2の削減を実現できるのは教

育しかないだろうということです。おそらく教育以外ないのです。これから5年間くらいでドラスティックな技術革新があったとしても、技術でCO2削減を実行できなければ、学校教育も生涯教育も含めた教育にアプローチし、学びのスタイルを変化するしかない、技術がダメならば残るは教育しかない、そういう議論がここ5年間くらいで出てくるだろうということを思いました。

このように、これから何が起こるかの予測を立て、企画をするのが私の仕事です。そのことを説明するために、この用紙を持ってきました。

さて、難しそうな話はここまでにして、これからは楽しく話を進めて参りたいと思います。

今日のテーマは「対話からはじめる街づくり」で、ESDの視点からCSRのあり方を再考したいと考え、ひとつ事例を挙げて検討したいと思います。

●ESD (Education for Sustainable Development) の意味を、私なりに捉え直してみる (1) (スライド 2 : p45参照)

さて、ESD、“Education for Sustainable Development”の意味を考えたいと思います。

私は広告業をやっておりますので、どうやったら難しい言葉や技術を分かり易く捉え伝えられるか、ということをついつい考えてしまいます。広告コミュニケーションに携わる者の癖です。

ここで“Sustainable”、「持続可能」の部分についてはイメージが沸き易いと思いますが、“Development”の部分はイメージが沸きにくいのではないのでしょうか。

“Development”の意味を辞書で調べてみると、次のような意味が出ています。

- 1) 発達、発展、成長、発育、進化
- 2) 発達した状態、発展の所産、新しい情勢
- 3) (資源・土地・新業の) 開発

“Development”というと、このようなハードの開発ということを想像されると思います。私が仕事上よく使う言葉として「企画開発」があります。これはハードの開発や土地の開発などの開発ではなく、新しい発達や発展の方向性を示す意味で使っています。そこで、ESD (持続可能な開発のための教育) を、「持続し続けながら成長するための人材育成のあり方」と、平たく言ってもよいのではないのでしょうか。

●ESD (Education for Sustainable Development) の意味を、私なりに捉え直してみる (2) (スライド 3)

そして、ESDの意味をもう一度捉えてより簡潔に表現するならば、「持続可能な社会に向けた人づくり」、「持続可能な社会を創るための人づくり」と言えるだろうと思います。

このスライドにあるESDの概念整理の図は、環境省の白石

賢司さんがESD-Jの講演で説明されたものです。この図のESDの概念によると、ESDとは「持続可能な社会に向けた人づくり」であり、それには「個々人の意識・ライフスタイルの変革」と「職業等を通じ社会経済構造の変革に取り組む人材育成」が必要であるということです。持続可能な社会に向けてどのような人が育つべきか、どのように人を育てていくべきかが見えてきます。これが私の捉えるESDの考え方になります。

●ESD (Education for Sustainable Development) の意味を、私なりに捉え直してみる (3) (スライド 4)

ESDを「持続可能な社会に向けた人づくり」と位置づけた場合、その要素として何が考えられるでしょうか。「持続可能な社会」を創造する要素というものは、複層的であり、直線的ではないと言えます。岡本さんが講義で“Moving Target”とおっしゃっていましたが、「持続可能な社会」に向けたテーマは日々変わっていくものであり、今日良いと思っていたものが、明日には良くないものになっているかもしれないというものであり、変化していくものであると言えます。

そこで、ESD-Jのホームページから引用した文章ではありますが、「持続不可能な社会の課題を知り…それらを解決するためにできることを考え、実際に行動し、そのような経験を通じて、社会の一員としての認識や行動力を育む」ことが必要であります。そしてそこでは、参加体験型の「学び」が非常に重要な位置を占めています。

●では、ESDを推進するにあたり参考にすべき学習理論 (といえるもの) は存在しないのか? (スライド 5)

それでは、ESDの推進のために参考にすべき学習理論はあるのでしょうか。それは、私自身非常に関心があり、日頃からよく使う理論なのですが、“PBL”というものをご紹介します。

“PBL”は“Problem Based Learning”もしくは“Project Based Learning”の略語で、教育法のひとつです。日本では、介護や医療等の領域でよく使われる教育スタイルであり、最近では小学校等でもよく使われる教育スタイルです。

●PBLは、SBL (Subject Based Learning) の対極に存在する学習法 (スライド 6)

さて、PBLがどんなものかということ、SBLの対極にあるものです。

SBLというのは、“Subject Based Learning”の略で、その学習法は次のような手順です。

- 1) 知る必要があるものが告げられる
- 2) その事柄を学習する

- 3) その事柄の活用方法を説明するための問題が与えられる

SBLの例としてお配りしたプリントに挙げています。「今日はまず、金属を通る電流について学習しましょう。そのあとで…」というように、はじめに「何を知る必要があるのか」が提示され、そしてその「知ったもの」を使った「問題」が与えられます。

しかし、SBLでは、生じる問題が違えば、「知ったもの」を問題の解決に使用できず、解決法が出てこないケースが生じます。

そこで、SBLに対する理論として、PBLがあります。PBLは次の手順を踏みます。

- 1) 問題が提示される
- 2) 知る必要のある事柄を確認する
- 3) それを学習する
- 4) それを適用する

PBLはまず「問題ありき」で、その解決のために「知る必要があるものは何か」を考えます。

PBLの例として次の文章をあげています。

「ここに故障したトースターがあります。これを直してください。でなければ一步ゆずって、少しでも使えるようにして下さい。」

このように、はじめに「問題」が与えられ、そして科学の原理や機械の構造等を学ぶスタイルです。

ところで、PBLは非常に良いものなのですが、悪いものと紙一重の面もあります。なぜならば、経営破綻したリーマンブラザーズが、お金を貸した相手がつぶれても借金を返してもらえるようにするにはどうすればいいのかということで、「クレジットデフォルトスワップ」という仕組みを作ったのですが、その開発プロセスはPBLのプロセスと非常に似たものだったからです。PBLは良いものも作れるけれど、大量破壊兵器のような金融商品も作ってしまうというスタイルとも言えます。

そしてもう一点付け加えると、このPBLという教育法を世界で一番実践している人がいます。それは、アメリカの映画監督のジョージ・ルーカスです。ジョージ・ルーカスは私費を投じて「ジョージ・ルーカス教育財団」を設立し、新しい教育のあり方を求めて、PBLを実践しています。

したがって、ESDはPBLのような学習法を通じ、試行錯誤を繰り返しながら、新しい出口を見つけていき、未来の可能性を見出していくということになっていくと思います。

●PBLの学習法ステップには6つの段階が存在している (スライド7)

そして、PBLには6つの学習ステップがあります。この6つの学習ステップは、PBLの本には必ず書いてあります。

- 1) まず問題に出会う
- 2) どうしたら問題が解決できるかを理論的に(実践的・論理的手法によって)考える
- 3) 相互に話し合い、何を調べるべきか明らかにする
- 4) 自主的に学習する
- 5) 新たに獲得した知識を問題に適用する
- 6) 学習したことを要約する

このように非常にシンプルなスタイルです。このスタイルはESDと非常に似ていると思っています。そして、このなかで一番大きなポイントが3番になります。つまり、「対話」が非常に重要なポイントです。「対話」が、PBLにもESDにも、双方に不可欠な学びのスタイルなのです。

●ESDにも、PBLにも、双方に不可欠な学びのスタイルに関して(スライド8)

こちらの「対話」を表したスライドの図もESD-Jのホームページから引用しました。向かい合ってディベートをするのではなく、相手と一緒に未来を見て話し合うというやり方が「対話」です。

私の経験からですが、私は、日本人がこの「対話」について甘く見ており、その難しさをあまり理解していないのではないかという問題意識を持っています。つまり、同じ日本語さえ話していれば、言語が同じでありさえすれば、お互い分かり合えるというような前提があり、それが「対話」の根本としてあるように認識されているのではないか、そのようなことに関して不安を感じています。

実は「対話」は難しいのです。ヨーロッパやアメリカで、なぜ、ワークショップやファシリテーション等が発達したかということ、人種・宗教等の多様性があったからだと思います。「対話」の技術がないと、話し合いが成り立たなかったのだと思います。それ以外にも要素はあったと思いますが、いずれにしても、学びのスタイルにおいて「対話」が非常に重要であるということを、頭の隅に置いていただければと思います。私自身は「対話」に延々とこだわってきていますし、これからもこだわり続けていきたいと思っています。

●対話と公共性の不可分な関係について(スライド9)

皆さんにお渡ししている資料にもありますが、ここにロバート・N・ベラー『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ—』(みすず書房、1991)という本の最終章「公共哲学としての社会科学」から抜き出した一節があります。

公共哲学としての社会科学は、たんにその発見物が学者世界の外の集団や団体にも公共的に利用可能あるいは有用であるから「公共的」だというのではない。それが公衆を対話へと引き込むことを目指しているから「公共的」なのである。

非常に示唆的な一節です。ここには「社会科学」と書いてありますが、この部分を“ESD”と置き換えて、「公共哲学としての持続可能な開発のための教育」と言ってもいいと思います。

「対話」が成立するということが、「公共性」を担保する上で非常に重要なポイントになってきます。「対話」が成立しないところで高い「公共性」を語っても何の意味も持ちません。公共性の高いと言われている建物や組織であっても、そこで「対話」が生まれなければ、公共性が高いと見なされないと思います。これは非常に重要な考え方だと考えます。

ESDのような「公共性」や「公益性」が高いものに関しては、「対話」が今まで以上に重要になり、「対話」というものは今まで以上に難しくなっていくと思います。

●ただし互いに未来を見つめあうフラットな対話はそう簡単にはできない（スライド10）

さて、互いに未来を見つめあうフラットな対話というものはそう簡単にはできません。そして、新しい学びのためには、学習環境デザインが必要だと言われます。その学習環境デザインの4つの構成要素は次のようになります。

- 1) 空間・場
- 2) ツール（道具）
- 3) 活動（プログラム）
- 4) 共同体

これら4つが必要です。だからこそ、ワークショップという場のデザイン、ファシリテーションという引き出す技術、インタープリテーションという「人と人／人とテーマを繋ぐ」技術が重要になってきます。そして、これらがそろって、未来を見つめる対話が可能になっていくと思います。

●未来を見つめる対話を促すための独創的なスタイルとして：アートの活用（スライド11）

最近ESDのプログラムのなかでアートがよく活用されることがあります。コンテンポラリーアートやモダンアート、メディアアートと呼ばれているアートですが、そういった独創的なスタイルのアートが、未来を見つめる対話を引き出すことを目的として多く使われています。

私はこれらのアートを、アプリケーションとしてのアートと呼んでいます。なぜかという、これらがアートの作品というよりも、作品を作るプロセスに人々が参加することによって、そこに対話の場を創造するプログラムであったりするからです。近年、市民の参画を組み込む傾向が非常に強くなってきています。アートが重要というよりは、「対話」というものが大変であるから、こうやっていろいろとやらなければならないのではないとも言えるのではないのでしょうか。それではいくつかの事例を見ていきたいと思います。

●未来を見つめる対話を促すためのアートの活用事例①（スライド12）

“Dialog in the Dark”、「真っ暗な中での対話」という事例があります。視覚障害者の方に7人のグループを先導してもらって真っ暗闇の中を歩き、最後はテーブルに座ってビールを飲みながらお互いの感想を交換し、対話することによって新しい関係が生まれるというワークショップです。

これは、企業や国際会議でもよく使われていると聞きました。国際会議のレセプションのコーナーでは、宗教色が出過ぎて混乱が起きるとも限らないので、それを避けるために、このワークショップが行われることがあるそうです。また、今は合併を解消してしまいましたが、タイムラー・クライスラーが合併したときの最初の役員会議がこの形で行われたそうです。

言語が共有されていても本当の対話は難しい、だからこういったものが必要であるということが言えます。

●未来を見つめる対話を促すためのアートの活用事例②（スライド13）

二つ目は、“The Insect World”という事例です。これは、椿昇さんというアーティストが中心になって、横浜のインターコンチネンタルホテルの前に、50mくらいのバッタのバルーンを上げるという試みでした。この試みには、バッタのバルーンを上げるために、非常に人手が必要で、そのバルーンを上げるという行為を通じて、ひとつのコミュニティを作るというもうひとつの目的がありました。300人くらいのネットワークができたと聞いています。

●未来を見つめる対話を促すためのアートの活用事例③（スライド14）

私が最近一番注目しているアートが、この“WochenKlausur（ヴォッヘンクラウズール）”というオーストリアのアーティスト集団です。このアーティスト集団は、“Sociopolitical Intervention（政治社会的介入）”をコンセプトにしています。1999年にヴェネチアビエンナーレという芸術イベントにおいてデビューしたとき、コソボの難民キャンプを作品にしました。コソボの難民キャンプでこの作品を実際に使うことが作品の完成だとして、人を動かし、お金を集め、企業や行政の協力を取りつけ、作品に関わるということで作品を形にしていきました。また、オーストリアで敵対する政党のトップが秘密に会談できる小屋を作って、それを実際に活用して、政治的解決を図るようなこともしました。彼らの作品の根底には、ある作品を通じて利害を超えた対話を促そうという意思が流れています。

この例から見えることは、対話を促すということが難しいということ、切り口を変えることで対話を促すことができる

ことであるといえます。

●未来を見つめる対話を促すためのアートの活用事例④

(スライド15)

このSpencer Tunickは、全員ボランティアの大人数の人々が集まり、裸になって芸術的な編成を組んで描かれるアートです。裸になると、地位の優劣もなくフラットになり、気持ちも裸になるくらい気持ちよく、新たな対話を生み出せるという試みです。世界各地で行われていましたが、メキシコでは13000人が参加したと言われています。個人々々がひとつの芸術に参加するという想いだけで集い、その結果、利害を超えた新たな関係、対話の創造がなされる例です。

●ただ場を設けても、同じ言語を共有していても未来を見つめる対話は簡単にできない (スライド16)

持続可能な社会を担う人材を育てるためには、どのプロセスにおいても「対話」が非常に重要になってきます。したがって、ESDに「対話」が絶対に必要なものであるならば、持続可能な社会を担う人材を育てるためには、「対話」の場の創造というものは、重要な社会貢献のひとつであると思っています。

CSRにおいて、発展途上国の子どもたちに寄付をしたり、森林保全や貧困撲滅に対する取り組みをしたりするのはもちろん必要でしょう。しかし、今の日本には、利害を超えてフラットに話し合う「対話」、そしてその「対話」の場の創造というものがあまりにも欠けています。企業側も足りませんし、もしかしたら、NGOやNPOも足りないかもしれません。お互いが歩み寄って、形を作っていかなければならないのではないかと考えています。それが社会貢献の一つになるからです。

◎ (事例紹介) 千葉県柏市の「柏の葉キャンパスシティ」

(スライド17,18,19,20,21,22)

さて、残りの時間を使って、千葉県柏市の「柏の葉キャンパスシティ」の街づくりの事例をご紹介しますと思います。

街づくりの目標は、「持続可能な街づくり」「住み続けたい街づくり」です。そのような街づくりをするには、そこに住む人々の街づくりへの参画が必要です。住民と一緒に考え、住民が語り合えば、「住み続けたい街づくり」は不可能であり、徹底した「対話」の場の創造の追求が重要になってきます。そのようなことを考え、戦略を立て、計画をし、準備を始めて2年が経ち、今ようやく少しずつ花が開きそうです。

例えば、Google Earthで「柏の葉」を検索してみると、少々古い写真が出てきますが、写真を見て分かる通り、何もないところに鉄道新線が開通し、駅を中心に開発している



ことが分かります。

この街では、「国際キャンパス構想」というものがあり、駅前に東大の理系の大学院生向けのキャンパスや、千葉大の園芸学部のフィールドセンターがあります。とはいっても、まだ学生数は少ないです。

他に「ららぽーと柏の葉」という商業施設、マンション、複合施設などがあり、「持続可能な街づくり」を目指し、「環境ビジョン」も掲げています。

しかし、こういった施設や建物を建てるだけでは「持続可能な街づくり」ができるわけではありません。住民の方々の参加があり、住民のコンセンサスがなければ、「持続可能な街づくり」は絶対に不可能です。

そこで私たちが取った戦略は、既存のステークホルダーであるディベロッパー、自治体関係者、大学関係者、近隣の学生、広告代理店、周辺NPO・NGO、学校関係者、周辺の地域住民等を集め、対話の場を作り、そこに新しい住民が加わるというモデルを作るというものでした。そうすることによって、住民が街づくりに参加するという気持ちが沸くのではないか、最初に必要な対話の場を作れるのではないかと予測を立て、実際に活動を始めました。

現在300戸くらいですが、人口は600~800人くらいです。最終的には10000~15000人くらいまで増えるだろうと思います。まだ人口は少ないですが、5年後、10年後を見て、街づくりのための対話の場が必ず必要だろうと予想し、活動をしています。

街づくりの基本テーマは、住民の人たちの中に「住み続けたい」「街に誇りを持ちたい」という気持ちをどうやって醸成し、「持続可能な街づくり」にいかにか参画してもらうかということです。

そこで始めた取組みが次の4つになります。(スライド24)

- 1) 対話と交流の場づくり
 - 2) 対話と交流の仕掛けづくり
 - 3) 対話と交流の情報環境づくり
 - 4) 対話と交流の仕掛け支援体制づくり
- それぞれの取組みの具体例を紹介します。

1) 対話と交流の場づくり (スライド25,26,27,28,29,30)

最初に「UDCK (アーバンデザインセンター柏の葉)」を紹介します。産官学の連携によって運営される施設として作られました。

施設を作っただけでは対話は進まないで、UDCKのセンター長である東大の北沢猛教授のイニシャルを取った「Kサロン」を作り、街づくりについて語り合う場を作り、対話がどんどん生まれてくるようにいたしました。

このように交流が盛になると、企業も動き出します。そして作った施設が「柏の葉フィーチャービレッジ (KFV)」です。この施設を一言でいうと、建築現場の事務所です。単純に建築現場の事務所を作る予定だったのですが、地域住民に開放することを前提に作られました。その中に住民のネットワークを作るための対話の場として「街のクラブハウス」を設け、街のクラブ活動といえるような試みを始めました。また、近隣にがん研究センターがあるので、がん患者の家族の支援センターも作り、相談に乗ったりケアをしたりすることもやっています。

このような取組みのなかで、「対話によって街づくりをするということは面白いことだ」と住民の方々が気づき始めます。このマンションエリアに数千人の人たちが住むことを考え、街区の間の共用部を公共空間と捉え、空間開発のワークショップなどもやるようになりました。建築設計専門の京都大学の竹山聖先生に来ていただき、この街のステークホルダーである人たちが集まり、街がどのように使われるべきかを話し合い、実際に対話をしながら空間のあり方を考えるということも進めています。このようにいろいろと取り組んでいくと、「対話」というものが生まれていくことが分かります。

2) 対話と交流の仕掛けづくり

(スライド31,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41)

「対話と交流の場づくり」について話しましたが、次に街でどのように仕掛けを作っているのかということをお話します。

「あそびの学校」についてご紹介します。デジタル系の情報教育に取り組んでいる人たちに新しい学びの場を作っています。ここでは、奈良にあるCAMP (Children's Art Museum and Park) という施設で行われている、人形とデジタルカメラを使って4コマ漫画を作るワークショッププログラムを、学生を中心としたボランティアである柏の葉の現地スタッフの手で行っています。

「ピノキオ・プロジェクト」は、子どもたちがピノキオの格好をして職業体験をするプロジェクトです。これはキッズデザイン賞を受賞しています。イタリアからモンテッソーリ教育の関係者を招いて、このプログラムをつくりました。ららぽーと柏の葉に行き、そこで働く女性からお辞儀の仕方

を学んだり、地域通貨を使った商売を通じて職業体験をしたりしております。

「ピクニックEXPO」は、プロジェクトメンバーの「東京ピクニッククラブ」というアート集団が中心になって行いました。ピクニックができるということは、公共空間が豊かだということです。「東京ピクニッククラブ」には建築家の関係者が多く、公共空間を測る指標としてのピクニックに着目したのがスタートでした。豊かな公共空間を作り、そこでピクニックをやろうということで、「ピクニックEXPO」というイベントを立ち上げました。非常に好評を得ています。

「柏の葉体操」は、街にオリジナルの体操があっても良いだろうということで作られ、この11月半ばに発表されます。

「ハチミツクラブ」は、千葉大学のフィールドセンターに養蜂に詳しい先生がいらっやあって、その方の指導のもと立ち上げた養蜂クラブです。実際にハチミツを収穫しています。これを始めた理由が、地域の自然環境への関心を高めることです。「ハニーウォーク」というプログラムで蜜源がどこにあるかを実際に学んだりしています。そして、将来的にオリジナルの商品を開発して、市民運動の蓄えにしていこうと考えています。ところで、これは良いプログラムなのですが、最近トラブルが起きてしまいました。それは、千葉大学で飼っていたミツバチがスズメバチに襲われてしまい、全滅してしまっただけです。「ハチミツクラブ」の養蜂が今元気なので、どうやって守っていくかが最大の関心事だったりします。また、このプログラムを通して、新しく街に入ってくる人たちに、地域の自然環境を理解してもらう活動でもあります。

その他、「柏の葉エコデザインツアー」や「エコ・アクション・ポイント」というような、環境省が推進するモデル事業等も始めました。

また、研究交流の形として「カレッジリンクシニア住宅」という、大学の中に介護付きの高齢者住宅の建設を実験的に設けることを考えています。大学の演習の課題としてあげ、それをベースにして街の形を作っていくようにしています。

3) 対話と交流の情報環境づくり (スライド42,43)

情報環境づくりの取組みとして、「柏の葉シビックネットワーク」というポータルサイトを作っています。私はこの活動が素晴らしいと思っています。というのは、このポータルサイトは現在企業が運営していますが、ある程度軌道に乗ったら、将来的に地域のNPOにその運営を譲る前提で取り組まれているからです。このサイトにバナー広告をつけたら、広告収入も入り活動資金に充てられます。そのようなビジョンをもって活動しています。

4) 対話と交流の仕掛け支援体制づくり (スライド44,45)

支援体制づくりですが、私はこれが一番大事だと思っています。さまざまな活動を支えるために、柏市の「NPO支援センター千葉」というNPO団体と契約を結んで、市民活動支援ディレクターとしてNPO支援センターちばの事務局長・宮奈由貴子さんを招聘しました。今、市や企業が協力して取り組まれている活動のすべては、最終的にはこのNPO支援センター千葉、もしくはそれが作るNPOに移管されるようにしていこうという目標を持って活動しています。地域に住む人々の「対話」を促していこうということで、すべて取り組まれています。

◎ まとめ (スライド46,47)

ESDをベースにしたCSRでどんなことができるだろうと考えて、ここまでお話をしてきました。

一番対話しなくてはならない人たちの対話ができているという現状があります。そのことに対して、企業も自治体もNPOもお互い歩み寄って、未来を考えるための対話を尽くす機会が必要です。お互い利害があって言えないこともあるかもしれませんが、対話の場を作ることが重要です。私は、そこがESD型のCSRの第一歩であると思います。

本日は以上で終わりにします。ありがとうございました。

3. ディスカッションおよびQ&A

司会 それでは、いつものように後半は中野さんをお願いします。



中野 こんばんは。後半は中野が進めさせていただきます。対話の場を持つことが大事だろうということで、いろいろな取り組みを紹介させていただきました。

本日は、グループディスカッションに入る前に、川嶋さんと私の方から気になる点を質問させていただいて、そのあといくつかのグループに分かれて話し合いたと思います。

質問者	質問内容	中西回答
川嶋	「対話」を生むために、「場」「道具」「プログラム」、そして「共同体」が必要だということだが、「共同体」は創るもので、目標や目的ではないか？この4つを一緒に並べていることに対して違和感を覚えるのだが、なぜ「共同体」を入れたのだろうか？	「共同体」には、地域コミュニティもあれば、労働コミュニティ、食農コミュニティ等もある。ここでのコミュニティは、過去の実践や経験に基づくアドバイスや情報を、周りから与えるような、協力的、支援者的役割をする集団を総称して、コミュニティと呼んでいる。「多彩な人たちの参加」とも言える。 「道具」は、講義で使うパソコンやパワーポイント、ワークショップで使うペンや模造紙等の小道具も含める。 「場」というのは、丸く座ったり向かい合ったり、ワークショップで使う場の作り方に近いと言える。
中野	「対話」とはそもそも何なのか？議論と違うのは何となく分かるが、会話やおしゃべりとは何が違うのか？「対話」で一番大切なものとして、何をイメージしているのか？	会話はただの情報のキャッチボール、「対話」は可能性を引き出し引き出されるものというイメージ。
川嶋	街づくりに取り組んでいる事例やESDに関わっている事例として、「柏の葉キャンパスシティ」を取り上げたのはよく分かるが、なぜこの事例をCSRセミナーで取り上げたのか？	このプロジェクトに関わっている企業の人たちが、自分たちの取組みがESD的・CSR的だと意識せずに、通常の業務と思って参加している。CSRという看板がついた時点でCSRというものはおかしくなるのではないかと、本当のCSRは身近なところや相手を思いやる仕事のなかにあるのではないかと考えている。CSR論において、ステークホルダーダイアログで、それぞれのステークホルダーの役割を語るのとは違うのではないかと最近思っている。それよりも実際の対話や交流、相手を思いやる仕事の中に価値が見出せるのではないかとと思う。実際に取り組んでいる企業の人たちが、NPO・NGOの力なくして、プロジェクトを成し遂げることができないと気づいたことは嬉しいことと思っている。
		(中西の回答を受けての川嶋の発言) ESDの推進を目指しているESD-Jは、270ほどのNPOが集まった団体である。そこに参加している団体は、ESDという言葉が出てくる前からいろいろなESDと呼べる実践してきたがゆえに、ESD-J発足初期の頃に、自分たちの取組みがESDであると自覚していないでESDを実践している人が多いという話がよく出た。「あなたたちのやっていることはESDですよ」と言って、初めて気がつくというケースが多かった。 それに対して、CSRに取り組む企業は、「あなたたちのやっていることはCSRですよ」と周りから言われるのではなく、「私たちのやっていることはCSRです」と言っている人が多いのではないか？「今までやっていたことはCSRではないか」という話はあまり言われないことは奇妙である。

	つまり、CSRは海外からやってきた枠組みで動いているという印象を受け、ESDは内の枠組みの取組みの中からやってきたことが、結果的にESDとなっていると言えると思う。
	(川嶋の発言を受けての中西の発言) CSRは非常に重要であり、必ず取り組む必要があるものであり、非常に期待しているものだが、CSRがしっかりと対話を引き出すものになって欲しいと思うと同時に、CSRが対話や可能性を本当に引き出しているのか、自分を含め、よく反省しなくてはならないと思う。

中野 これまでいくつかの形でディスカッションをしてきて、グループサイズが対話の質に大きく影響するということが言えると思います。2人の場合には確実に話ができて、3人の場合には少し多様性が出て、4人くらいだとこたつを囲むような気楽な話し合いができたと思います。本日はミディアムサイズにして、10人くらいのグループに分かれてディスカッションを行ってみたいと思います。

司会 今日は3つのグループに分かれましょう。それでは、皆さん移動をお願いします。

～各グループディスカッション～



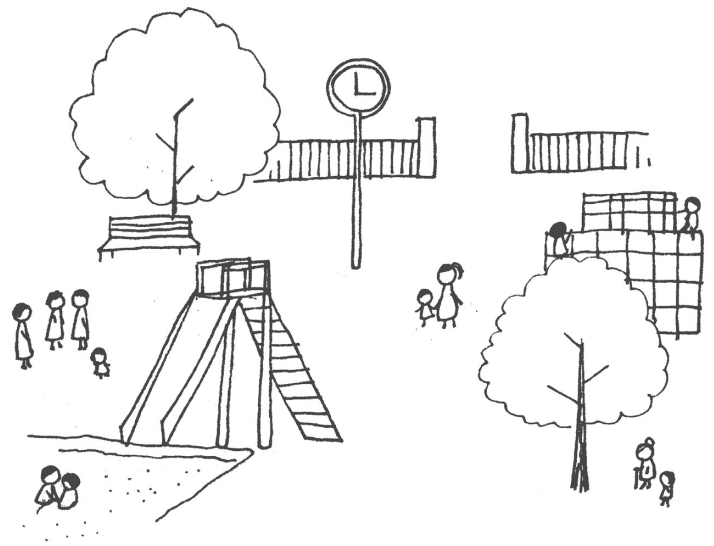
中野 そろそろ時間ですので、ディスカッションを終えたいと思います。

本日は10人前後のグループでディスカッションをしてみました。今回の連続セミナーでは、単なる講義で終わらないように、このようにいろいろなサイズでのディスカッションを交え、全員で議論を深めるように行っています。

来週は、今までのこと、そして今日の中西さんが言われた「対話」の重要性、対話の場を生み出すCSRの在り方なども踏まえながら、やっていきたいと思います。

また、来週に向けて、今日お配りした私の資料「ESDの共通文法－参加型で行こう！」(p71参照)を読んできていただけたらと思います。

司会 それでは、いつものようにリアクションペーパーを提出していただいて、お帰りください。ありがとうございました。



対話からはじめる街づくり

ESDの視点からCSRの在り方を再考する

2008年10月24日

文責: 中西紹一(立教大学ESD研究センター)

1

ESD (Education for Sustainable Development) の
意味を、私なりに捉え直してみる (1)

まずは、Development の含意を捉え直しましょう

- 1 発達、発展、成長、発育、進化
- 2 発達した状態、発展の所産、新しい情勢
- 3 (資源・土地・新薬の)開発

Development はハードの「開発」という意味だけではありません
ESD→「持続しつつながら成長するための人材育成の在り方」

2

ESD (Education for Sustainable Development) の意味を私なりに捉え直してみる (2)

ESDをより簡潔に表現するならば、それは「持続可能な社会に向けた人づくり」「持続可能な社会を創るための人づくり」を指します。



2007年6月17日公開セミナーにおける白石賢司氏(環境省環境教育推進室)報告「EUIにおけるESD最新事情～EUIにおけるUNDESD会議報告～」資料より

ESD (Education for Sustainable Development) の意味を私なりに捉え直してみる (3)

例えばESDを「持続可能な社会に向けた人づくり」と位置づけた場合、その要素は…?

「持続可能な社会」を創造する要素は複層的(直線的ではない)。まさに「Moving Target」

持続不可能な社会の課題を知り…それらを解決するためにできることを考え、実際に行動する。そのような経験を通じて、社会の一員としての認識や行動力を育む。(ESD-J・HPより)

参加体験型の「学び」を重視(ESD-J・HPより)

では、ESDを推進するにあたり
参考にすべき学習理論(といえるもの)は存在しないのか？

PBL

(Problem Based Learning)
(Project Based Learning)

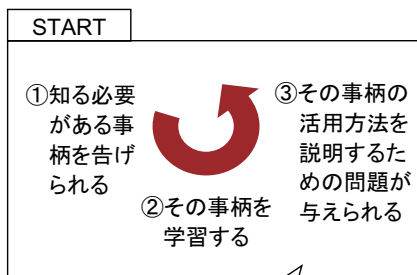
「教えられる学習」ではなく
「自ら解決する学習」

5

PBLは、SBL (Subject Based Learning) の
対極に存在する学習法

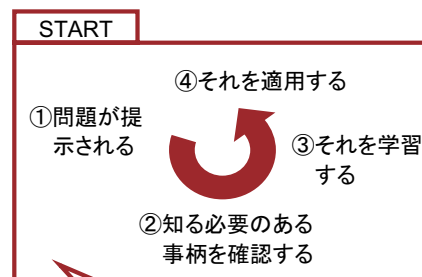
http://www.juce.jp/archives/ronbun_2005/09.pdf#search=PBL%20甲南大学%20井上

SBL (Subject Based Learning)



今日はまず、金属を通る
電流について学習しましょう。
その後で…

PBL (Problem / Project Based Learning)



ここに故障したトースターが
あります。これを直して下さい。
でなければ一歩・ゆずって、
少しでも使えるようにして下さい。

6

PBLの学習ステップには
6つの段階が存在している

- 1 まず問題に出会う
- 2 どうしたら問題が解決できるかを理論的に(実践的・論理的手法によって)考える
- 3 相互に話し合い、何を調べるべきかを明らかにする
- 4 自主的に学習する
- 5 新に獲得した知識を問題に適用する
- 6 学習したことを要約する

7

ESDにも、PBLにも、双方に不可欠な
学びのスタイルに関して

http://www.esd-j.org/j/documents/csr_esd_seki.pdf?ESDJ=1c0n3sb0err4p1srrb665j5nhevktfp9

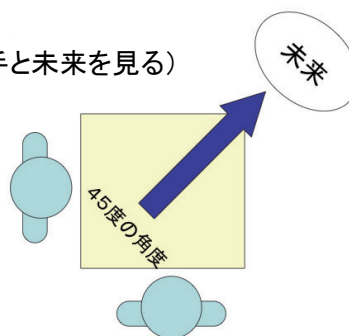
対話

未来に向け、創造力を最大限に発揮しながら語り合う

ディベート



対話(相手と未来を見る)



8

対話と公共性の 不可分な関係について

心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ(みすず書房)
ロバート・N. ベラー／島藺進訳



公共哲学としての社会科学は、たんにその発見物が学者世界の外の集団や団体にも公共的に利用可能あるいは有用であるから「公共的」だということではない。それが公衆を対話へと引き込むことを目指しているから「公共的」なのである。(p364)

9

ただし互いに未来を見つめあうフラットな対話は そう簡単にはできない

学習環境デザイン・4つの構成要素

- ① 空間・場
- ② ツール(道具)
- ③ 活動(プログラム)
- ④ 共同体

- ワークショップという場のデザイン
- ファシリテーションという「引き出す」技術
- インタープリテーションという「人と人／人とテーマを繋ぐ」技術

未来を見つめる対話が可能に

10

未来を見つめる対話を促すための
 独創的なスタイルとして

アートの活用

アプリケーションとしてのアートを
 対話と交流を促す装置として
 戦略的に活用する
 (欧州のクリエイティブシティはその代表例)

近年は特に、作品の重要な制作プロセスに
 市民参画を組み込む傾向が強い

11

未来を見つめる対話を促すための
 アートの活用事例 ①

<http://www.dialoginthedark.com/>

Dialog in the Dark

まっくらな中での対話。

森を感じ、小川のせせらぎに耳を傾け、バ
 ーでドリンクを飲みながら、お互いの感想
を交換することで、これまでとはすこしちが
う、新しい関係が生まれるきっかけになり
 ます。(HPより)



12

The Insect World

椿昇十室井尚

想像の昆虫が、都市の象徴としてのビル
に対峙するという作品。

制作から実施に至るまで、横浜市民を含
むボランティア支援が無ければ完成に至
らなかった作品。



13

Wochenklausur

ヴォツヘンクラウズール

Sociopolitical Intervention (政治社会的介
入)をコンセプトとした作品を生み出すオ
ーストリアのアーティスト集団。

右の作品は、コンボの難民キャンプ。作品
の完成を、実際に使用されるまでのプロセ
スとし、多くのステークホルダーがこれに参
画。

http://www.wochenklausur.at/projekte/menu_en.htm



14

未来を見つめる対話を促すための
アートの活用事例 ④

<http://www.spencertunick.com/>

Spencer Tunick

スペンサー・チュニック

大人数の裸の人々が芸術的な編成で姿勢を整える姿が特徴の写真で有名。

作品の一部となる「裸」を演じる参加者は、全てボランティア。

都市の寛容性や、新しい対話の場を創造する装置としても注目されている。



15

ただ場を設けても、同じ言語を共有していても
未来を見つめる対話は簡単にはできない

対話の創造

(場・道具・プログラム・共同体の巻き込みを含めて)
(持続可能な社会を担う人材を育てるために、不可欠な前提)

持続可能な社会を担う人材を育てる
「対話」の場の創造は
重要な社会貢献の一つ

16

特に「街づくり」には、多様なステークホルダーが
フラットに「対話」を重ねる場が必要となる

本日お話しさせて頂く事例

千葉県柏市「柏の葉キャンパスシティ」

- 全くの更地に、新たな鉄道(TX)が開通するため、街づくりがスタート。
- 街づくりの目標は「持続可能な＝住み続けたい」街づくり。そのためには、街の住民となる人々に、「住み続けたい」街づくりに参画して頂き、街への愛着を醸成しなければ、目標達成は不可能。
- そのため開発主体(三井不動産 & 三井不動産レジデンシャル)は、次世代型の多様なテーマ(装置)を通じて、開発主体は対話の場を創造し、交流を促す活動を推進(中)。

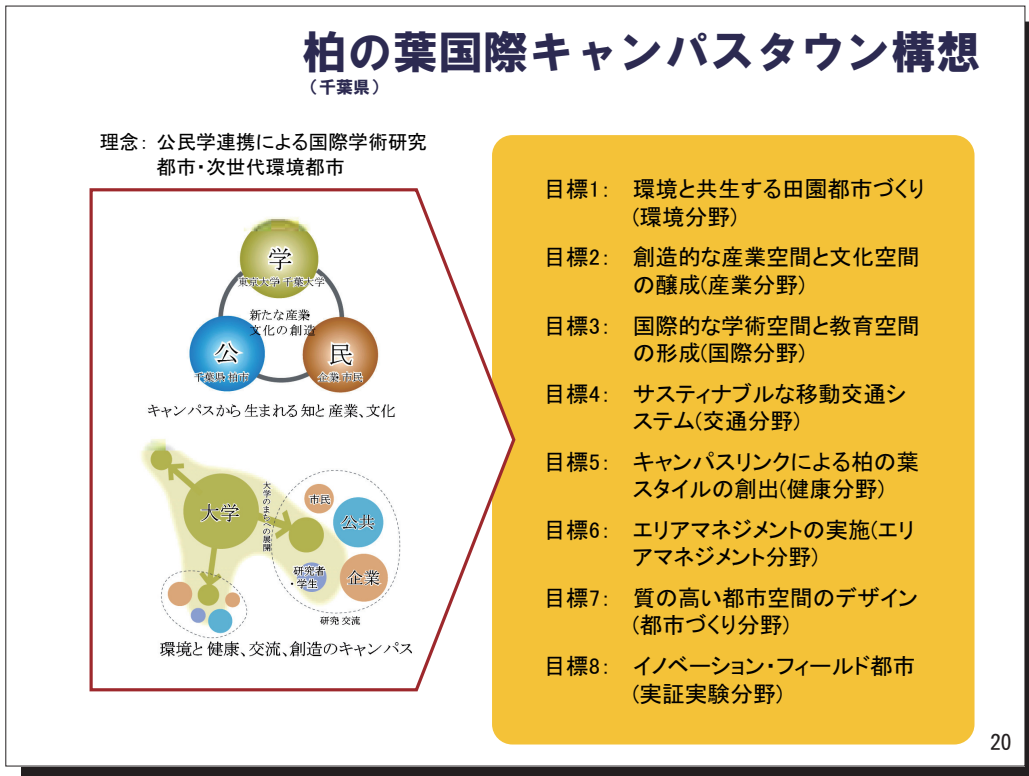
17

持続可能な街を創っていくために
対話を促す活動を企業が担う事例

三井不動産レジデンシャル

■ 柏の葉キャンパスシティ・プロジェクト ■

18



キャンパスタウンのダウンタウンづくり

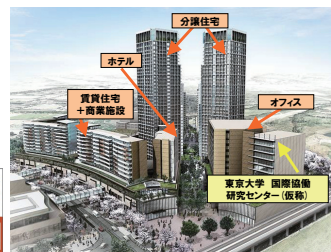
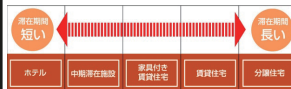
“「知」が集積・融合し、人と地球の「環境」を育む街”の理念のもと、柏の葉キャンパス駅周辺の4街区におけるキャンパスタウンのダウンタウンづくりは、2011年を目指して着々と進められています。

■街区ゾーン平面図



147街区・148街区

- キャンパスシティに求められる多彩な機能を整備
- 2011年に、2800世帯・約1万人が住む
- 様々な来訪者に対応する多彩なアコモデーション



150街区 ららぽーと柏の葉

- 2006年11月に商業施設を先行開業させ、街の賑わいと活気を創出



151街区 パークシティ柏の葉

- 2008年3月から入居を開始
- 新たな住民と街との交流を促進



柏の葉・環境ヴィジョン

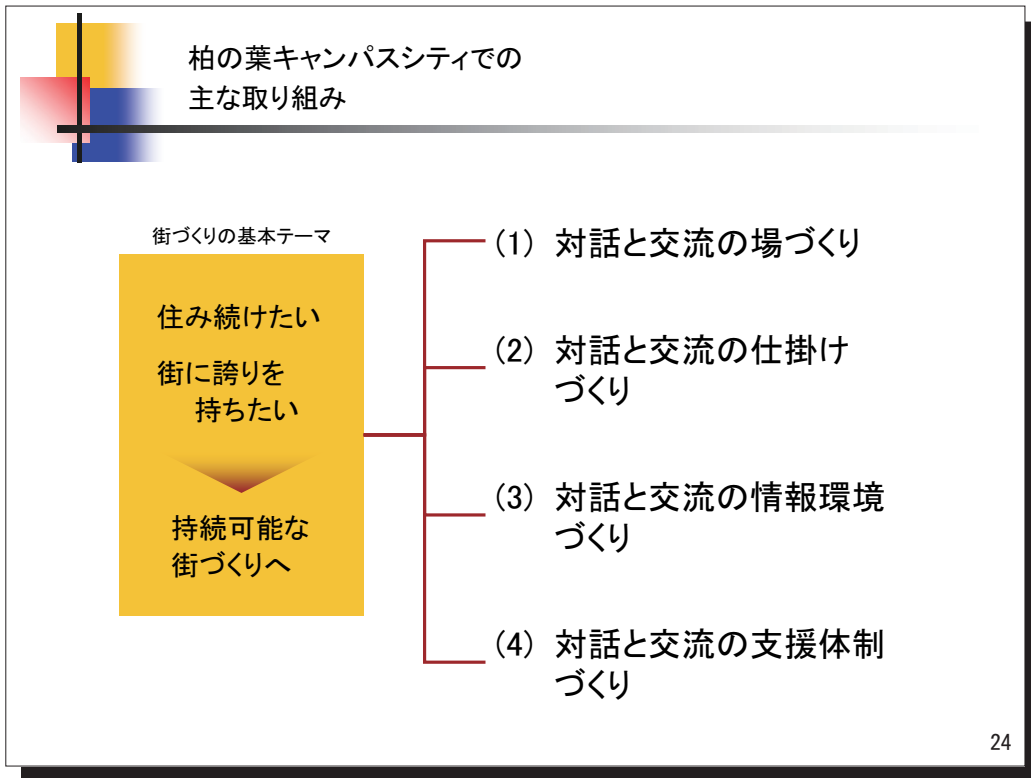


柏の葉キャンパスでは、国際キャンパスタウン構想を元に、既存の豊富な環境資源において、実証フィールドとしての展開を設定します。

これにより柏の葉キャンパスは、世界をリードする次世代型環境都市のモデルとして、2030年までにCO2排出量35%削減を実現します。

※環境省は、「脱炭素化2050プロジェクト」(2004年～)において、2050年までに我が国の主要な温室効果ガスであるCO2の排出量を1990年に比べて70%削減するための「脱炭素社会に向けた12の方策」を提議している。

低炭素都市・柏の葉を実現させる5つの環境対策



(1) 対話と交流の場づくり

25

UDCK (アーバンデザインセンター柏の葉)

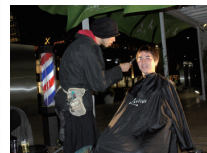
- 東京大学、千葉大学、柏市、三井不動産、柏商工会議所、田中地域ふるさと協議会、首都圏新都市鉄道の7者共同の「構成団体」で運営。
- 運営の基本方針
 - (1) 自治体、企業、大学、市民団体等の連携による人材育成、会議、ワークショップの実施
 - (2) 大学や研究機関の提案に基づく新規事業創出の拠点として活用
 - (3) 大学から市民への知の開示と関係の拠点
 - (4) 柏の葉地区ならびにTX沿線の都市デザイン開発拠点
 - (5) まちづくりの進捗に応じた柔軟な組織運営。



26

K サロン

- 様々な人が集まり、柏の葉のまちづくりについて議論することを目的とした交流会。
- Kサロンの「K」は、UDCKセンター長北沢猛東京大学教授のイニシャル。
- UDCK関係者はもとより、市民、住民、学生、研究者、開発事業者、商工業、自治体職員など、街づくりを担うステークホルダーが参画。



北沢猛東京大学教授

27

柏の葉フューチャービレッジ (KFV)

- 三井不動産(株)柏の葉キャンパスシティプロジェクト推進部の現地オフィスを「地域に開放する」というコンセプトで建設。以下の施設を地域で活用。
 - * まちのクラブハウス
 - * キッチン会議室
 - * ガン患者・家族総合支援センター
- 太陽光発電システムや雨水タンクの採用など、地球環境に配慮した結果、約52%の二酸化炭素(CO2)削減効果を達成。



28



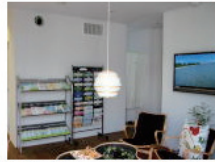
エントランス



キッチン会議室



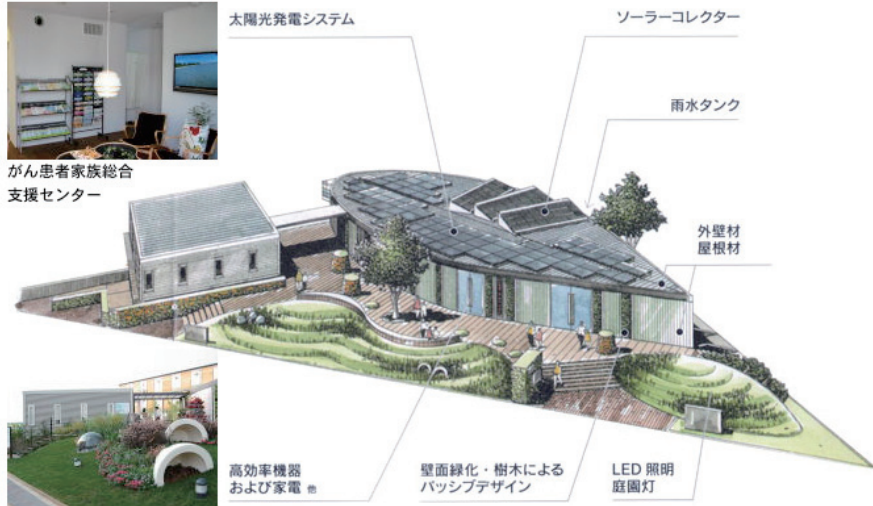
会議室



がん患者家族総合
支援センター



芝うねうね花壇



29

街区共用部・空間開発ワークショップ

- 147/148街区の共用部を、街の公共空間と捉え、その想定利用者・建築家等を一同に会しての「空間開発ワークショップ」を実施。



対象エリア



30

(2) 対話と交流の仕掛けづくり

(教育)あそびの学校

遊びと学びを、アートと技術を通して結びつけ、新しい学びの場を体験できる「あそびの学校」を開催。

街づくりが一定の成果を見せる15～25年後の地域の担い手を育成することが目的。

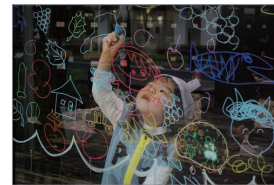
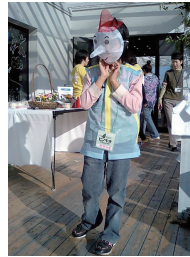


- * CAMPデジカみしばいワークショップ
人形とデジタルカメラを使用し4コマのオリジナル紙芝居をつくるワークショップ



(教育)ピノキオ・プロジェクト

- ピノキオ・プロジェクトは、地域運営を楽しく体験する子ども向け教育プログラム。
- ピノキオ衣装に身を包んだ子どもたちが、仮設の市場(マルシェ)や食堂、情報センターで、地域通貨「Pi」を用いながら職業体験するプログラムを展開。
- 2007年実施時の来場者は延べ5500人。本年度は11/15-16に実施予定。
- 第2回キッズデザイン賞・金賞(共創デザイン賞)受賞。



33

(アート)未来観測

- メディア・アーティスト森脇裕之氏による光のアートワークを街全体に展示し、これからできる街を感じ、新しい街の賑わい・息吹・臨場感を体感してもらう、というコンセプトで実施されたアートイベント。
- 「トレイヨ＝グラフィー」という巨大な電球状ディスプレイを工事予定街区に設置し、ららぽーと柏の葉の屋上庭園から観客の人影を映す、という作品を軸に、街誕生の予感を醸成。



34

(アート)ピクニックEXPO

- アートユニット「東京ピクニッククラブ」による、開発予定地でのピクニック実施イベントを2007年に実施。
- イベントを契機に「柏の葉ピクニッククラブ」が誕生。街のオープンスペースでピクニックを行ない、身近な地域を楽しむ工夫や、街の魅力を再発見することの面白さを伝えている。
 - ナイト・ピクニックを後日実施。
 - 2008年は柏の葉公園で実施



35

(アート)柏の葉体操(仮称)

- 「健康・環境を標榜する街であるならば、オリジナルの体操があっても良い」との発想から、現在「柏の葉体操(仮称)」を開発中。
- 開発に関しては、柏の葉エリアで「十坪ジム」運動を展開予定の東京大学名誉教授・小林寛道先生指導のもと、産官学民の連携で開発を展開。



36

(環境)ハチミツクラブ

- 千葉大学環境健康フィールドセンターの指導のもと、養蜂クラブを街に設立。
- 養蜂へのアプローチ理由は、以下の通り。
 - a) 地域の自然環境への関心を高める(ハニーウォーク)
 - b) オリジナル商品開発(将来は市民活動の原資に)



37

(環境) 柏の葉エコデザインツアー

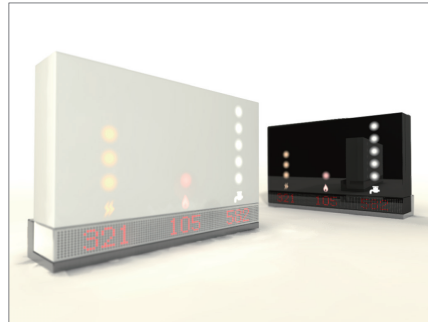
- 柏の葉の住民に対する環境意識啓発のイベントとして展開。
 - a) 柏の葉周辺の既存施設のバックヤード・ツアーを中心に、環境配慮型施設を見学。
 - b) 周辺の自然環境に触れ、豊かな自然を生活に活かすプログラムを紹介(森林セラピー等)



38

(環境)エコ・アクション・ポイント

- CO2排出削減の「見える化」を実現するために、環境省「エコ・アクション・ポイント」の地域モデルに参画。
- 柏の葉地区における、CO2ダイエットの普及推進を図るプロジェクト。



- 家庭に設置するCO2削減ナビを開発
- 電気・ガス・水道の使用量をその場で確認（当初は電気のみで開始）
- WEB環境を活用し、削減量の比較が可能。

39

三井不動産レジデンシャル様より提供

柏の葉・環境ヴィジョン 連携

行動計画

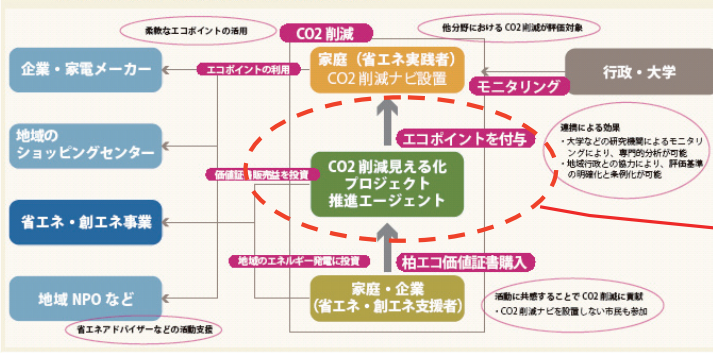


公民学連携コンソーシアムを組成し、行政、大学、企業、市民が参加する多様な環境への取り組みや実証実験を組織的・継続的に行っていくことで、柏の葉におけるCO2ダイエットを普及・発展させる構造を定着して行きます。

【動き出した柏の葉エコプロジェクト】

柏の葉市民のCO2ダイエット活動を価値化し、環境対応の取組みを促進するエコポイント循環と、活動を活性化・持続させる連携体制の構築

市民や企業による低炭素社会構築に貢献する積極的な取り組みをモニタリング・評価・持続する仕組みを、公民学連携により構築する。市民の環境活動は、エコポイントとして価値化され、より意識的な環境活動の実践へとつながる。



柏の葉
エコ・アクション・
ポイント
◆CO2削減ナビを
設置し、家庭でのエ
ネルギー使用量を
測定
↓
削減量に応じてポイ
ントを交付

40

(研究交流)カレッジリンクシニア住宅

- 2007年度秋学期、千葉大学と東京電機大学、両大学院約40名による建築設計演習を、『大学提携型高齢者施設(カレッジリンクシニア住宅)』を課題に実施。
- 2008年からは、千葉大学(環境健康フィールド科学センター)を中心に『キャンパスリンク事業』の検討に入る。



41

(3) 対話と交流の情報環境づくり

42

柏の葉シビックネットワーク

- 柏の葉周辺の情報を集約したウェブサイト「柏の葉シビックネットワーク」を構築。
- このサイトは、三井不動産レジデンシャルが構築し運用していたが、今後は地域NPOへその運用を移管する予定。最終的には地域NPOの独自サイト運営を目指す。

→ 収益源としての活用



43

(4) 対話と交流の支援体制づくり

44

市民活動支援ディレクター

- 様々な街の活動をサポートするために、UDCK(柏の葉アーバンデザインセンター)に「市民活動支援ディレクター」を招聘。
- ディレクターには、柏市のNPO「NPO支援センター千葉」の宮奈由貴子氏が着任。
- 様々な街づくり活動(街のクラブ活動)は、最終的には地域NPOにその運営が移管される予定。



45

まとめ

心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ(みすず書房)より

46

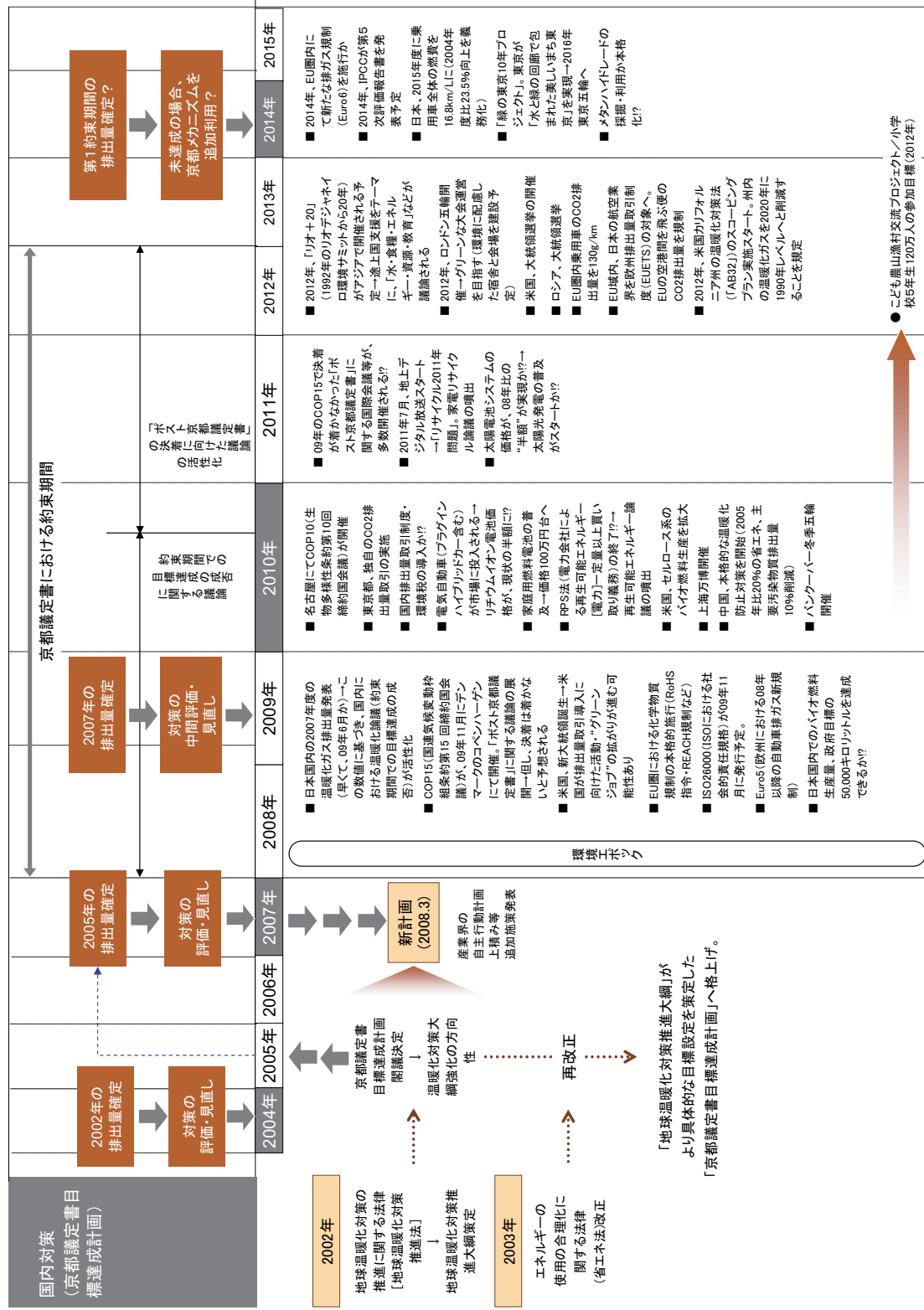
私たちは(調査及び論文制作という)この共同経験を通じて、本書の中心的議論のひとつ、個人と社会とはゼロ・サム状態にはないということを確認することができた。

すなわち、個人の相違に意を払う強力な集団は、集団としての連帯性のみならず個々人の自律性をも強化するであろうということ、人々は集団内にいるときでなく、孤立しているときにもっとも均質化しやすいということ、私たちは確信したのである。

47



地球温暖化対策推進大綱の流れと環境エポック2009-2014



10/31 (金)

連続セミナー『CSR！次のステップへー持続可能な社会の創出のためにー』第5回記録

題目：ESDと参加型の場づくり

日時：2008年10月31日（金）18：30～20：45

場所：太刀川記念館3階多目的ホール

講師：中野民夫

司会：川嶋直

1. 前回からのブリッジ

司会 こんばんは。第5回目を始めます。最後はここ太刀川記念館の大ホール、教室らしからぬ場所での最終回です。器が変わると気持ちも違ってくると思います。10月最初から始めたCSR連続セミナーも本日をもって最後です。

本日は、まず先週のスピーカーの中西さんに先週の補いを10分ほどしていただきます。続いて本日のメインスピーカーの中野さんに1時間ほど話をしていただきます。そして、短い休憩をはさんで、本日はこのような形（ワールドカフェスタイル、各テーブル5～6人のグループ）で皆さんに座っていただいているので、テーブルごとで話し合っていたきたいと思います。最後に、全5回中4回以上出席の方に修了証をお渡しさせていただきます。そして、セミナー終了後にこの場で懇親会を行います。

それでは、最初に中西さんの方からお願いします。

中西 皆さん、こんばんは。前回のリアクションペーパーを拝見させていただいたところ、3分の1が「良かった」、3分の1が「じっくりしない」、3分の1が「どうだろうか?」、というものでした。説明不足のところもかなりあったと思いますので、補足をさせていただきたいと思います。

まず、紹介した事例の取組みについて、企業が儲けのためにやっているのではないか、という意見がありました。このことに関しては、私自身も企業も儲けのためにやっているつもりでも、「これは儲かる」という経済的メリットを説明ができないのが現状です。「対話の場を作ってコミュニケーションをはかれば街ができる」ということは理解することもできません、実際に、今までにそのような試みが少ないために評価が難しく、どれくらいの収益が上がるかを測ることはなかなかできないでいます。したがって、儲けのために取り組んでいるかどうか、この評価については、まだ結論が出ないと思っています。それから、「対話の質」についてあまりお話をしていなかったので、補いが必要と考えておます。ESDにおい

ては、参加・体験を通して、対話し、共有するということが非常に大事です。

東京映画祭で上映された『豚がいた生活』（2008、日本）という映画が、ESDを考える上で良い例だと思いますので紹介します。

『豚がいた生活』は大阪の小学校での出来事を映画化したものです。その小学校の4年生のクラスで、卒業までの3年間、豚を飼い、卒業時に皆でその豚を食べようという目的で子豚を飼いだします。しかし、次第に豚がペットになっていき、かわいくなってしまいます。卒業のときを迎え、その豚を殺して食べるか、そのまま飼うかを徹底的に議論し、最後はクラスの意見が二つに割れます。そこで、結論は先生に一任されます。先生は、「これもひとつの教育だ」として豚を食肉市場に連れて行くことを決断します。1990年代、とても反響の大きかった実話を基にする映画でした。

この映画と同じように、ESDには、またCSRにも、正解と言えるところがありません。唯一正解があるものとして挙げるならば、それは、環境問題の解決には地球上の60億の人口が20～30億になればいい、極端に言えば人間がいなくなればいい、というようなことかもしれません。しかし、実際にはそうはいきません。

正解はないが結論を出さなければならない議論において、対話を繰り返していかなければ、人間は成長していかないのではないかという実感があります。対話の場を作っていくことが、これからのESDの役割ではないかと思います。

同じ言語を共有していれば理解し合えるという前提は、価値観が多様化してくると見えにくくなってきています。明らかに答えのないことを真剣に議論することが重要だと思います。答えがあれば答えを教えてくれる先生はいりません。皆で考えていく必要があると思います。

司会 それでは、中野さんをお願いします。

2. メインレクチャー（話し手：中野民夫）

こんにちは。あらためまして、中野民夫です。よろしくお願いします。

今日は皆さんにワールド・カフェというスタイルで座ってもらっています。この形は最近広まっているのですが、5～6人のグループが気楽に同じテーブルについて、対話を積み重ねながら、前の人の話を聞くだけでなく、お互いの考えを交流させていき、学びを深めていこうというものです。

後半に皆さんにディスカッションをしていただきますが、まず「この前、名前を聞いたけど忘れちゃったなあ…聞き直しにくいなあ…」という方もいるかもしれませんので、3分ほどの時間で、「どこの誰?」「どんな感じ?（“How do you feel?”）」とお互い聞いて、今どのような心や体の状態かを確認する“チェックイン”を行っていただきます。どんな人たちが、どんな想いで、この場に集まっているのかを確認してから、後を続けたいと思います。グループごとで、ひとり20～30秒で一言ずつ話していただき、3分ほどチェックインを行ってみてください。

～チェックイン～

はい、そろそろよろしいでしょうか。せっかく5回連続でセミナーを積み重ねてきたので、ある意味でのネットワークができたらいいなという思いもあります。今日はこのあと懇親会もありますので、是非交流を深めていってください。



●「ESDと参加型の場づくり」

さて、今日は最終回という大事な回を担当させていただいており、「ESDと参加型の場づくり」というタイトルを設けております。もともと皆さんにお配りしていたCSR連続セミナーのチラシには、サブタイトルとして「サステナビリティと般若心経」と書いてありましたが、今回は省かせていただきました。当初この10月に『般若心経が描くサステナビリティ』

という野心的な本を出版するつもりでいたのですが、書きかけで執筆作業が止まっており、まだ皆さんにお話ができる段階ではないので、今回はご容赦いただければと思います。

●自己紹介

まずは、自己紹介をさせていただきます。

平日は広告会社の博報堂で勤務しており、広報や社会貢献や社会テーマに関わるコーポレートコミュニケーション局という部署に所属しています。2年9ヶ月ほど休職していた時代があり、その時期にカリフォルニアでいろいろなことを学びました。

また、ワークショップ企画プロデューサーという肩書きで、参加型の場づくりを広く手がけています。Be-Nature Schoolというところではファシリテーション講座を開き、ワークショップやファシリテーションに関する本を出しています。

立教大学大学院では、21世紀社会デザイン研究科の「ライフサイクル論」という授業を持っており、今年は屋久島で集中講義をやりました。明治大学では、「環境と社会」「環境コミュニケーション」という授業を受け持っています。聖心女子大学では「ワークショップ論」という授業を持っています。

他に、いくつかのNPOの理事などもやっています。

また、25年間くらい屋久島に通いながら構想を練り続け、「屋久島本然庵」という拠点を作っています。“本来の自然に戻るための庵”という意味です。“Toward Our True Nature”、本来の我々の自然、本当の私たちの顔というものに向かって取り組んでいます。

したがって、CSRをメインにしているわけではなく、サステナビリティ全体に関わって取り組んでいるということをご理解いただければと思います。

●「ESDの共通文法—参加型で行こう！」

「ESDの共通文法—参加型で行こう！」（『持続可能な教育と文化～深化する環太平洋のESD』せせらぎ出版、2008）という文章を、事前に読んでいただきました。今日はそこに書いてあることを違ったかたちでお伝えできればと思います。

この文章に書いてあったことは、中西さんも「正解がない」とおっしゃっていましたが、ESDは前例のない色々な分野に関わる新たな試みであり、正解がないからこそ、集いあい、問い合うことが大事だと思います。その参加型の場を作るのは、最近“ファシリテーション”といわれている手法です。

創造的な「対話」を深めるには、人にはそれぞれ各自の意見や想定があり、当然それぞれがそう思うに至った経験がありますので、それらを保留して、出し合うということが必要です。そのためにも、「今ここで自分の中で起こっていること」、つまり、人に言われたときの反応とか、自分のこだわ

りとか、そのようなことに気づく「マインドフル」といわれる“今、ここ”に目覚めるような意識が要ります。

また、ファシリテーションというと、かなり効率ということに目が行ってしまうのですが、効率よりも命の流れとも言えるようなものを育む、中国の老子のTao（道教）で唱えられている、やりすぎず自然の流れや命の流れに沿うという、「無為自然流」のファシリテーションが、持続可能な社会を目指すときには非常に大事なのではないだろうか、それが共通の文化になればいいなということを感じています。

●今回のセミナーの進行上の工夫

今回、講師全員で連続セミナーの打合せをしてきたなかで、話される内容、つまり“コンテンツ”はもちろん大事だけれど、場の進め方、セミナーのプロセスも非常に重要だろうということで、進行上の工夫を、主に川嶋さんと私のほうで提案しました。

第1回目は、講師全員の顔だけでなく、人となりもわかるような問いを川嶋さんから出していただいて、それぞれがキーワードで答えていくフリップボードセッションを行い、どういう人たちが担当しているのか、ということがおおよそ分かるようにしました。

第2～4回目は、講師の話はきっちり60分間していただきましたが、そこに参加型の工夫を重ねようということで、いくつかの試みを取り入れました。講義のあとに、2～4人という少人数で感想などを話し合っていていただいて、まさにここで対話をしていただきましたし、「なるほど」と思ったところや「よく分からなかった」というところをまずひとりで紙に書き出し、それをグループの中で出し、全体で話し合っていていただき、講師と双方向で語り合う場を作りました。前回は、10人位の中規模のグループを作って、全体の輪でも話し合っていていただき、いろいろとグループサイズを変えて、双方向の場を作ってきました。また、アンケート用紙に記入してもらい、聞いたままにするのではなく、次の週にしっかりと答えていくという工夫もしました。

まだまだ聞くだけの講義や講演の場が多いと思いますが、このようなことをやってきて、聞くだけの場と何か違いはありましたでしょうか？

皆さんが、今までのただ聞くだけの場とどれくらいの違いがあったと感じたかをお聞きしたいと思います。「違いがすごかった」を「100」として親指を上、「全然なかった」を「0」として親指を下、「どちらともいえない」を「50」として親指を横に、というように親指の傾きを変えて、親指をメーターのようにして、右手を挙げて示してください。はい、どうぞ。

～参加者、一斉に挙手～

はい、ありがとうございます。真下に向けている方がいらっしゃいますので、大変気になるのですが、どんな評価をいただけるかお聞きしてよろしいでしょうか。

(男性参加者) あまり違いはなかったと思います。

(中野) そうですかぁ…

他にどなたかいらっしゃいませんか。この前「やはり参加型は楽しい」とおっしゃってくれた方がいたのですが。(男性参加者) 参加型で良かったと思いますが、私は挙げた親指が少し傾いておりました。実際、参加型とはいうものの、時間的な制約があって、それは仕方のないところですが、十分でないところもあるのかなぁと思うところがありました。

(中野) ありがとうございます。確かに中途半端にやると、せっかくの語らいが生きないのていかなんかぁと…ちょっとこれ以上聞くのは控えようと思いますので次に行きましょう！

【Part.1 CSRと持続可能な開発】

本日の構成は、Part. 1からPart. 3までを用意して、Part. 1と2が中心です。Part. 1は、いろいろ取り組まれたり勉強されたりしている方々には既にご承知のことばかりだと思いますが、CSRと持続可能な開発がどのような関係にあるのかについて、探れればと思います。

●「ソーシャル・ブランディング」の時代？

我々は一部で「ソーシャル・ブランディング」という言葉を使っています。

2003年に日本でCSRブームが起きました。2004年はじめに、社内で「ソーシャル・ブランディングの時代」という社内で啓発する小冊子を作成しました。その中で言っていたことは、環境や社会の問題にいち早く取り組み、そのことをマルチステークホルダーに的確にコミュニケーションすることで、ブランド力を強化でき、尊敬され、かつ儲かる企業になることができるということ、ソーシャル・ブランディングとして推し進められないかということでした。

しかし、最近ではCSRに関する相談の数は、私のところでは減っています。それは悪い意味ではなく、2003年から2005年をピークに、CSRはかなり一般化し、2006年頃からわざわざ広告会社に相談するというようなことは、先進的にCSRに取り組んでいるところではなくなってきています。ただ昨年は、映画『不都合な真実—An Inconvenient Truth—』(2006年、アメリカ)やIPCCの報告などによって地球温暖化問題に注目が集まり、もう一度あらためて環境への関心・問題が再燃しています。

今後、様々な社会テーマ、少子高齢化はもちろん、ワークライフバランス、食の安全性や食育、いろいろなところで顕

在化してきている格差問題、そして2010年に名古屋で開かれる国際会議のテーマである生物多様性の保全などが、非常に大きい話題になってきていると実感しています。

●持続可能性の「三つの公正」(スライド2 : p85参照)

非常に混合的な要素を含んだ持続可能性の説明で、阿部さんがお話しされている「三つの公正」のお話が分かりやすいと思いますので、使わせていただきます。

まず、「世代間の公正」、つまり未来世代、将来の世代にツケを残さないということです。これは未来に対する時間軸で未来の子どもたちのこと、7世代先を考えなさいということを示します。

つぎに、「世代内の公正」です。これは、発展途上国の児童労働の問題、南北問題、国内の格差の問題などを空間軸で捉え、今この地球上に共に生きている社会的弱者にツケを回さないということです。

3つめが「種間の公正」です。人間だけでなく生態系から考えることが大切であり、ヒューマン・スピーシーズという種と生きとし生けるものの種、その間のフェアネスを考え、地球は万物の母であり、生物の多様性を守るということが非常に重要であり、人と自然との関係を考えることが重要であるということがここで述べられています。

●「世代間の公正」：時間軸

「世代間の公正」について補足すると、元々「持続可能な開発」という概念は1987年のブルントラント委員会でも有名になるわけですが、そのときの定義が「未来の世代が自分たち自身のニーズを満たすための能力を減少させないように、現在の世代のニーズを満たすような開発」というもので、未来世代と現代世代の両方のニーズを満たしていくことが必要だということが掲げられました。



●「世代内」の公正：途上国、国内の格差

「世代内の公正」の問題に、南北格差や国内格差の問題があります。

北の国々では飽食している一方、南の国々では飢餓や貧困に苦しんでいます。日本で捨てられている食糧の量が、世界の食糧支援の量を上回るということはいわれていることです。南北格差の問題には、植民地などの歴史的背景もすごく深く関わっていると思います。欧米がこの問題に敏感なのは、過去に歴史的な負い目があるからだと思いますが、グローバル化で豊かになるはずだったのが、今や逆に格差は拡大しており、それがテロや紛争、社会の不安定化の温床となっています。

先進国、発展途上国の国内においても格差は広がっていて、それが社会の停滞や不安定化に繋がっています。

●「種間」の公正：人間と自然との関係

「種間の公正」については、人間が世界の主であるかのように、ここ数十年、数百年振る舞ってきており、他の動物や植物や鉱物などが、すべて人間が利用するために存在している、という考えがどこかに染み付いてしまっています。そして、一方的な開発を進め、私たちを支えている基盤である生態系を危機的状況にしてしまっていて、危機が今我々に返ってきています。万物は相互に依存し関係し合っているので、生物種の絶滅が「それくらい大丈夫だろう」とか、地球船宇宙号はネジが1~2本抜けても大丈夫だろうとか思っていますが、ネジがどんどん抜け落ちていき、ある線を越えると一気にカタストロフィーに陥るのではないかということがいわれています。人間は水も空気も食べ物も衣服もすべて生態系からいただいているわけですが、そのことに対する感謝とか配慮とかが全くないことで危機に陥っています。

●ナチュラル・ステップの4つのシステム条件 (スライド3)

サステナビリティの条件に関してはいろいろあります。スウェーデンで始まった「ナチュラル・ステップの4つの条件」をここで紹介します。

- ① 自然の中で地殻から掘り出した物質の濃度が増え続けない。
(地下資源を地殻から掘り出し続けることは、短期的には可能であっても長期的には持続不可能。)
- ② 自然の中で人間社会の作り出した物質の濃度が増え続けない。
(社会による循環か自然の循環によって新しい資源として再生される速度内で生産・排出する。)
- ③ 自然が物理的な手段で劣化され続けない。
(人為的な原因によって、土壌がアスファルト化、砂漠化、塩化されることや、不適切または過剰な農業・漁業によって生態系が継続的に破壊され続けて

はならない。)

- ④ 人々が自らの基本的ニーズを満たそうとする行動を妨げる状況を作り出してはならない。
(資源は効率的かつ公平に利用し、富める国と貧しい国の不公平な資源配分を避けるべき。)

最初の3項目はサステナビリティの環境的側面、最後の項目はサステナビリティの社会的側面について述べています。簡単に言うと、「掘らない」「捨てない」「壊さない」「公平に」であると思います。

●ハーマン・デーリーの3原則

他に「ハーマン・デーリーの3原則」があります。経済学者のデーリーは、社会における資源利用と廃棄物の排出に関する3つの原則を提唱しました。

- ① 土壌、水、森林、魚など「再生可能な資源」の持続可能な利用速度は、再生速度を超えるものであってはならない。
(たとえば魚の場合、残りの魚が繁殖することで補充できる程度の速度で捕獲すれば持続可能である。)
- ② 化石燃料、良質鉱石、化石水など「再生不可能な資源」の持続可能な利用速度は、再生可能な資源を持続可能なペースで利用することで代用できる程度を超えてはならない。
(石油を例にとると、埋蔵量を使い果たした後も同等量の再生可能エネルギーが入手できるよう、石油使用による利益の一部を自動的に太陽熱収集器や植物に投資するのが、持続可能な利用の仕方ということになる。)
- ③ 「汚染物質」の持続可能な排出速度は、環境がそうした物質を循環し、吸収し、無害化できる速度を超えるものであってはならない。
(たとえば、下水を川や湖に流す場合には、水生生態系が栄養分を吸収できるペースでなければ持続可能とはいえない。)

●これからの企業活動は…

つまりこれからの企業活動は、私たちだけでなく、未来の世代のこと、途上国や社会的弱者のこと、生きとし生けるものこと、それらのことを考え責任を持つことが不可欠になっていて、このことが標準装備になってきているということが言えると思います。

●最近の風潮への懸念

「持続可能性」って「自社の存続可能性」のこと？

しかし、最近の風潮への懸念があります。いろいろな企業が「持続可能性」という言葉をよく使うようになりました。そのことは大変結構なことではありますが、ある文脈によっては、自分の会社さえ生き残って行ければいい、というような「自社の存続可能性」のこととも受け取れるような使われ方が多いのも事実です。企業が存続していく、企業が持続可能であるということは、それを取り巻く業界、社会、そして自然界の持続可能性がないとあり得ないのですが、常に競争や競合でしのぎを削り、勝ち負けの中でやってきているので、皆と一緒に協力して問題を越えるということよりも、自分のところの存続という次元を、なかなか乗り越えられないでいます。

岡本さんのお話にありましたが、個人・部門・企業はそれを取り巻く社会の中であって、社会を支える生態系があるのが世界のかたちです。生態系が健全でなければ、その中に内包される社会・企業・個人が健全であるわけではありません。レスター・ブラウン氏も、「環境は経済の一部ではなく、経済が環境の一部なのだ」と言っています。岡本さんは「CSRの本質は、地球環境の保全、すなわち生物多様性の保護や生態系の維持」であるとおっしゃっています。

●「持続可能な開発」＝「環境」と「経済」の両立？

「持続可能な開発」は「環境」と「経済」の両立といわれますが、そもそもそんなにうまく両立ができるのかという問いはあります。

どうも天秤が「開発」を持続させるという方向に振れ、「持続可能な開発」が「持続可能性」ではなく「開発」の擁護になりかねないという状況が、特に経済界のなかにあります。「持続可能性」は簡単に言えば、「埋め合わせできるもの以上は使わない」ということであると思いますが、実際そうはできていません。

オイルは有限である以上ピークが必ず来るのに、対応を先延ばしにし、自然エネルギーへの転換や環境税の導入などの仕組みが遅れている日本の状況があります。欧州では、環境ビジネスとして経済成長とCO2削減をかなり両立させてきていますが、日本と欧州の差は広がっているように思えます。

●“Development”について

ダグラス・ラミス氏の話(スライド4)

先週、中西さんも「ESDは人間開発である」という話のなかで、“Development”について話してくれました。この「開発」という厄介な言葉を聞いて、私自身もあまりイメージがよくなく、ダムであったり、リゾートであったり、どうしても自然を壊してきたものを想像しがちですが、一方で

「人材開発」とか「社会開発」という使い方もされていて、混乱していました。しかし、ダグラス・ラミス氏という方の話を聞いて、かなり納得しました。彼の話は、次のようになります。

- “Develop”の意味は、元々、風呂敷のようなものの中に包まれたものを開いて出すこと。花が咲いたり、子どもが大人になったりするなど可能性の開花。
例：この荷物を“Develop”して（＝開けて）下さい。逆に“Envelop”は＝封筒、包むこと。
- “Development”という言葉は、戦後、トルーマンが“Underdeveloped Countries”と敗戦国などと呼んでから広まった。アメリカ的な資本主義産業社会になることが“Develop”であるという使い方をし、それが前提となってしまった。
- 南の国に、産業革命を起こさせることが、可能性を開くことになるのか？経済発展はとても暴力的な側面があった。
- 全部Developとしてしまうと、暴力的な側面、現実が見えなくなる。
- 貨幣を使っていない人、1日に8時間の労働をしない人、私的財産制度もない社会から、利益を取れない。だから作り変えねば＝植民地主義、帝国主義。
- 今は、グローバリゼーションで、世界の隅々までこういう経済制度で、貧富の差は拡大している。

このように、“Development”という言葉は非常に厄介であるという話を聞きました。南と北の問題を自分たちの問題として考えていこうという「開発教育」の分からなさもずっとひっかかってはいましたが、“Development”にはこういった歴史があったということが分かり、納得しました。

翻訳に関しても、持続可能な「開発」なのか、「発展」なのか、ずいぶんともめて、なかなか決まりませんでした。今では「開発」という言葉に落ち着いています。しかし、そこにはずいぶん厄介な概念を含んでいます。したがって、“Sustainable Development”、「持続可能な開発」というよりは、本来の「持続可能性」を語る場合には、「サステナビリティ（Sustainability）」という言葉を使った方が分かりやすいかなとも思います。

●加藤尚武氏（環境倫理学）の持続可能な開発の矛盾と限界（スライド5）

環境倫理学で著名な加藤尚武氏は、持続可能な開発の矛盾と限界について、次のように述べています（『新・環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー、1991）。

「成長か持続可能性か」という選択の可能性はない。成長を続けていけば、必ず持続不可能という事態に到達する。「成長から持続可能性へ何時自覚的に転換するか」という選択の余地があるだけ。

これは理屈として非常に正しいです。ただ、成長が全て良くないというわけではなく、どの部分が良くどの部分が悪いのかを分けて考えましょうということが大事です。デカップリング論でもよく言われていることです。アンチ成長主義ということではなく、単に経済成長を続けていけば、いずれ地球の有限性のもと、持続不可能性にぶつかり、そこでいかに自覚的に転換するかということなのです。

多くの人は「持続可能な発展を守る」というテーゼを承認したとしても、多少は「持続可能性」に配慮した「発展」を図るべきだと考え、配分比率について賢明な選択をすべきだと考えて、結局は、「持続可能性への配慮」を最小限にしようと努力する。

つまり、「発展」を擁護するようになってしまう、と述べています。

経済的に見てどれほど有利な化石燃料が残存しているにしても、それを使わず封印して、再生可能型エネルギー資源を開発することが、正しい選択。

原理的に化石燃料の限界は来るのだから、いつまでもそれに頼るのではなく、逆に封印した方が早めのシフトが行えると言っています。

●“CSR”の限界

今年2月にCSRの調査でイギリスを訪問しました。岡本さんの話にもありましたが、イギリスでは“CSR”というより“CR”、つまり“Corporate Responsibility”と言っているという話をあちらこちらで聞いてきました。なぜ“CR”と言っているかということ、“Social”という言葉が入ると、本業の後のおまけ的な「社会貢献」という周辺のイメージがついてしまう、また、ヨーロッパで“Social”という言葉が入ると、「環境」という言葉が入りにくいニュアンスがあるということでした。

さらに、「サステナビリティ」を本業に取り入れた「サステナビリティ経営」を重視していて、サステナビリティを本業のご真ん中で取り組まなければ生き残れず、危機はまた大きなビジネスチャンスでもあると前向きに捉えています。

また、CSR方針あるいはCR方針を作っても、全社に浸透させるのは困難だが、あらゆる職種の人たち、あらゆる現場の人たちにとって、「自分たちの仕事はサステナビリティを実現するためにある」ということがミッションになっている

なら、各自の仕事も自ずとサステナビリティを志向し、後から「〇〇すべきです」というような社員教育も不要になるという話がありました。

●問題の根本は何なのか？

大量生産・大量消費ということを世界は数十年続けてきました。社会の中で無限に続くかのように思っていたこのスタイルの奥には、大量採取・大量廃棄がありました。発展途上国では、捨てられたものが、動物に食べられたり、風化したたり、土に返ったりしていたけれど、今ではプラスチックやビニールなどのレジ袋の花が咲くと言われるくらい、あちこちに捨てられています。それだけでなく、核廃棄物の処理が進んでいないのに、どんどん核廃棄物が溜まっていったりもしています。こういったことを海外、主に発展途上国に押し付けてきたのが先進国や日本です。

大量採取・大量廃棄が根ざしているのは地球であって、私たちは自然の恵みや生物多様性や生態系の恩恵のもとに暮らしてきたのですが、資源も自然の再生力も有限であるという限界に、今ぶつかってきています。大量生産・大量消費の時代が、大量採取で地球から資源をいただき、大量破壊を限界のある地球にもたらしている、有限性にぶつかって、社会への責任、地球への責任ということが問われているのだと思います。

●循環型社会や持続可能な社会に向けて 必要な三つの取り組み

よく言われることですが、循環型社会や持続可能な社会を実現するために必要な三つの取り組みは、「法や規制、社会システム」という大きな枠組み、環境技術や省エネ技術などの「技術」、「人の意識や心や行動」などで、互いに補完し促進しあうことが必要です。日本の取組みが決して悪いわけではありませんが、日本で一番遅れているのは、法や社会システム、岡本さんが言われるところのTier-4という部分です。トップでしっかりと締めていないから、なかなか締まらないというところがあります。

【part.2 「対話」(ダイアログ)の重要性】

Part. 2は、「対話」、「ダイアログ」の重要性の話です。事前に読んでいただいた「ESDの共通意識」のなかに、物理学者のデヴィッド・ボーム氏を紹介し、「対話」について触れました。なぜ、CSRの文脈にこの話をしたいかを説明します。

●どうやって「実践」に持ち込むか

CSRは実践であるという話は、第1回目から出ていました。私自身、大きな組織の中で環境問題に関心があると言えるよ

うになったのは、ここ10年くらいです。それまでは、「そんなことをしたらモノが売れなくなる」とか、「お前、反対運動の奴らか!」のようなことを言われた時代が長かったりもしました。

組織の中で、一部の人が先進的な志を持って、なかなかかたちにはなりません。社内でどう仲間を募り、話を固め、トップに提案し、説得し、企業として実現させていけるのか、これは本当に大変なことです。

また、世界や社会テーマに意識があって、「これからはCSRだ」とトップに提案し、CSR部門を作っても、全社員にCSR意識はなかなか浸透しないという話が、また一方であります。外向けのアピールにはなっても、組織の体質はなかなか変わりません。

結局、実際に社会でCSRを実践につなげていくには、現場でのコミュニケーションのプロセス、現場での対話や参加型の場づくりこそが、肝心なのではないかと思います。

●事例：愛・地球博 EXPO2005 Aichi 地球市民村

ひとつ具体的な話として、私が関わった「愛・地球博2005年」での「地球市民村」の事例を紹介します。これは、粘り強いコミュニケーションを通じた「持続可能な社会」への事例としてお話しします。

「愛・地球博」は、里山を壊すという元々の事業計画が市民の反対運動でひっくり返り、元々あった運動公園を中心に繰り広げられました。「地球市民村」の場所は、元パターゴルフ場だったところで、渦巻き上の広場を中心にパビリオンを配置し、周りは茶畑に囲まれていました。

万博史上初めて、NPO・NGOが参加したパビリオンでした。竹で編んだ卵のような形をしたNPOのパビリオンが広場を囲み、周りの茶畑で実際にお茶摘みをして、お茶を出したりしました。野菜やお米を作ったり、オーガニックガーデンという広場を作ったり、いろいろな昆虫も来たりして、半年ではありましたが、村の雰囲気も大変良く、「ほっとするね」ということをよく言われました。

世界100以上のNPOやNGOの人たち、スタッフだけでも1万人が参加しました。210万人もの来場者がここに来て、いろいろ楽しみました。

人や社会や世界について「私にできることはなんだろう」と考え、様々な種が撒かれ、いろいろな炎が人々の心の中に灯った、そんな場ができたという実感が沸きました。

この「愛・地球博」は、大阪以来35年ぶりの登録博でした。しかし、「万博はもう古い」という声もありました。

1994年にパリのBIE(博覧会国際事務局)は、「このままでは何もかもがすたれてしまう。地球的課題解決の方向性を示すような万博にしなければ、ただのお楽しみ、夢や未来を語るだけのもので終わってしまう」という決議をしました。

このことを受けて、「愛・地球博」はテーマを「自然の叡智」としました。実際の計画はかなり開発型であって、その上にこのようなテーマが乗っかっていたので、ねじれ現象が起り、万博反対運動もおこりましたが、会場を変えて開催に至りました。

「自然の叡智を活かし、自然の仕組みを学び、持続可能な社会をいかに創れるのか？」を考えたときに、国や企業だけでなく第三のエンジンとして市民やNPOの参加が不可欠であるとして、万博史上初めて、市民やNPOが主役の場所がいくつかできました。そのうちのひとつが「地球市民村」でした。

2002年1月に、国や県や企業などが集まってできた博覧会協会でオリエンテーションをやり、国際的なNPOとNGOの参加の場を作ろうと目指しました。6社競合の企画合戦で私たちが獲得して、公募によって、参加型の場つくりのきっかけを作ろうと「地球市民村」を企画しました。

以後、2002年に計画づくり、2003年に事務局を設置し、参加団体の公募および選考をし、2004年には参加していただいた30団体とワークショップを重ねました。いろいろな企業の協賛もいただいて実現しました。

地球市民村の課題は、様々な社会的課題に取り組んでいるNPO・NGOと、NPO・NGOという言葉もあまり知らない、必ずしも社会問題と接点があるわけではない来場者との間にあった大きなギャップを埋めることでした。

「愛・地球博」の“自然の叡智を活かし、持続可能な社会をどう創るか？”という大きなテーマを掲げて地球市民村が何をやるかというとき、村のコンセプトを持続可能性への学びとして、持続可能な社会を創るために、言葉や理屈ではなく、実際に参加して楽しみながら学べる参加体験学習プログラムを持ち寄ってくださいと公募をかけました。

そして、1年をかけて全9回の魅力的な出展プログラム作成のための市民村づくりワークショップを重ねました。その間かなりの“すったもんだ”がありましたが、現場に入るころには困難を共有するチームとしてできていたので、本番の激動にも耐えられたと思っております。

ワークショップのなかで、「参加」「体験」「対話」を大事にしようと、試行錯誤を繰り返しながら、敷居の低い楽しめるプログラムを目指したので、「楽しい」「学べる」「癒される」といった感想がたくさん出てくるものを作ることができました。

「地球市民村」のコンセプトであった「持続可能性への学び」、「Learning for Sustainability」は、地球市民村を企画していた2002年のヨハネスブルグサミットで世界の課題として確認された「持続可能な開発（Sustainable Development）」をふまえて設定しました。

様々なアプローチで取り組んでいる多様なNPOとNGOの

出展は、持続可能性への模索と捉え、環境、国際協力、先住民、伝統文化、平和、地雷、虐待、子育て、アート、障害者など、様々な分野を超えたつながりを、「持続可能性」という言葉を見つけて作ることができました。

そして、国内外で「ユニット」を組み、毎月5つのユニットが交代で村に来て、通期半年で合計30ユニット、構成団体で数えると100以上の団体が参加しました。

茶畑や自然食レストラン、疲れた人に癒し空間として好評だった畳に寝転がって天井の映像を見る寝転び夢シアター、毎月の満月の夜のコンサート、テーマ別のトークやライブなど、色々な空間や多彩な催し物で、魅力を高めました。

最初は来場者が最初の日に3,000人と少なかったのですが、最後の日は3万人の方が来てくれました。各パビリオンは、その来場者が万博全体の入場者の約1割だと成功と言われるのですが、万博全体の約1割の210万人が来場し、「万博全体の成功に非常に貢献し、万博の存在意義・価値を蘇らせてくれた」という評価もいただきました。まじめなテーマで人が来るということを非常に確認した場でもありました。

報道も多くされ、新聞700件以上、テレビ200件以上から取材されました。ノーベル平和賞を受賞した「もったいない」のワンガリ・マータイさんも来てくれ、「地球市民村は、愛・地球博の魂」だということをおっしゃってくれました。

来場者のアンケートで、「ゆっくりできて、ほっとする」、「手作り感があっていい」、「様々な参加・体験ができる」、「生身のコミュニケーション・対話・交流がある」、「一番万博のテーマを表している」、「茶畑、茶のサービスはうれしい」、「いつも何かイベントをやっていて楽しい」、「いろいろ考えさせられ、いいきっかけを頂いた」、「毎月、日々新しくなるのですね」といった声をいただきました。

人気のポイントは何だったか分析してみると、やはり「参加」「体験」「対話」だったと思います。

見るだけ聞くだけでなく、自分でクイズラリーに取り組んだり、絵やメッセージを書いたり、一緒に何かを作ったりして、来場者は「参加」していきました。特に、地雷廃絶の「ちょうちょキャンペーン」は、2人の市民の方の活動から始まり、世界的な流れになったものですが、対人地雷全面禁止条約に加盟していない国に対して、ちょうちょ型のカードにメッセージを書いて、対人地雷全面禁止条約への加盟を訴える、結構ハードルの高い社会派キャンペーンでした。そのことを知った人たちはみんな何かを書きたくなくて、1万通以上メッセージが集まり、驚きました。人には「何とかしたい」という気持ちがある、文脈ができると動くんだなということを実感しました。他にも「あなたにとって豊かさとは」、「飢餓をなくすために」など、真面目なメッセージ募集が1万通以上集まりました。人には本来、「何かに関わりたい」、「自分を表現したい」、「何かの役に立ちたいんだ」という気

持ちがあることを、非常に強く確認いたしました。

「体験」という点では、カンナくずのプールを作って、あまりカンナくずの匂いもかいだことがないような子どもたちが多くいますが、彼らがそこに潜って五感から入れるようにしたり、竹の楽器と一緒に鳴らしてみたり、粘土でイルカを作りながら仕組みを学んだり、いろいろなワークショップを作り、「体験」の場を作りました。「百聞は一見にしかず」と言いますが、「百見は<一体験>にしかず」ということが、年齢を問わず大切だということを再確認いたしました。

それから「対話」です。万博でも、友達同士で行ったり、家族で行ったり、いつもの仲間で話していて、知らない人と話すことは意外に少ないです。せっかくあれだけ多くの人々が来ているのに、新しい出会いがあまりないわけです。ここでは、多くの体験と知識を持つ様々な国のスタッフがじっくり話をしてくれ、人と人との真の交流がありました。地元の人たちはリピーターとなって訪れてくれました。家族で何かを作りながら、親子や隣の人と会話はずみませんでした。万博では最初、大映像やロボット、バーチャルな世界が人気で、そこに人が集まったのですが、人はやはり素朴で生身の双方向のコミュニケーションが嬉しく、だんだんと人がそちらの方に流れてきたということを感じました。

社会的成果として、多くの人に様々な“気づき”を触発しました。210万人もの来場者だけでなく、マスメディアを通じて多くの人に、世界には多くの問題があり、それらに対して様々な取り組みをしている人たちがいることを伝えることができ、「自分にできることがあるかもしれない、自分にできることはなんだろう」と感じてもらえるようなことができたかなと思います。

NPO・NGOの人たちにとって、「自分たちにとってここまでやれるんだ、普通の人たちでも通用した」という大きい自信になりました。また、スタッフやボランティアの心に火がつき、ここでの出会いから新たな動きやいろいろなことが始まりました。今年はこの仲間と一緒に、スペインのサラゴサの博覧会に行ったりもしました。

また、終わりそうだった万博の時代に、もう一度新しい息が吹きかけられたという評価をいただき、万博の再生に貢献しました。

そして、本日の文脈のなかでは一番大きい成果が、「持続可能な社会のための生身のコミュニケーション」を確認したことです。大映像やバーチャル、ロボットもいけれど、「参加」や「体験」や「対話」を重視した、双方向の生身のコミュニケーションこそが人の求めるものだと、実感して再確認しました。ゆっくり丁寧に人と話したり、自然と接したり、遠くの他者を思いやったり、そういうごく当たり前のコミュニケーションこそが持続可能な社会への礎でもあり、途中いろいろな問題があったけれど、多くの困難を乗り越えら

れたのは、生身のコミュニケーションの積み重ねがあったからだと思います。

●エピソード「カブトムシ事件」

こういう「地球市民村」だったのですが、ここで「カブトムシ事件」というエピソードをお話したいと思います。

2005年3月25日に地球市民村はオープンしたのですが、場所が悪く知られてなかったので、なかなか人が来ませんでした。あまりに人が少なく、NGOが「このままだと帰るぞ！協会が本気で広報をしてきたと思えない！」と怒ってしまいました。参加団体が連名で協会に談判状を書くという事態になって大変でした。

そんな中で、協会から九州の経産特区の「カブトムシおじさん」の話を紹介されました。

このカブトムシおじさんは、野積みした堆肥の中でカブトムシの幼虫を育て、子ども達にカブトムシを配り続けていました。そんな中、「堆肥を野積みにすると、地下水に影響がある」として、野積みを禁止する法律ができました。そうすると堆肥の中でカブトムシの幼虫が育てられなくなります。そこで、このおじさんは大変愛されていましたので、何とかしてほしいという陳情が相次ぎ、彼の堆肥の野積みだけは特区として認められました。

こういったことでこのおじさんは有名だったのですが、「カブトムシおじさんが2,000匹くらいなら提供できると言っているがどうか」と協会から話を受けました。私の中にはささやかな疑問もあったのですが、昆虫は子どもの集客に絶大な力があり、この窮状を救うには仕方がないと受け入れようと思いました。九州のカブトムシおじさんに連絡を取ったところ、「すぐ説明に行きたい、私もそういう大きい場に関わりたい」ということで、すぐに来てくださいました。味付け海苔の容器に彼が作った堆肥を入れ、そこにカブトムシの幼虫を入れると自分で堆肥の中に潜っていき、数ヶ月後に成虫になって出てきて、それを子ども達が本当に楽しみにしていると、説明してくださいました。

私は「これはいい！しっかりした人だ」と思ったのですが、それまで数々の苦難を乗り越え、仲間になっていた環境団体の間で、「やはりカブトムシを配るとはいかがなものか？」とメールが回り始め、「何を考えているんだ、事務局は！」という話になってしまいました。協会の方も「別に皆さんが嫌なら無理強いはいしない。人が来なくて困っているというから紹介したんだ」という感じになり、間に入っていた私は困りました。

私はカブトムシおじさんに始めて会ったときに、「やりましょう！」と言っていたにもかかわらず、「すみませんが、いろいろな事情がありできなくなりました。これからそちらに行ってお詫びしたい」と連絡を入れ、直接行って謝ろうと

思っていました。するとカブトムシおじさんが、「反対している人たちに、是非私を会わせてほしい。これからいろいろな土地でやっていくために、なぜ反対されたのか、この機会によく理解しておきたい」と言われました。ものすごく前向きの人でした。

そこで皆に相談したところ、全員がそのことを忘れたいくらいにもものすごく忙しかったのですが、メールで結構話題になっていたので、気にしている人は東京からも駆け付けたりして、関係者が一堂に会して話し合う場を設けました。

その場でそれぞれがそれぞれの想いを話しましたが、このカブトムシおじさんが、なぜこういうことを始めやってきたのかということをお話しました。そのストーリーが、「本当に子どもの喜ぶ顔にほだされて、ここまでやってきました」というもので、切々と語られ、何も言えなくなりました。

では、なぜ環境団体が問題にしていたかということ、理由は2つありました。一つめは、カブトムシを配ることは、命をモノみたいに扱っているのではないかということ、二つめは、たとえ同じカブトムシであっても、九州のものを他の地域で放ったりすると、生態系の攪乱が起きるのではないか、というものでした。

このように両者の言い分が出そろいました。そして、何人かの提案で、「カブトムシを一度飼い始めたら、途中で放すことなく、最期を看取るまでしっかり飼いましょう」、「なぜ途中で放してはいけないのか」、「放したらどのように生態系に影響を与えるか」など、このようなことを子どもにも親にも話した上で、「途中で放さない。最期まで飼う」と約束できる人にカブトムシをあげるというプログラムにしようという提案が出てきました。カブトムシの幼虫を渡すまでに45分もかかったのですが、生命のことも生態系の攪乱のことも、親子ともに理解してもらい、責任を持ってカブトムシを飼ってもらおうという、とても良い教育的なプログラムになり、創造的な解決を得ることができました。

このような事件を「カブトムシ事件」として紹介しているのですが、結果として、よく話し合っ、創造的な解決を得ることができました。カブトムシはものすごい集客力で、非常に爆発的な役割があり、少しどこかに告知しただけですぐに人が押し寄せました。カブトムシのすごさを感じさせられました。

このように、何か問題が起きたときの「対話」の重要性を示す、ひとつの良い例となりました。

●「協働」のポイント（スライド7）

4年ほどにわたる「協働」の仕事をやってきて、最後に思った大事なポイントは次になります。

- ① 『共通の大きな目標を掲げ、それを共有する』
「持続可能性への学び」を多くの人に気づいてもらう場を創るために私たちは集ったのですが、問題が起きもめたときに、ひとつ高いところにある、私たちの大きな目標に立ち返るということが大事でした。本番の1年前に、まだ会場に何も無い頃に、100人くらいが集まって、ここで何を現実したいか、みんなで夢を出し合うワークショップをやり、ことあるごとにこのことを引き出し、思い起こしました。そして、終了間際に多くの人が集まって、どれくらい実現したかを話し合ったところ、そのとき掲げた目標の8割くらい実現していて、みんなびっくりしました。
- ② 『資金確保と適切な支払い時期』
お金の問題はあやふやにせず、適切な時期に支払うということが大事です。
- ③ 『柔軟で粘り強いコーディネート』
これは本当にかかせません。
- ④ 『準備プロセスの共有』
本番だけしっかりやるのではなく、準備からしっかりやるのが大事です。手間がかかっても非常に重要なことであり、このことによりチームができていきます。
- ⑤ 『情報の共有』
情報公開が大切なのはもちろんですが、情報を共有しようとインターネットに情報を立ち上げて、情報が多過ぎて見ない情報も多いので、どの情報を見るべきかという情報のプライオリティをつけて、お互いが努力していく必要があります。

「持続可能な社会をつくろう」、「持続可能性への学び」という大きなテーマのもと、国境なき医師団や世界で頑張っているNGOやNPO、本当にいろいろな人たちがやって来たのですが、私が現場で痛感したのは、「問題が出てきたら、きちんと向き合っ、よく話し合う。よく話し合っ、皆で決める。決めたら守る。非常に当たり前だが、その繰り返し、積み重ねこそが、持続可能な社会をつくる」ということでした。このあたりが「対話」の意味、「持続可能な社会をつくる」ということになります。

●まとめ ESDとCSRの推進のために（スライド8）

今いろいろな問題が起きていて、なかなか先が見えない時代であり、これまでの手法が簡単に通用しない時代であるからこそ、企業も「人」が資産になっています。社会で人は疲れていたり不安だったりしていますが、人にいきいきと創造的に働いてもらうために、組織や社会にファシリテーター型

のリーダーがもっと必要なのではないかと思います。

ESDはいろいろな説明がされますが、ある国にとらわれず、地球という大きな生態系に根ざしている一人ひとりの人間に義務と責任があるという自覚を育てる「地球市民教育」ともいえると思います。

そして、ESDの文脈におけるCSRは、企業も地球市民であることを深く理解して、地球という基盤を大切にしていかなないと企業の存続もなく、企業もまた自らが置かれている社会のなかでの市民であるという自覚を持ち、責任を実践していくことだと思っています。

ただし、岡本さんや福田さんの話にも出てきましたが、やはりトップの責任を伴うリーダーシップというものは非常に重要であり、ある意味、草の根的な対等感あふれる中から湧き上がる下からの力との、両方が必要であろうと思います。そして、そういう活動が外からの評価を受け、お互いに相互評価をし、統合していくなかで進展していくのではないのでしょうか。

結局、各個人ができることは、それぞれの持ち場から一人ひとりにできることを積み重ねていくしかないのだと思いますが、こうした活動のひとつひとつの積み重ねが「持続可能な社会」へと、結局はつながっていくと思います。

【part. 3 CSRと持続可能性の根っこミニ体験】

最後、CSRと持続可能性の根っことなるミニ体験を考えたので、5分くらいご一緒していただければと思います。

私たちと世界はいろいろな意味でつながっていますが、今日はそのつなぐもののひとつである「呼吸」にちょっと注目して、ミニ体験をします。やり方は非常にシンプルです。

普段呼吸の回数を測ることはないと思いますが、1分間計るので、自分が1分間に何回呼吸するか数えてみましょう。吸って吐いてを1回とします。それではどうぞ。

～参加者、一斉に呼吸を計測～

それぞれが回数は違うと思いますが、各グループで互い何回だったか報告し合ってください。

～参加者、お互いに報告～

私たちは生まれて「オギャー！」と言ったときから肺呼吸を始め、最後に息を引き取るまで、本当に命とともに呼吸はありますが、ほとんど無意識に呼吸をしていて、意識することはあまりありません。しかし、少し自覚してみると1分間に何回くらい自分が呼吸しているか分かります。

では、もう少し「呼吸」に注目するために、次はどれくらい息を止められるかやってみましょう。無理しないでくださ

いね。それでは、3、2、1、はい。

～参加者、一斉に呼吸を止める～



15秒…30秒…45秒…1分です。この辺にしておきましょう。1分でも息を止めるのは大変ですよ。不思議なことに、水の中の方が長くできたりします。スキューバダイビングをする人の中には、世界記録7分というような記録もあります。しかし、通常ただかか数分くらいしか我慢できません。

何を言いたいかというと、「呼吸」というものがこれだけ私たちにとって不可欠のものであり、ちょっとでも途絶えたら大変なものです。

そして、私たちはこの「呼吸」で何を吸っているのでしょうか。いろいろなものを吸っていますが、そのなかで私たちに必要なのは酸素であり、葉緑素をもつ世界中の植物が光合成によってその酸素を作り出してくれています。そのためには外からの太陽の力も得ていて、いろいろなものに支えられ、つながっています。

最後に、目を閉じて、ただ自分の「呼吸」を聞きましょう。いつも意識せずにやってくれている呼吸に意識を傾けて、入息を入息として、出息を出息として、ただ入ってくる息と出て行く息を自覚して、「呼吸」をしてみてください。1分間を計ります。

～参加者、目を閉じて呼吸～

古来、「呼吸」は“意識と無意識をつなぐ架け橋”といわれていて、意識しても放っておいてもできるものです。呼吸を通して、世界とのつながり、生態系とのつながりを感じることができ、生態系を壊すことが自殺行為だということが分かってきます。都会にいと、人間だけで世界が回っているかのように錯覚をしがちですが、「呼吸」を通して世界とのつながり、生態系とのつながり、地球とのつながりを感じることも、都会では必要なのではないかと感じたりします。

それでは、終わりにします。

3. ディスカッション

司会 さて、後半を始めます。実は、私も万博でパビリオンに関わっていました。「森の自然学校」といって、面積が一番大きい、万博で最大のパビリオンでした。来場者の4割くらいが知っていたというパビリオンで、秋篠宮殿下とそのご家族が来られたときに、「私が万博最大のパビリオンをやっています。全部森ですから」と言ったら、殿下は笑っていましたが、周りの人は「何を言っているんですか!？」と固まっていた。

それでは、これから10分くらい時間を取ります。今日の中野さんの話を聞いて考えたこと、感じたこと、気づいたこと、何でもいいですから、いちいち紙に書いたりしないで、ひとつのテーブルに5人くらいずついますので、ひとり2分くらいずつで、自由に発表してください。はい、それではどうぞ!

～各グループディスカッション～



4. 全体の振り返り

司会 それでは、ここで5回全体を振り返るような時間したいと思います。最初に、岡本さんの方から、5回全体を振り返るきっかけになるような、短いミニレクチャーをしていただきます。

岡本 こんにちは、岡本です。

このスライド（スライド2：p89参照）は、最初にお見せしたCSRの見方を示す三角形です。三角形の底辺の方がベースになるというお話をしました。しかし、この三角形を逆にして、逆転して捉えた方がいいという見方もあります。生態系や生物多様性がベースになっていなければ、企業も存在しないし、法律もできないという見方からです。まずは、CSRを俯瞰的にみるということを入れておいていただきたいと思います。

さて、先週のこの時間、私は環境経営学会の理事会に出席しておりました。その席で、「CSRはいろいろな人がいろい

ろなことを言っているね」という話が出ました。今回の5回連続セミナーを通して、皆さんも同様に、人それぞれが違うことを言っている、視点が違うということをお感じになられたと思います。



このスライド（スライド3）は、CSR論者の視点をまとめたものです。グループAは、経済的基盤を重視し、あらゆるものを貨幣価値で判断しています。これが今までの思考であり、経済一神教的というか、経済ばかりを考えた、私から見れば、石頭といえます。しかし現在の主流でありましょう。

一方でグループEは、生態経済学を考え、生態系に則った判断をし、新しい思考で、学際的で柔軟な判断をしていると私は考えています。

ここで注意したいのは、「従来の思考」と思われていたものは、戦後60年の経済発展が急速に進んだ中での思考であって、「新しい思考」と思われている思考は、「古来からの思考」だということです。

10年くらい前にCSRという言葉が出てきて、日本ではこれを「企業の社会的責任」と訳してしまい、企業の目線しかないので、さきほどの中野さんのレクチャーにもあったように、CSRというのは企業だけではなく、あらゆる組織が必要といわれています。

現在は、CSRというより“SR”か“CR”といわれる時代ですが、企業云々ではなく、“Sustainable Development”という方向を向いた、持続性を考えてどうあるべきか、ということを考える時代になっているのだと思います。

CSRには様々な捉え方があります。福田さんのCSRは法律から捉えたCSRで、CSRの最初の部分といえるところであり、このスライド（スライド3）の中では、AやBに近いところだと思います。真ん中のあたりは、皆さんのグループでの話し合いでも話題になった、「まだ企業は宣伝のためにCSRをやっているのではないか、投資の見返りを期待している」とか、そのように言われている部分ではないかと思えます。

DやEあたりのCSRの捉え方は、経済活動に疑問を持つCSRであるとか、生態系に則ったCSRであるとか、哲学や宗教などと結びつくCSRになるのではないかと思えます。決し

て福田さんの法律をベースにしたものと、私という全体を俯瞰した生態系をベースにしたCSRが相反するものではありません。むしろ生態系論者にとっては、肝心の経済や法律の部分がおろそかになりがちですから、そういう根本を守るところで非常に大切なものです。福田さんは11月に発刊する「週刊エコノミスト」(2008年11月18日号)に「CSRを考える(8)法令順守」という論考を寄せているので、それを見ると福田先生のCSRの論理がよく分かります。

それから、第3回目の中西さんのレクチャーの感想を皆さんに聞いてみました。私が思ったのは、我々受ける側の感性も必要だということです。実際、中西さんはいろいろな現場を知っていて、動かしています。「Dialog in the Dark」の話がありましたが、私も元宇宙飛行士の毛利さんに誘われて体験しました。真っ暗闇の中で2時間歩いて、面白くないという人もいますし、肌でひしひしと感じるという人もいました。通常、目で見て、音を聞いて、知覚します。しかし、真っ暗闇では、そういうものを頼るのではなく、肌で感じ、耳で聞き、鼻でにおいをかくということが重要です。そういう肌で感じる感性というものが必要だと思いました。

また、中西さんと中野さんのコアになっているのは「コミュニケーション」でした。これは非常に重要です。私が体験した好例があるのでご紹介します。

私の子ども達がまだ0歳と1歳半くらいのとき、私たちは藤沢のマンションに引っ越してきました。そのとき上の部屋がものすごくうるさかったのです。引っ越してきたので、私の妻が近所にカステラを配っていたのですが、「上の部屋には俺が行く。なんでこんなにうるさいんだ。ちょっと文句を言ってくる」と言って、上の部屋に行きました。そして、上の部屋に着いてチャイムを鳴らしたところ、気さくな感じの奥さんが出てきて、なんと子どもが4人一緒に出てきました。小学校に通っている年頃の子どもが両サイドにいて、乳児を抱いて、もうひとりの小さい子がおしりの後ろについていました。それを見て、すべて悟りました。そして、その奥さんが「いつもうるさくてすみません」と言ったんです。私もとっさに、「いやぁ、こちら子どもが2人いまして…、子どもが動き回るのは当然ですから」と言って家に帰りました。そして、妻が「どうでしたか？」と聞いてきたので、「カステラ2つあげればよかった」と答えました。本当にそう思いました。

それ以来、上の部屋の音が収まったわけではありませんが、全く気にならなくなりました。子どもは8時か9時になったら寝ますし、動くといっても30分から1時間です。しかし、状況が分からなければ、怒ってばかりでした。コミュニケーションを取って、状況が分かれば、「あー、あのかわいい子が遊んでいるんだな」と思えて、全く気にならなくなりました。そのあたりのことがまさにコミュニケーションで、中

西さんや中野さんの言わんとしているところだと思います。

CSRは非常に範囲が広いです。だからこそ、我々が行動しなければならないと思います。中野さんの話の中で私と同じだなと思ったところが、「百聞は一見にしかず、百見は一体験にしかず」というところです。私がIBMに勤めていた頃、同じような言葉を壁にかけていました。それは、「百聞は一見にしかず、百見は一行動にしかず」というものでした。「一行動」だと自分から動かなくてはならず、積極的なニュアンスがあるかと思いますが、発想は同じだと思いました。

2、3日前のNHKの番組で、カンボジアで18,000本の井戸が掘られており、そのこと自体は美談として伝えられているのですが、なんと半分の9,000本から通常の200倍近くのヒ素が出て、死者が出たり、ものすごく苦しんだりしている人が出ていて、これからさらに被害者が増えそうということが放送されました。このあたりの問題は、まさにTier-4のプログラムばかりを推進していて、上のレベルでの水質検査や定期的な検査などを一切していないという問題であり、実際のCSRとしてのボランティア活動などの難しさを表していると思います。

この5回連続セミナーにおいて、それぞれの論者によって話は違うかもしれませんが、CSRは皆さんが考え、行動して、解決していく問題だと思います。

それから、CSRが分かりにくいのは、CSRの範疇が広がっているからだだと思います。「企業の社会的責任」という言葉の枠にとらわれることなく、サステナブルな開発や進歩とはどうあるべきかを考え、中野さんがおっしゃっていた「7世代先まで考える」という200年くらい先まで考えていくように行動していくということが、まさに大事だと思います。

以上でまとめとさせていただきます。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。みなさんの机の上に、A4の紙とマーカーが置いてあります。それぞれ紙を1枚ずつ、マーカーを1本ずつ取ってください。表には、全5回のセミナー全体を振り返って「学んだこと」を書いて下さい。裏には、「これからこんなことをやりたくなった」ということを書いてください。

それでは3分ほどで書いてください。

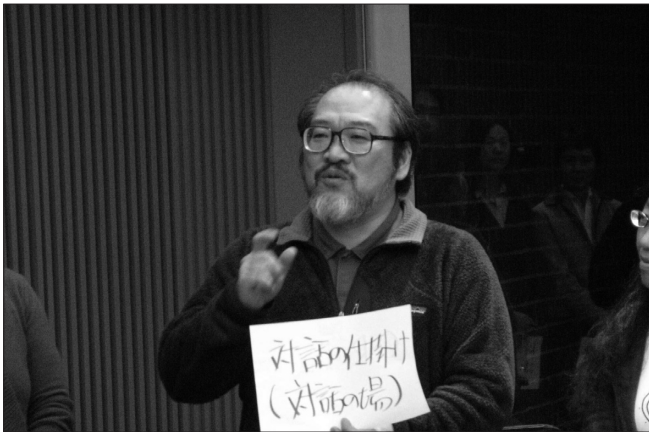
～参加者、記入～

それでは、書けた人から紙だけ持って、部屋の後ろに移動して、ひとつの輪を作ってください。

～全員で輪を作る～



順番に書いたことを声に出して読んでいただきます。40人ほどいますので、ひとり1分でも40分かかってしまうので、とにかく一人ひとりが書いたことを読む、そして、一人ひとりの言ったことを聞く、ということにしましょう。最初に「学んだこと」、次に「これからやりたいこと」を発表してください。



～全員で順番に発表、各人の発表内容は下表のとおり～

	「学んだこと」	「これからやりたいこと」
女性	社会のお役に立って、うーんと利益をあげるのがCSR	相互理解からCSRが充実する
男性	多様	?
男性	企業も地球市民	生物多様性を考えた行動 ～南方熊楠の行き方～ 100年前のエコロジー
女性	CSRは百の顔を持つ	CSRに今マジで取り組んでいる人たちの話を聞く（これも対話?）
女性	“初めの一步”の大切さ	勇気を出して初めの一步を踏み出そう!!
男性	やっぱりみんなバラバラ ⇒不安な未来	ESDリサーチ継続 バラバラな社会を束ねるのはESDかな??? (解決策はESDかな?)

	「学んだこと」	「これからやりたいこと」
女性	CSRを体形的に学ぶことが出来た。 (⇒あくまでもツール。ゴールじゃない)	自信をもって、これから仕事に取り入れたい!!
男性	SD	SDのエッセンスを導入する
女性	自分	積極的に色々な場所に行って、もっと多くの人の意見を聞きたい!
女性	CSR報告書をよく目にしていたので、あたりまえの事と思っていた ⇒まだまだ試行錯誤中であることがわかった	市民としてのCSR 行政や政治家のCSRをもとめていきたい
女性	同じCSRでもいろいろなCSRがあること	ファシリテーター型リーダー
男性	CSRはウスッペラじゃなかった。	“水泳”
女性	「つながる」事の大切さ	「行動」する! (私的には) ESDの授業研究
女性	バイオミクリー	多様なワークショップの方法を学ぶ。
女性	「地球市民」教育	SD
女性	内	考える 行動する 変わる
女性	みんな工夫をしているな	みんなの工夫を多くの人に届ける
女性	みんなの問題	周りの人と話してみよう!
男性	道徳	子どもと遊ぶ!!
男性	会話の重要性	昆虫生活
男性	生物多様性を含むCSR ESDは「地球市民」教育	「ダイアログ」の実践
男性	結論ではなくプロセスの大切さ (対話/コミュニケーション)	恐れずステークホルダーとコミュニケーションをとる (直接の行動)
男性	CSRも人が基盤! 学び続けよう!	次は般若心境「空」を語れるように
男性	場	ゆっくり歩く
男性	対話	実体験
男性	コンプライアンス⇒CSR⇒SDへ	5回で学んだことを部下達と対話し、SDを考えていきたい。
男性	ますますわからない	いろいろ聞いてみる
女性	ESD・CSRは多様、そして変化していく	ファシリテーションを学びたい ESD・CSRを実践していく手段になる?!
女性	しあわせのかたち	いっしょに場づくりできる人をさがす
女性	対話の大切さ	ファシリテーター型リーダーの育成!

男性	CSRは難しい	対話の仕掛け（対話の場）
女性	コミュニケーション・生態系	対話を促すイベント
男性	語るコト	小さな積み重ね
男性	知識と実践を結ぶ考え方	生き活きた毎日
男性	つながり（どうやって？何が何と？）	観点と価値観の共有の場
男性	ESD・CSR=生き方	コミュニケーションを作る（始める）側
男性	対“和”	多くの情報収集
男性	企業とCSR	対話
男性	参加型で共有！	答がないから何でもチャレンジ
女性	対話の大事さ。対話を促すアートの力	参加型手法の活用



司会 ありがとうございました。それでは、この場で4回以上出席された方に、受講修了証をお渡ししたいと思います。

～受講修了証授与～

2008年度
第XXX号

受講修了証

○○○○殿

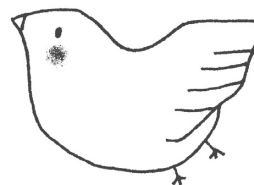
あなたは、2008年度、
『CRS！次のステップへ
～持続可能な社会の創出のために』
の受講を修了したことを証明します。

2008年10月31日
立教大学ESD研究センター長
阿部 治

司会 このあと5分ほどでアンケートの記入をお願いしますが、全体としてはこの場で終わりにいたします。懇談会に参加される方は、そのままお残りください。

皆さん、全5回ありがとうございました。

～アンケート記入後解散～



立教ESD研究センター
CSR！次のステップへ
～持続可能な社会の創出のために～
連続セミナー第5回

ESDと参加型の場づくり

2008年10月31日
中野民夫

1

持続可能性の「三つの公正」

(阿部治先生の話をもとに)

(1)「世代間」の公正:

将来の世代につけを残さない

(孫や未来の子どもたち、7世代先を考える)

未来世代
(時間軸)



(2)「世代内」の公正:

社会的弱者につけを回さない

(途上国の児童労働、南北や国内の格差)



社会的弱者
(空間軸)

(3)「種間」の公正:

人間だけでなく生態系から考える

(地球は万物の母、生物の多様性を守る)

自然
(人と自然の
関係軸)

2

■ナチュラル・ステップの4つのシステム条件

スウェーデンの医学者、カール・ヘンリック・ロベールが科学の視点から持続可能性の原則を！
自然環境と人間社会が全体としての「持続可能なシステム」を成すための4つの条件。

①自然の中で地殻から掘り出した物質の濃度が増え続けられない

(地下資源を地殻から掘り出し続けることは、短期的には可能であっても長期的には持続不可能)

②自然の中で人間社会の作り出した物質の濃度が増え続けられない

(社会による循環か自然の循環によって新しい資源として再生される速度内で生産・排出する)

③自然が物理的な手段で劣化され続けられない

(人為的な原因によって、土壌がアスファルト化、砂漠化、塩化されることや、不適切または過剰な農業・漁業によって生態系が継続的に破壊され続けてはならない)

④人々が自からの基本的ニーズを満たそうとする行動を妨げる状況を作り出してはならない

(資源は効率的かつ公平に利用し、富める国と貧しい国の不公平な資源配分を避けるべき)

最初の3項目はサステナビリティの環境的側面を、最後の項目はサステナビリティの社会的側面

→簡単に言うと、「掘らない」「捨てない」「壊さない」「公平に」

3

“development”について

ダグラス・ラミス氏の話(開発教育協会25周年シンポ)から

- “development”は、戦後トルーマンが、“underdeveloped countries”と敗戦国などを呼んでから広まった。アメリカ的な資本主義産業社会を前提。
- “develop”の意味は、元々、風呂敷のようなものの中に包まれたものを、開いて出すこと。花が咲いたり、子どもが大人になるなど可能性の開花。
 - 例:この荷物をdevelopして(=開けて)下さい。“envelop”は=封筒。包むこと。
- 南の国に、産業革命を起こさせることが、可能性を開くことになるのか？経済発展はとも暴力的な側面があった。
- 全部developとしてしまうと、暴力的な側面、現実が見えなくなる。
- 貨幣を使っていない人、一日8時間労働しない人、私的財産制度もない社会から、利益を取れない。だから作り変えねば=植民地主義、帝国主義。
- 今は、グローバルゼーションで、世界の隅々までこういう経済制度で、貧富の差は拡大している。

4

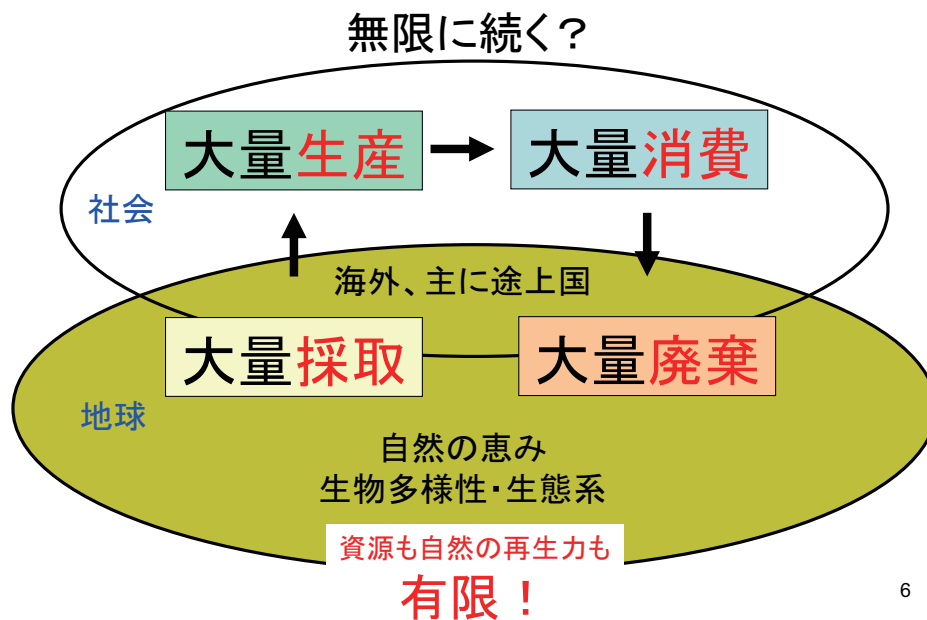
加藤尚武氏(環境倫理学)の 持続可能な開発の矛盾と限界

- 「成長か持続可能性か」という選択の可能性はない。
成長を続けていけば、必ず持続不可能という事態に到達する。「成長から持続可能性へ何時自覚的に転換するか」という選択の余地があるだけ。
- 多くの人は「持続可能的発展を守る」というテーゼを承認したとしても、多少は「持続可能性」に配慮した「発展」を図るべきだと考え、配分比率について賢明な選択をすべきだと考えて、結局は、「持続可能性への配慮」を最小限にしようと努力する。
- 経済的に見てどれほど有利な化石燃料が残存しているにしても、それを使わず封印して、再生可能型エネルギー資源を開発することが、正しい選択。

『新・環境倫理学のすすめ』より

5

問題の根本は何なのか？



6

◎「協働」のポイント

1. 共通の大きな目標を掲げ、それを共有する
2. 資金確保と適切な支払い時期
3. 柔軟で粘り強いコーディネート
4. 準備プロセスの共有
5. 情報の共有

「持続可能な社会」をつくるのに大切なのは、問題が出てきたら、きちんと向き合って、よく話し合う。よく話し合って、皆で決める。決めたら守る。その繰り返し、積み重ね、のことではないのか、と痛感した。

ESDとCSRの推進のために

- 先が見えない時代＝「人」が資産
 - －人を生き活き、創造的に働いてもらうために、組織や社会に、ファシリテーター型リーダーの必要
- ESD＝「地球市民」教育とも言える。
- ESDにおけるCSR＝企業も地球市民であることの理解とその責任の実践
- トップの責任あるリーダーシップと、対等感あふれる中から湧き上がる下からの力、そして外からの(相互)評価、の統合の中で進展

8



立教大学ESD CSRチーム

『CSR！次のステップへ -持続可能な社会の創出のために-』

2008年10月31日

立教大学ESDセンター・CSRチーム センターフェロー
首都大学東京・大学院 ビジネススクール 教授
東北大学・大学院 環境科学研究科 非常勤講師
プレーメン・コンサルティング(株) 代表

岡本 享二(おかもときょうじ)

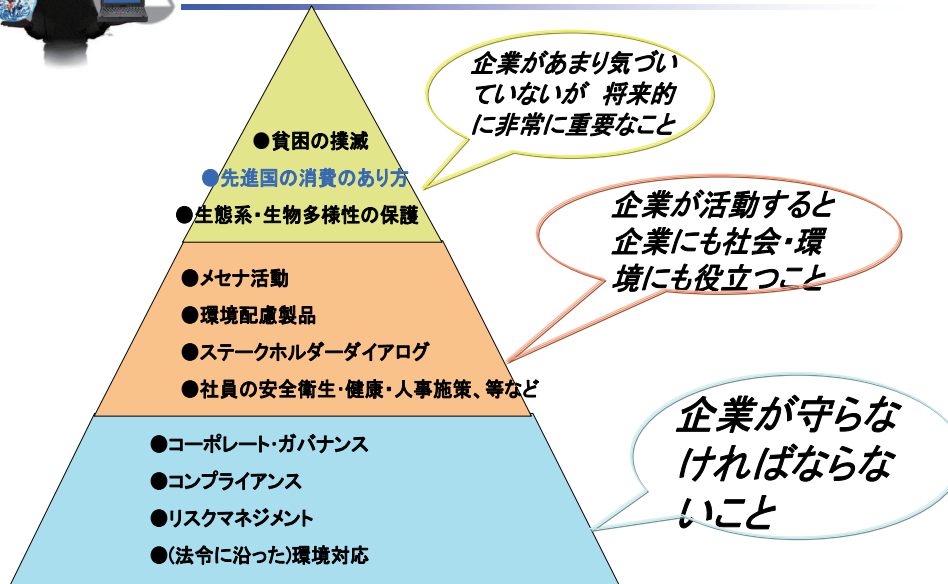
Oct/31/2008

Kyoji.Okamoto

1



CSRを俯瞰する



Oct/30/2008

Kyoji.Okamoto

2



経済寄り、それとも生態系寄り？

・ グループ:

A.....B.....C.....D.....E

- | | |
|----------------|----------------|
| ・ 経済的基盤中心 | 生態経済学を考慮 |
| ・ 貨幣価値で全て判断 | 生態系(自然)に則った判断 |
| ・ 従来の思考(戦後60年) | 新しい思考(古来からの思考) |
| ・ 経済一神教(石頭) | 学際的(柔軟な発想) |

Oct/30/2008

Kyoji.Okamoto

3



さまざまなCSRのとらえ方

- ・ 法律や規制からとらえるCSR
- ・ 社会の要請(他人任せ)としてのCSR
- ・ 経済的メリットとしてのCSR
 - 宣伝・広告
 - コストvs見返り(利益)
- ・ グローバルな視点でのCSR
- ・ 行き過ぎた経済活動に疑問を持つCSR
- ・ 地球規模(生態系)に則ったCSR

Oct/30/2008

Kyoji.Okamoto

4

参加者の声①

成果・発見・理解

CSRについて—これからの時代—

CSRは、会社が持続発展して行くための“第2の定款”である。これが今回の連続セミナーを受講して得た結論です。商法上の第1の定款と同じく必要不可欠の行動規範である。CSRの本質の理解と、ステークホルダーとのコミュニケーションと対話の実践がいかに重要であるかをあらためて考えさせるセミナーであった。

増田忠雄氏

CSRとサステナビリティ

このセミナーの狙いである「企業が、どう持続可能な社会の創出のために役立てるか」を、知りたくて、私は、参加しました。CSRという言葉をよくきいていたのですが、何をすればCSRなのか知りたかったのです。今回受講して、福田先生の論文にあったように、まさに企業理念を実践することがCSRなのだと感じました。社会のお役に立つということを前提に収益を上げるのが企業の目的ですから、企業理念をしっかりと実践すれば、お互いに支えあう住みやすい地球が生まれるのでしょうか。↓

第2回セミナーについて

これまで多く聞いてきたCSR論とは少し毛色の異なる話が聞けて有意義でした。仕事に生かしていきたい。

第3回セミナーについて

福田先生はいつも意識的に過激な表現を使っておられるので、最初はこの人何を考えているのか?喧嘩を売っているのか?と思ったこともありましたが、資料を読み、話を聞くと、一理あるなと思うようになりました。

第4回セミナーについて

真の「対話」の重要性を気付かされました。三井不動産の社員の方々が、CSRを意識しないでCSR/ESDを実践しているという話が印象的でした。✓

精神としてのCSR

例えばですが、ごみを分別せずそのまま捨ててはいけない…と自分を律すること。それがCSRで、宗教や、哲学のようなものというお話にも納得…。CSRは、目の不自由な人が象をなでるようなもので、いろいろな受け止め方があるというのも納得…。大切なことは、企業が、利益を上げることがばかりに走らず、企業自身を律することや、私たちが生き生き生きるために、CSRへの心構えをもち実践することだと学びました。企業人として企業理念の実践は勿論ですが、もったいない精神、ほどほどの大切さも、しっかり伝えていきたいです。100聞は1見にしかず、100見は1体験にしかず!持続可能な社会を子供たちに渡すために、努力がいろいろありますがチャレンジします。5回にわたりCSRについて参加型で学ぶ機会を与えてくださり、本当に有難うございました。CSRの大切さが、わかって嬉しいです。

木邑恭子氏

第5回セミナーについて

企業人でありながらファシリテーションの分野の第1人者でおられることのすばらしさとその中野さんと交流することができたことが貴重な体験になりました。

セミナー全体

個性的な先生方をコーディネートされた川嶋先生に敬意を表するとともに、こういった社会人から学生まで幅広い世代を対象として、参加型のセミナーに参加できたことは、企業人として企業の中に閉じこもることの多かった自分としては、貴重な体験であり、かつ非常に有意義でした。この1か月のセミナーで終わらせないで、是非第2弾、第3弾と続けていただきたいとお願いいたします。

林克彦氏

第2回セミナー

岡本講師の講演と『進化するCSR』(JIPMソリューション 2008)を読ませていただき、日本の大企業が取り組むCSRについて、今後人類が生物の多様性から学ぶ必要性などについて知る事ができ今後の活動に活かして行きたいと思っています。

匿名

参加者同士の交流

セミナーの運営方法として、様々な経歴・立場のセミナー参加者と意見交換する機会が設けられたことも、非常に有意義だった。

清水直樹氏

CSRへの理解

基本的な知識がないままセミナーに参加したため、福田講師の守りのCSR(基本)とそこからいかに発展・展開させるか、その過程での対話の大切さなどの各講師からのお話を理解するには、自身の努力の必要性を感じているがCSRの持つ意味の多様性や変化していくものであることは理解できた。今後、公園や都市の緑や水というフィールドでいかにCSRとりわけ企業の社会貢献を共に進め、持続させていかかを考えていきたい。

参加型セミナー

今回のセミナーで、年齢、立場、CSRへの理解・関わりが異なる人たちと学び、様々な考えのあることを知る機会が得られたことや参加型のセミナーの進め方はとてもおもしろかった。講師および主催者のみなさまありがとうございました。

梅本美奈子氏

セミナーに参加して

以前から疑問に思っていた点がより明確になり、今後どのようなことが必要とされているのかについて、方向性の絞り込みができてきたと感じています。

ESDはCSR実現のキーワード

ESDはこの連続セミナー開催をきっかけに初めて知りました。セミナーに参加する前は、教育とCSRの関係については全く分かりませんでした。セミナー参加を終え、ESDはもしかするとCSRを実現するために大変重要なキーなのではないかと感じています。教育は万人に必要なものであり、それにより社会を発展させることができる大変重要な基礎だと考えますが、その中に持続可能という考えを組み込むことができれば…必要なもの、当たり前なことを、推進という外からの力を使わずして実現できるのではないかと考えます。

CSRについて

これまできちんとCSRについて学んだり、文献を読んだりしたこともなく、「CSR=企業の社会的責任」という言葉の意味と漠然と「よく企業がPRで使っている」という認識しかなかったが、セミナーに参加し、CSRがこんなにも多様で複雑なものであることに驚いた。

「売り」でない「CSR」

今回のセミナーを受けていなければやはり、自分も「CSR」を「売り」にしていくようなシステムを思いついただろう。自分自身が言葉の一人歩きを助長させるようなことがないようCSRについて今後も学んでいきたい。

コース層への教育はもちろん、企業として人材の育成を通して、社会の持続的発展に貢献でき、その結果としてCSRの推進につながるのではないかと考えます。

マインドの重要性

講義の中で、対話の重要性を学びましたが、これに関して、外向きにCSRの実施をアピールするのではなく、内側から推進して行くことが先決であり重要であると捉えました。その内側からの推進を行うために、個々の考えかたをシフトしてゆくために、ESDは重要な位置を占めるのではないかと考えます。CSRは行動というよりは、マインドであると感じました。

吉村ひとみ氏

セミナーに参加して

貴重なお話をありがとうございました。しかも、これだけお話を聞いて無料とはすごいことです。知識が乏しく(緑の人間なので特に経済用語など)、すべてをきちんと理解できたかはあやしいのですがセミナーを受講したことで「CSR」「ESD」の入り口に立てた気がします。

小関由季子氏

多様性-ワークショップの機能-

連続セミナーを受講して一番感じたのは多様性だ。一つはCSRについての考え方の多様性。二つ目に参加者の多様性。多様性のよさは、参加者がそれぞれお互いによくコミュニケーションをとって学ぶことで新しい知識になることだ。悪いところは分野又は考え方が偏る、または受け入れない、結果コミュニケーションができないこと。今回とのセミナーではワークショップが機能することでよい面があらわれていた有意義なセミナーだった。

加藤文人氏

セミナーを受講して

今回の連続セミナーは、大変興味深いものでした。こうした機会を無料で儲けていただき、参加できたことを感謝申し上げます。私は、新谷大輔先生の「CSR基礎論」を立教大学大学院で本年度前期に受講した者ですが、「一言でCSRを説明すると？」と自問していたものの、答えが見つからず、もやもやとした状態でした。そうしたところ、このセミナーを受講して少し霧が晴れたような感じです。

守りのCSR

これまで、「CSRは、壮大な虚構ではないか」と怪しんでいました。受講したことで疑念が晴れた部分もありますが、その意義、企業活動における位置づけについてまだ疑念は残っています。参考になったのはCSRからCRIに変化していることを知ったことです。「ヨーロッパでは、socialには自然が含まれない感じが強いので」という説明に、納得しました。ノ

CSR-ESD

学生の身である自分が本セミナーを受講したきっかけは、企業がそのステークホルダー、社会や世界に対してどのような事が求められているのかを知りたかったからです。受講を通してCSR、ESDについてわかった事は、①CSR、ESDが個人の倫理や価値観と関係している事、②CSRを宣伝にのみしている企業が多いこと、③対話の重要性でした。①について、今の時代の流れが「倫理と社会」で、生態系への配慮まで考える必要があると聞いたときは、びっくりしました。環境経営やペンタゴンネットなど社会からいかにCSRが求められているかがわかりました。②については、企業の行っている活動がその企業の理念と合致しているか、また、それが社会が本当に必要としている事かを判断する必要があると知りました。企業がCSRを宣伝にしているだけに対し、最低限の法律すら守っていない企業がある事も ↓

がある事もはじめて知りました。③については、対話の重要性が企業の内だけでなく、プロジェクトを実行する上やその他のいろいろな空間で意識されている事を知りました。

岡田健氏

一方、そうなることでこれまでより一層漠とした語感になるとも感じました。そのため、「CR」の概念を分かりやすく説明するのはこれまでより難しくなるのではないかと感じます。このこともあって、福田先生の講義にあった「守りのCSR」の意味合いが一層重要になるのではないかと感じています。

ワークショップ

中野先生のワークショップ形式は大変良かったと思います。どういう人が受講しているのかを知ることは、受講者共通の関心事ですから。参加型講義になじむようであれば、「CSRに取り組みないよ」というメッセージを明確に出してもよいのでは?これは来年度も続けるとよいと思います。 植村篤道氏

第4回セミナーに参加して

ESDは持続可能な社会(未来)を創り出す行動的な市民を育てる教育や学習である。アートは人の感性に訴え、感動や共感を伴う深い理解を個人の中に呼び覚ますパワーを持つ。そのため、ESDにおけるアートの活用は、行動につながるような深い理解を個人の中にもたらす方法として有効であると考えていたが、中西紹一先生の講義は、ESDにおける行動(協働)を生み出す上で不可欠なものとしての「対話」、そしてその「対話」を促す上でアートの活用が有効であるという、自分にとっては新しい視点を様々な事例とともに示してくれた。教育におけるアートは、いわゆる主要教科ではないため、ないがしろにされがちな面もあるが、ESDにおけるアートの活用が有効であるという様々な事例の検証は、ESDのグッド・プラクティスを示すとともに、教育的観点からのアートの再評価にもつながる点で興味深い。アート好きな私としては、このような事例には特に注目していきたい。↓

第5回セミナーに参加して

中野民夫先生の講義では、ESDにおいては「対話」と「協働」が不可欠であり、参加型の場を作るのがいかに大切かということを確認した。さらに、ESDは「地球市民」教育であり、そして企業も「地球市民」であることを理解し、その責任を実践するのがCSRであるという説明から、ESDとCSRのつながりを整理して理解することができた(私は4回目と5回目のみに出席したが、このESDとCSRのつながりは、全5回の連続講座のまとめにも当たるのだらうと思いながら聞いた)。また、参加型手法を取り入れた講義スタイルを通じて身をもって学んだことも多く、今後の研究会の運営において色々試してみたい。

上原有紀子氏

参加者の声②

セミナー所感

CSRについて —会社勤務時代の認識からのシフト—

私が会社勤務していた昭和40年代～昭和60年代は、日本の高度成長期の真っただ中でした。原料を輸入し、工場で製品をつくり、消費者へ販売し利益を得る。重厚長大、大量生産、大量販売の時代でした。国内、国外の同業他社との熾烈な競争にいかにして勝ちそして販売計画いかにして達成するかのみを考え、皆が汗水を流してがむしゃらに働いてきた。工場の煙突からはもくもくと煙が立ち込み、騒音も何のその、兎に角、埃まみれも厭わない、そういう時代でした。その後、公害問題や環境問題など時代の流れとともに法律が制定され、違反者への罰則が厳しくなってきた。当時は、法令さえ遵守すれば後は問題ないのだといった考えしか持っていなかったし、また周囲のステークホルダーに対する配慮は、会社の上層部を除き、一般社員の中には意識が薄かったと、今、振り返ってみると反省させられる点が多く心が痛みます。✓

増田忠雄氏

CSRの広義性

CSRとは、企業の社会的責任と訳されるが、セミナーを通してCとは企業に限定するのではなく、法人、自治体、団体など広い意味で組織をあらわしていること、と理解した。また、第1回では、CSRに大学としてどうかかわっていくのかという大学の役割、貢献することの重要性について言及していた。立教大学のESD研究センターはESD/CSRの中核として、日本、アジア、太平洋、欧米のCSR教育の在り方を探るという試みに挑んでいる。

滝山桂子氏

価値観としてのCSR

セミナーで毎回設けられた受講者同士の話し合いでは、「競争理念、利益重視主義に反するのではないか」という話が多くありました。確かに、直接利益に結びつかないCSRやESDは、企業の他の部門の人々にとって、邪魔な存在かもしれません。それに対しては、それは企業が利益を上げていることのみを理念にしている事が原因だと、本セミナーで学びました。地球上の資源には限界があります。また市民の間でも、フリーレードなど、効率や低価格以外のものに付加価値を見出す動きも見られます。こういった流れの中で、CSRやESDに配慮した企業の価値はどんどん大きくなっていくでしょう。その流れに乗るには、小手先だけの単発プロジェクトではなく、まず企業の中に独自の理念や価値観を作ることが必要だと知りました。この独自の価値観を基づいて社会貢献活動をする必要が大事だと思いました。✓

岡田健氏

なぜなら、このような考えは、それ自体が競争に使われてしまう可能性があるからです。現在、CSRがほぼ宣伝になっている事実を覆すには一定の価値観を企業に作り上げる事が一番大事だと思いました。

ESD-CO²削減にむけて—

CO₂削減の努力目標を達成するために、様々な技術開発が行われているが、熱帯では相変わらず森林が伐採されているなど、技術面の努力だけでは実現は困難とされている。また、化石燃料が支える現在の生活スタイルは、人類（一部）に豊かさや人口の増加を可能にしたが、こうした化石燃料も尽きる時は近いとされている。地球の上で人が生き続けていくためには、国、地域のそれぞれのポテンシャルに応じライフスタイルを持続可能型（岡本講師のいわれていた昆虫のような無駄のない生き方など）に変えることが必要となる。ESDは、我々一人ひとりが環境の限界を知り持続可能な生活を送るために必要なことと考える。自身の不勉強もあるが、このセミナーに参加するまでESDの存在を知らなかった。CO₂排出量世界4位の日本においてもっとESDを世にアピールし行動に移していく必要性を強く感じ、自分の立場でできることは何かと考えているのが現状である。

梅本美奈子氏

CSRの現状

企業のCSR担当者のNPOとの協働のスタンスには、少々違和感を持っていました。企業は、プロフェッショナルなNPOとの協働を希望しているというよりも、NPOの活動に対し資金面の行うことで社会貢献活動を行っているというメッセージを発信しているのみに感じられるからです。さらなる問題点は、持続的に諸問題の解決のための支援をするのではなく、年次の予算にあわせる形になっていること。日本では社会貢献への取り組みがまだ黎明期であり、予算確保もまだ充分でない企業が多数を占め、さらに、長引く景気後退と企業をとりまく環境変動の激化により、本業の長期計画でさえたてにくくなっているのがその大きな要因ではないかと考えています。また、別な問題として年度によって支援するNPOを変えることがあります。公平性を保つためとおっしゃる企業もありますが、それは根底の部分で間違っており、目的達成にみあう最適なNPOを選ぶことで公平性を守れるのだと思います。一方のNPO側は、社会の持続的な発展や問題解決のために活動を行っているはずが、団体の活動を維持するために、短期的には寄付に頼らざるを得ないと言う、体質・経営的問題を抱えています。また、欧米の歴史の長いNPOに比較して、日本のNPOは活動歴もそれほど長くない団体が多く、団体の財政的な問題から必要な専門家を雇用するだけの十分な給与が持続的に支払えない状況にあるという経営的な問題も抱えています。このような状況により、非営利サービスのプロフェッショナル団体ではなく、有志によるボランティア団体というイメージが先行しています。企業が社会貢献部を設置することには肯定的ですが、CSR専門部を独立設置することには肯定的ですが、CSR専門部を独立設置するのは、時期早尚だと考えています。それは、企業が常に持続的に存続し発展するためにたてている事業計画や経営計画に組み込まない限り、持続的な社会的責任活動は成し得ないと考えており、これまで環境対策のみを考えていた社員を単にCSR部に異動させるだけでは難しいのではないかと考えているからです。↗

日本の企業における人材教育

日本の企業は、欧米の企業に比べて、人材の教育支援に関してアドバンテージがある(少なくとも過去にはあった)と考えています。外資系のスキルアップのための実務的研修に比べ、日本の企業の場合は新卒者に対するマナー研修にはじまり、自己啓発系の研修などを取り入れ、人材の基礎づくりに大変力をいれていると感じています。余談ですが、採用の際にスキルのみならず、人物重視の観点を採用する点も、こういった方針と関連しているのではないかと思います。

CSR報告書

講義の中で、それまで環境一辺倒であったが、2003~2005年にCSRのブームがあり、一旦環境については多くとりあげられることなくなったが、2007年のアル・ゴア氏の活動の結果で環境が再び注目されたということについてのお話がありました。かねてから、企業の環境報告書には疑問を感じていました。大抵の報告書には、企業としてすべき当たり前のことしか記載されておらず、積極的な取り組みを感じた企業はごく少数だったからです。環境に良い影響を与えない印刷物に、わざわざ当たり前のことを書いてページを増やさなくて良いのではないかと思います。最近では、環境・社会報告書や、CSR報告書に改変され、以前の環境一辺倒から、社会的な問題への取り組みや地域への還元活動が拡大されたことは大変歓迎しますが、さらにページが増えただけの企業も多く見受けられます。

吉村ひとみ氏

“CSR”とは?再考

自分自身がそうであったように「CSR」という言葉が一人歩きしていることに危機感を覚えた。もし、会社がCSRに取り組む場合、今回の講師の先生からいろいろなお話があったように、社員の一人ひとりが「CSRとは何か」を考えなければいけないと感じた。簡単なことではないと思うが、まずはなんとなく「CSRをやります」というのではなく「一人ひとり考えること」からCSRが始まるように思う。しかし、実際には会社の方針として強制的にCSRを実践することになり、「さあ、担当者が推進してください」という現状が多いと思われる。そのときは一体何から取り掛かればよいのだろうか。今回のセミナーの話にあった「まずは法令遵守から」というのは明確であり、もっともな話であると思った。事業に関わる基本的な法律を守らないで、ボランティア活動や植樹などをして意味を成すのか、という福田先生のお話にとっても納得できた。そして、「CSRとは」を考えることから始まる社員教育の普及が要になるのではないだろうか。その反面、現状としては、始まりが「PRの一環としてのCSR」でもしようがないとも思う。メリットがないと企業は動きにくく、それでも、やらないよりはましである。ただし、そのような考えから脱することができないと結局は予算が切れたら終了という実のないものになってしまうのが明確である。CSRそのものを広めていくこと、誤解なく浸透させていくことが難しいが大切なことだと感じている。

ESDについて

CSR同様、あいまいですごく幅の広い言葉だと思った。特に「持続可能な開発のための教育」という和訳の

「開発」という言葉が様々な解釈がされわかりづらくなっている。先生のお話にあったように「持続可能な開発の矛盾と限界」があり、持続不可能がみえているからこそ出てきた言葉であると思う。経済中心の活動を大きく転換しなければいけない時期にきているがそれを浸透させていくことは非常に難しいように思う。そこで、「教育」が重要になっていくのだろう。「自ら解決する学習」をしていく教育方法への転換も必要なことと感じた。特に「ファシリテーション」「対話」が大きなキーワードであることを知った。では、自分の周りでは何をしていけばよいだろうか。お話にあった「三つの公正“世代間”“世代内”“種間”」という地球の生き物全てに関わってくる大切なことだという認識が必要であると思う。

ESD×CSR?

共通して言えるのは、英語3文字の略でよけいにわかりづらくなっている気がする。意味が複雑で敷居が高くなると普及の妨げになるのではないだろうか。環境や経済に関わる人には当たり前の言葉なのかもしれないがきちんと説明できる人は少なく、世間一般の「CSR」「ESD」の言葉の認知度も低い気がする。しかし、安易に意識して誤解された認知が広まるのも懸念されるので、難しい問題だと思う。今回のセミナーを受講して、ESDとCSRの関係は、「ESDの一環にCSR」でもあり、「ESDの一部にCSR」でもあり、「CSRの一部にESD」でもあり……複雑に絡み合うものだった。同意語ではないが、とても関連性の深いものである。どちらも情勢に反映され、変化していくので自分自身で探求していかなければならないと思った。

小関由季子氏

第2回セミナーに参加して

岡本享二先生が講師の回を受講して、CSRについて考えた。事前に「進化するCSR」を読んでセミナーに臨んだが、その中で、岡本先生は次のようなことを述べていた。①CSRの“C”を、Corporate=大企業ととらえてはいけない。本来の“C”は、企業だけにとどまらないあらゆる組織、団体や自治体なども含まれる概念である。②欧米では、CSRという言葉は、CR (Corporate Responsibility) に移り、さらには、SD (Sustainable Development) に変わりつつある。①も②も、持続可能な社会の創出のためにCSRはこうあるべきだ、ということを表している。以前のCSRとは、大企業が社会に対して責任を持つべき課題について、大企業とNGO等が、対関係の中で課題解決を図っていたのではないと思う。これからのCSRは、持続可能な社会の創出という広い目標に対して、企業、消費者、従業員、NGO、公的セクター、原産地国等、さまざまな主体が協働して取り組んでいかなければならないものであろう。ただし、協働といっても、どのような形で協働するかは大きな課題である。岡本先生のお考えは、持続可能な社会の創出のためには、先進国の消費

のあり方を変えることが不可欠であり、それには消費者の行動が必要であるというものであった。たしかに、先進国の豊かな消費のために、途上国がさまざまな面で搾取的に開発されてしまえば、持続可能な発展とはいえないであろう。しかし、どういった消費が許容され、どういった消費が許容されないかについて、社会的な合意を得るのは困難である。酒やタバコを好む人もいるし、宝飾品をきれいだと考える人もいる。岡本先生も、自身の消費のスタイルを、人に強制するわけではないと述べていた。社会的合意のもとで、自主的な取組みがなされたものもある。岡本先生が挙げたテレビにおけるタバコの製品CM禁止は、たばこ事業法に基づいて、もともとタバコ業界の自主規制として取り組まれたものである(現在は財務省告示でも規制)。岡本先生に言わせれば、「国が動くのが遅い」ことのびつたりな例になるが、企業や業界には、社会の要求を察知して、真摯にかつ迅速に取組むCSR活動が求められる。民間の自主的な取組みを国の政策に位置付けるのは難しいが、さまざまな主体が協働して社会的合意を図る場(例えば円卓会議)をつくることによって、持続可能な社会の創出が目指せるのであれば、そういう部分で国が果たせる役割はあるのではないと思う。

清水直樹氏

ライフスタイルとCSR

誰もが様々なコミュニティに参加している。社会の一員として、家族人として、職場人としてなどいろんな側面がある。その中で私は自分自身のライフスタイルを明確にした後にSRについてきちんと織りこむことが大切だと考えている。私にとってCSRは結果として企業マネージメント(ワーク的)側面にすぎない。

CSR概況

CSRについて、バブルの時代のメセナと比較した議論があったがちょうど試される局面がやってきたと思う。CSRのきっかけとして、不祥事・周年行事・社長交代とどなたかがおっしゃっていたがまさにその真価が問われる経済情勢になってきた。民主主義・資本主義・貨幣など様々な価値観が揺らぐ中CSRはどうなっていくのだろうか。

本人・本家族・本業…SRについて

①本人…自分自身の「ライフスタイル」の中でどのように社会的責任を織り込み、モニタリングし、変化に対応していくかがベースではないだろうか。つながりを意識して「生きる」という普段の日常生活では希薄になってしまったものを取り戻し、再構築した上でライフスタイルを見直すことが本人の社会的責任の出発点となる。②本家族…社会との関わりをもっとも持つのが生活単位としての家族である。自分の家族としてのスタイルとそれぞれ個人としてのスタイルとの共生が前提となり家族単位のFSR(家族の社会的責任=オリジナルの造語)という考え方がもっと広がってもいいのではないかと。

③本業…もともと本来的には企業は社会の公器といわれることもあり、昔から本業を通して社会に貢献しているからこそ存在している。当然CSRについても本業及び社会的に緊急性の高いものを取り組むべきである。

CSRの場として機能する「縁側的コミュニティ」

①「縁側的コミュニティ」とは…人と自然、人と人のつながりを感じて大切に作る場としてのコミュニティで「日常」「生きる」をキーワードに自分なりのライフスタイルが見つけれられたり実践できる。縁側的とは身近で親しみ深い内一外の両義的關係、つまり内でも外でもない曖昧な空間である縁側をイメージした。CSRではステイクホルダーの関わり方やコミュニケーションの手法として有効だと考えている。②場とは…場の目的はメンバーの能力を育て、知識を蓄積・交換することでメンバーは自発的に参加する。動機はテーマに対するコミットメントや共感で継続のりえきがあるかぎりずっと続く。通常の組織やプロジェクトチームネットワークとはちがう。

手段としてのCSR

CSRは目的ではなく手段の一つである。ただ切り口として様々な可能性があるのでは表面的な議論ではなくそれぞれが実践できることのきっかけになればいいのではないかと思う。企業の取り組みを一般のお客様へ伝えたり、山中湖畔のごみ広いを行うなど、地域に根ざした草の根活動も展開している。

加藤文人氏

「対話」分析

今回の講習会で三つの対話の流れを意識した。(この三つの対話の流れそのものが広い意味でのワーク・ショップとも言えるのではないかと。)①講師と受講者の対話(一対一の対話)…通常の講習会形式であり、一般的に最後に講師と受講者の間で質疑応答がなされる。②受講者間の対話(ワーク・ショップの仲間内の対話)…今回は成功したとは言えないが。③講師群と受講者群の対話(会場全体の対話)…受講者からの感想や質問に対し、次回講演会の冒頭で当該講師から意見や回答を提示すると言う双方向性は大いに評価できる。

水野義高氏

地球に優しいCSR

回り道でも、社会のお役に立つということをしっかり心に留めて実践しなければ、結果的に自分で自分の首を絞めることになってしまいます。しかし、私達は、他の企業にはCSRを実践してもらいたいと思っても、自分の企業、一社ぐらいは、ルールを守らなくてもわからないだろう、許されるだろうと考えていることに気づきました。ごみの分別をするのがめんどうで、お弁当の残りにそっと蓋をして捨ててしまおうとする私のようなものです。もっとも、区内は10月からごみ処理法がかわり、燃えないごみも燃えるごみと一緒に焼却できるようになりました。システムがかわって私の負担も減り、ほっとしています。新しい処理方法で、システムを変えていくことも大切と学びました。太陽電池を活かした街づくりをするように、地球に優しい新しいシステムを作り出すことも企業の役割ですね。

木邑恭子氏

参加者の声③

今後の課題および反省点

対話について

持続可能な開発のための教育(ESD)の難しさをあらためて考えさせられました。セミナーで、「教えられる学習」ではなく「自ら解決する学習」である、また「参加型の学びの場」であると、先生方から説明がありました。自分の頭では理解したつもりでしたが、毎回後半のワークショップで、3人1組、5人1組でお互いの意見、感想を述べ合い、対話すること心掛けましたが、結果は十分とはいえなかった。その原因を考えてみると、(1)各人の意見、感想についての発言が、ほんの一部の人だけ。(2)時間が10分~30分と限られ、自分の頭の中の整理ができない。(3)意見を引き出すファシリテーターが居ない。(4)先生の講義を受け、休憩を挟んだとはいえ、理解するまでに至っていない。(5)対話するにも、机を動かし向き合うまでの戸惑いが拭えない。ESDの本質を理解するためには、10人1組程

度で、ファシリテーターを指名し、一人一人の考えを引き出し、各人が対話できるように演出することが必要と思った。

来年のセミナーの改善点

(1)机の配置…講義もワークショップも、同じ体形(お互いの顔が見える円形-講義時のみU字形)。(2)ワークショップの人数は、1組10人程度とする。(3)ワークショップの時間は、対話を含め1時間は必要。(1人5分程度)(4)資料は事前に配布され、参加者は必ず事前に目を通すこと。

増田忠雄氏

ワークショップ

毎回少しずつ違うワークショップの方法をまなべた事はとても有意義でした。しかしこれもこちらの力量のなさで、模索している新しい方法が見出せませんでした。アイスブレーキングなどももう少し多く取り入れていただけたら嬉しいと思いました。行政・市民・大学・企業と連携して活動する機会が多いのですが、いかに早く親しみを持って、全体の話合いの場作りができるかは、一体感を持った活動にとても大事な事だといつも感じています。

今後への期待

講座受講の際に「専門知識がそれほどないのですが、ついていきますか?」と尋ねた上で受講したのですが、時々専門用語が分からず先に進めない状況がありました。私たちも毎年、市民の人材育成講座を市民や東大・お茶大等大学機関、企業ETCと連携して開催して

おります。その際、先生方ともどもいつも心がけている事は内容のグレードは落とさずに「中学生」でも分かる言葉と、説明です。この講座は多分大学院生くらいを受講生のターゲットに開講されているように感じました。事前予習の必然性を募集時に教えていただけた方が良いように思います。(岡本講師の説明はとても分かりやすかったです。)ESDIについては具体的にどうすることがわかりませんでした(特に子どもの環境教育)。

来年のCSRセミナー開催に向けて

各分野の専門家によるレクチャーは興味深かったが、具体的なCSRを行っている複数の企業担当者(できたら外資系と日本の企業)がパネラーとなり、各企業のスタンス、CSRの解釈、実施内容などを発表する場を設け、CSRの実状と課題などが比較しながら考えられると、基礎知識がない我々のような参加者でも理解しやすかったかと思われる。

梅本美奈子氏

学校教育の中で行われる環境教育には学校単位の独自性に任されている現状では、地域が意識を持って恒常的な環境教育への取り組みを推進しなければなりません。その為の仕組みや活動を行っている事例や、具体的方策を教えてくださいました。文京区の地域温暖化計画の策定として、真っ先に取り組むべきは中小企業のCSRです。地場産業が医療機器と印刷の街である文京区では8割以上が零細中小企業です。また日本もまさに8割の零細中小企業で成り立っています。理想と現実の狭間で悩む多くの善意ある経営者の立場に立ったCSRをぜひご教授いただきたいと思います。

我々市民団体もない知恵を絞って考え続けています。資金も時間も人材も少ない中小企業ですが、個人とはまた違う視点も必要であり、とても大きな課題だと思います。またある意味大企業以上に崇高な理念を持たない事にはCSRの取り組みは難しいと感じています。

匿名

今後の課題

専門分野の違う素晴らしい講師の方々のお話を無料で聞け、考える機会を頂いたこと大変感謝しております。次年度以降のCSRセミナーに関して提案があるとすれば、下記のような点です。(1) 1回のセミナーを完全に1つのテーマのみとして集中講義と討議ができるようにすることで、より深く1つのコンセプトの考察を行うことができるのではないかと考えます。(2) 1回のセミナーが終了するとにリアクションペーパーをその場で書くのではなく、短い(A4半分~1ページ程度)のレポートを提出することにより、提出者本人にもセミナーに参加して知識を得た事や、疑問を感じた、考えたことが残るのではないかと思います。

吉村ひとみ氏

今後のセミナーへの要望

実例について知りたいです。日本での取り組みはもちろんヨーロッパなど世界の事例も聞いてみたいです。

小関由季子氏

学説を根拠にした議論を

CSRについて論じる際には、トレードオフ関係に着目する必要があるという福田秀人先生の御指摘は、重要な視点であると感じた。昨今、企業は賃金を抑制し、配当等株主への還元を重視する傾向にある。環境面の技術開発や国際貢献活動等の「攻めのCSR」に目を奪われることなく、その裏で、製品安全や非正規雇用の問題等「守りのCSR」が疎かになっていないか、人件費を含めた広い意味での付加価値を、株主、経営者、労働者、消費者の間で、適正に分配するにはどのようにすればよいのか等について、我々はしっかりと考えていく必要がある。また、セミナーにおいて、経済学者ベッカーが日本の長期的雇用関係の経済合理性を積極的に評価していることについての紹介があったが、米国において顕著な株主利益中心の一元的企業概念や、経営と所有のあり方についても、さまざまな学問的蓄積があるため、そうした学説を根拠にした議論をすることができれば、

ESDについて考えたこと

ESDという言葉は初めて知りました。阿部先生の解説でもありましたが、範囲が広すぎて、ひとくくりにするのは無理があるのではないかと印象です。

CSRとESDについて考えたこと

CSRとESDの位置関係をもう少し分かりやすく説明すべきでしょう。私の理解では、ESDは、CSRを含めた人間活動全般について理解した人材教育を意味しているように思いましたが、どうでしょうか。あるいは、CSRはESDに含まれるといった関係に思えました。

「理論編」と「実践編を」

属性が様々な受講者を前提とすると、「理論編」と「実践編」の別を明確にしたカリキュラムにした方が良いのでは?両方受講したい人もいるでしょうが、理論をしっかりと固めたい人や、実践例を豊富に知りたけの受講もアリでは?「実践なくしてCSRなし」とすれば、なおさらでしょう。一方で、やる気はあるが、企業活動などで内外にプレゼンをする立場の人などは、しっかりした理論づけを学びたいのではないのでしょうか。

植村篤道氏

さらに理解が深まったのではないかとと思われる。リーマンブラザーズの破綻に象徴される今回の金融危機は、ワシントンコンセンサスの限界を示したものであると考えることもできるが、グローバル化や情報化の流れの中で、富の偏在を克服し、市場経済の健全な発展を図るにはどのようにすればよいのか、今後の経済社会システムを考える上での大きな課題である。

廣瀬信己氏

ワークショップの進行について

ワーク・ショップと言う考え方は素晴らしいし、今回の講習会(2~4回の各講習会後半のプログラム)でそれを実践しようとした意欲は評価できる。ただそれに配分された時間が足りなかったため、ワーク・ショップの良さが伝わらなかったのではないかとコメントが5回目(最終回)の講習会で語られた、そうであったと私も思う。しかし、それだけであったのだろうか。まずは今回の講習会全体を振り返って見る。(1)2~4回の各講習会後半のワーク・ショップは、元々このプログラムに割り当てられた時間が少なかつた上に、机・椅子の移動にも時間を取られた為、各グループ内で、各参加者の発言時間がかなり少なくなり、自己紹介と簡単なコメントしか述べられず、そのコメントを「対話」迄成熟出来なかった。(2)一方、2~4回の各講習会前半の講演者も持ち時間が余りなく、重点項目に絞って説明するなど工夫はあったが、かなりはしょった印象は拭えなかった。↗

ワーク・ショップの双方を並列的に実施し易い環境が整っていた。この様な理想的な会場を利用出来ればそれに越したことはないが、通常の会場では、講習会の途中で今回の様にワーク・ショップ用に机・椅子を移動し島を作る事になる。そこでは島を作るタイミングが重要となる。今回の講習会では講演の途中で一旦休憩が入り、休憩後も漸く講演が続き、そして講演が終わってから机・椅子の移動がなされた。この休憩と机・椅子の移動に伴い受講者の思考はその都度中断させられたが、もし机・椅子の移動を休憩の直前に行い、机・椅子の移動を兼ねた休憩としたならば思考の中断は一回で済んだし、休憩中に、講演を聴くと言う心構えからワーク・ショップを行うと言う心構えへと、気持ちの切り替えが出来、休憩後から直ぐにワーク・ショップに入れたのではなからうか。それには講演が終わった後に休憩を挟むことになるが、もし講演が90分より短ければ講演が終わった段階でワーク・ショップ用に席の移動を行い休憩に入る事とし、講演が90分を超える場合は、↘

(3)従って、講習会全体から見ると、2~4回の各講習会ではワーク・ショップを割愛し、講演に全時間を割り当て、5回目の講習会を、例えば「ESDとワーク・ショップ」と題し、すばりワーク・ショップそのものを説明された方が、全体としての纏まりも有ったろうし、受講者も得るところが多かったのではなからうか。ワーク・ショップはESDの実践プログラムとして極めて有効であり、その意味で今回の講習会(2~4回の各講習会後半のプログラム)でそれをトライした意欲は評価できる。一般的にワーク・ショップを実践するにはそれなりに纏まった時間が必要となるが、短時間で実践できるワーク・ショップの方法が開発出来ればワーク・ショップを普及し易くなると考えられる。そこで、今回のトライアルをベースにどの様な改善が可能か考えてみる。(1)場所的な問題と他講演者との時間の配分問題:最後の講習会では太刀川記念館3階多目的ホールが使用され、会場にはワーク・ショップに相応しい島が事前に出来ており、講演と↗

講演の中間に短い(5分程度の)トイレ休憩を設けるなど工夫をしても良いのではないか。(2)受講者に対する説明の問題:今回の講習会(1~5回)全体の中でのワーク・ショップの位置づけを「事前に」「明確に」受講者に説明した方が良かったのではないか。今回は時間を節約する意味で、ワーク・ショップで対話するネタや切り口を参考として講師から提示があった方が良かったのではないか。

水野義高氏

学生の参加を

次に本セミナーが開かれる時には、もっと学生が参加できるようにしてほしいです。参加対象が企業に長年勤めている方々から社会人2年目の方々まで、職種もNPOの方々から教職の方まで豊富だったのに対し、学生が少なかつたような感じがします。企業の課題を考える事で、今後の学生生活に大きな変化があると思います。これが一点目です。

他分野へのアピール

CSRの重要性についてはすごくよくわかりましたが、それを他の部門にアピールするだけの説得力が今ひとつである気がしました。そこが心残りです。

岡田健氏

参加者の声④

実践の現場から

新潟上越地域でのエネルギー環境教育

私は、新潟県上越地域でエネルギー環境教育の地域活動を進めてきた。大学を中軸として、地域の企業、行政、NPO、学校、市民を組織し、小・中学生対象の学習プログラム作りという着地点をめざした活動であった。

私が実践してきた地域活動は、当初はCSRとは異なると考えていたので、教育のなかにCSRを取り込むにはどのような可能性があるのかという問題意識のもとにこのセミナーに参加していた。しかし、セミナーでCSRを次第に理解するにつれ、この地域活動はCSRそのものではないかと認識するにいたった。そこで、タイトルを「地域活動におけるシステム作りの条件」とした。その理由は、地域活動で最も苦労したのがシステム作り(ネットワーク作り)であったためである。地域活動では連日連夜の業務が続き、苦労は大きかったが、最終的には、まがりなりにも活動を一応終結することができた。上越地域は大学を中心としたシステム作りを可能にする条件が存在していたことを再認識した。以下、地域活動におけるシステム作りの条件について検討する。

地域活動「小・中学校における地域社会との連携をはかったエネルギー教育・環境教育プログラムの作成」では、(1)学習プログラムの作成(2)地域ネットワーク育成の支援(3)エネルギー環境教育に関する啓発・情報発信の3つの柱を立てて進めた。

カリキュラムについては、これを視野に入れた学習プログラムとして提案することとした。また、3つの柱は個々に独立して存在しているのではなく、相互に有機的な関連をもつ。即ち、(1)学習プログラム作成をゴールと位置づけ、(2)地域ネットワーク育成の支援と(3)エネルギー環境教育に関する啓発・情報発信は(1)学習プログラム作成を具体化するための、組織づくりおよび条件づくりと位置づけた。また、(2)と(3)は個々の独立した意義もある。

次に、(2)地域ネットワーク育成の支援に関連している成果の一端を述べる。➤

(a) 関係機関や地域社会との連携について:上越市・妙高市の行政、民間企業、NPO、実践校と連携した上越教育大学エネルギー環境教育研究会を設立し、研究活動をすすめる基礎づくりを行った。平成18年度においては顧問としての副学長の参画により、本研究会が大学組織の一環として活動しているという姿勢を地域社会に向けて明確に示した。

(b) 研究体制の構築:上越・妙高地域で資源・エネルギー庁外郭団体への実践校応募支援を行った5校を含む6校(小学校4校、中学校2校)が実践校として採択され、実践校校長に運営委員として参画をお願いした。本学とエネルギー教育実践校との連携を中心とした組織を設立し、相互に交流が行われ良好な関係がつけられた。

(c) 指導者などの人材の育成:地域の学校教員に参加を呼びかけ、指導者研修会を行った。研修会では、東北電力の協力を得て、上越地域のエネルギー関連施設を見学した。9月には同様の研修会を上越地域外のエネルギー関連施設について行った。

また、実践校については、随時情報交換を行い、出前・出張授業の実施や、授業に参加して助言を行うなどして教員の実践力向上に努めた。本学において開催されたエネルギー環境教育研究フォーラムに、広く参加を呼びかけ、エネルギー環境教育の知識の普及に努めた。その他にも講演会や学習会などを行って、エネルギー環境教育に関する知識の普及や、エネルギー環境教育に対する関心を高めるよう努めた。

このようなシステム作りを可能にした条件について検討を加える。

第1は、上越地域が環境問題に熱心な土地柄であることが考えられる。上越市は全国で2番目に早くISO14001を取得し、ドイツの環境首都であるフライブルグ市とともに地球環境大賞を受賞している。地元のNPO、行政、市民が環境問題の先進地域としてじっくりと耕してくれた土壤が存在していたのである。➤

第2は、資源・エネルギー庁の外郭団体の事業であるエネルギー環境教育の地域拠点大学として3年間の活動という責務の遂行が考えられる。

第3は、大学が日常的な活動として地域貢献を視野に入れて地域に根付いたサービス活動を継続してきたことである。例えば、出前授業、公開講座、フレンドシップ事業など精力的にこなしている。平成19年度には、地域から大学振興会が立ち上がり、地域あげて大学を支援する体勢ができつつある。

第1から第3の条件が相俟って大学は地域の中でリーダーシップを発揮することができ、CSRのシ

ステム作りを可能にしたと考えられる。これらのシステムは一旦できたからと言ってそこに安住してしまうのでは、システム本来の機能が弱くなってしまふ。システムの機能を維持していくには、不断のメンテナンスが必要である。組織の中の人も入れ替わりがあり、当初の精神がそのまま引き継がれるというわけにはいかない。常にCSRの地域活動の初心に戻り、周囲の状況と照らし合わせて活動を遂行していく必要がある。

滝山桂子氏

セミナー内容の職場への還元・活用

2003～2005年の修士課程を通して研究活動を行った「都市近郊緑地のマネジメントシステム」というテーマ。

対象地である図師小野寺歴史環境保全地域では、様々な企業が、緑地の維持管理活動や、谷戸田での農耕作業に携わりつつありました。

自然環境の維持という目的の中に、行政や専門業者、地域住民だけでなく、企業の手をも借りていこうという動き、つまり企業側に見てみたところの「環境活動」が、私が始めて触れたCSRの切り口でした。

その後、企業のCSR報告書の情報収集や、参考書などから、CSRの本質は、企業活動の全ての過程において「環境に対して持続可能かどうか」という視点を盛り込む、経営そのものの問題ではないかと理解しました。

現職でも、そのような考え方に基づいて環境活動に関わりたいと考えているものの、ボトムアップだけではなく、トップダウンから図る意思の統一も必要であることを痛感しています。また「環境」への考え方が、国の教育によるものではなく、個人や家庭の考え方によるという現状の日本で、同じベクトルを持ち、CSR活動に取り組むことの難しさも、実感しています。↗

本セミナーに通い、教育の必要性については、改めて考えさせられました。私自身、幼少の頃自然豊かな国に住む機会があり、水が森からできていること、森から空気ができていること、人が当前のように手に入れているものが、自然の恵みからなるものであること、またそれらは有限であり、未来へ繋いでいかなければ、人が、私が、生きていけないことを体感しており、現在の考え方に繋がっています。地球環境問題を自分の問題として捉えられるかは、教育に大きく左右されると思います。また、都市再生の講義の中の「対話」というキーワードが印象的でした。何か解決すべき事柄があるとき、私たちは対話を繰り返しているということ、改めて認識しました。「対話」という手法を意識的に活用し、より良い仕事を創っていかれたらと思います。

今後、自分が所属する会社において「CSR」を推進していこうと大きく考えるのではなく、同じ考えを持つ仲間を見つけ、自分の仕事の範囲で、できるときに、できることを、できるだけ行っていきたいと思います。その過程で、本セミナーの内容を振り返り、大いに活用させていただきたいと思っています。

横山明季氏



ESD研究センター紹介

ESD研究センター(ESDRC)は、ESD(Education for Sustainable Development)が多様な社会活動の中で実質的に機能することを目標として、2007年3月に立教大学に設立されました。また、2007年6月には、『「持続可能な開発のための教育(ESD)」における実践研究と教育企画の開発』として、平成19年度の文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選定され、多種多様な研究活動の展開が国内外から期待されています。

ESD研究は、環境・経済・社会のあらゆる領域をカバーする学際的研究ですが、従来の研究は、個々の領域での研究活動が主となることが多く、総合的な「教育の再方向付け」の提言、教育システムの開発と実践、指導者・教育者の人材養成、研究活動・実践活動のネットワーク形成までには至っていません。当研究センターは、「環境教育」と「開発教育」を切り口として、人文・社会科学的視点からこれらの課題にアプローチし、アジア・太平洋地域におけるネットワークをさらに強化し、この分野の「ハブ」機能を果たすことを目指しています。

また、研究および実践活動は、アジアチーム、太平洋チーム、CSRチーム、統括チーム、のテーマ別に4つのチームで行い、定期的な研究会に加え、シンポジウムや講演会、ワークショップやセミナーなどの開催を企画運営しています。

活動の内容や研究および実践の成果等はウェブサイトで随時更新しております。こちらもおあわせてご覧ください。

<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/>



CSRセミナー録

「CSR！次のステップへー持続可能な社会の創出のためにー」 2008年度 連続セミナー

発行日:2009年3月13日

発行人:阿部治

立教大学ESD研究センター CSRチーム研究員

発行所:立教大学ESD研究センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL/FAX:03-3985-2686

Email: esdrc@grp.rikkyo.ne.jp

URL:<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/index2.html>

印刷:株式会社 白峰社

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-49-6

TEL:03-3983-2312 FAX:03-3983-2307

Education for Sustainable Development Research Center, Rikkyo University

